
愛は、恋に恋すること

ライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛は、恋に恋すること

【Nコード】

N4319F

【作者名】

ライト

【あらすじ】

お知らせ この作品は、四月から全編集を兼ね書き直しをします。より読みやすく、わかりやすくします。内容は変わりませんが、最初から投稿し直す形になります。ご了承ください。——あなたは幸せですか？あなたは好きな人のために自分の命をあげられますか？愛情を知らずに育ったお金持ちの少年——也は毎日ケンカばかりしていた。ついには人を平気で殺すほどに。しかし、一人の少女によって彼の人生は大きく変わることになる。驚きと涙が出る感動の恋愛小説。——申し訳ありませんが、しばらく休載させて頂きます。

勝手ですみませんが、ご了承ください。

第一章：愛情を知らない少年

あの日のことは、今でも鮮明に憶えていた。

十二月二十日。

雪が降り注ぐ寒い中、伊集院家の屋敷に大勢の人達が来客した。

入り口の前に立っていた執事やメイドが、その人達が入ってくるたびに頭を下げ、一人が奥の部屋へ案内する。

その部屋はとても広く、上にはシャンデリア、壁にはたくさんの絵が飾られており、その下には何種類ものブロンズ像が立っていた。

実はこれは、どれもこれも父と母が趣味で集めたものばかりだった。

これは決して楽しいパーティーでも舞踏会でもない。

なぜなら、皆それにふさわしいドレスもおしゃれもしておらず、黒を基調とした服を着ていた。

部屋の奥には、二つの大きな写真が飾られてあった。その周りにはたくさんの花によって包まれ、下にはいくつもの線香が煙を上げていた。

そう、これはお葬式なのだ。

一カ月前、伊集院家の屋敷に一本の電話がかかってきた。

その電話はロシアに住んでいた祖父の総一郎からのものだった。

その息子の一男は、電話が終わったあと、妻の明美と共に急いでロシア行きの支度をした。準備ができた二人は、息子に一言言い残し、裏庭にある自家用ヘリに乗り出て行った。

それからの連絡は一つもなかった。

数週間後、またもや総一郎から電話がきた。電話に出た屋敷の執事の一人小林は、総一郎の話しを聞き思わず受話器を落としてしまった。

信じられないことを聞かされたのだ。

一男と明美が死んだと……。

「一也様……」

一人のメイドが二人の写真の前に座っている一男と明美の息子に声をかけた。だが、一也は無視した。いや、聞こえなかったのだ。

それほどまでに、二人の写真を見ることに集中していたのだ。

できれば、二人の遺体を見たかったが、どうしても見つけることができず、写真だけ飾ることになったのだ。

写真の前で体育座りをして、泣くことも、寂しがることもせず、ただじっと二人が笑っている顔を見つめていた。

「かわいそうに。一也くんはまだ3歳だったね。こんなにも早くにご両親を亡くしてさぞや悲しかろうに」

「でも、しっかりしてますわ。普通の子ならすぐに大声で泣き叫ぶのに」

「伊集院家の跡取りとして頑張ってほしいですな」

伊集院家は昔ながらの大金持ちだ。

総一郎は、世界各地にある会社を指揮するトップの存在だ。会社で何をしているのかは表ざたにしておらず、詳しいことは分からない。その跡取りとして、一男に継いでもらうはずだったのだから、原因は分らず明美と共に死んでしまった。

一也は、涙が出てきそうになるのを必死にこらえていた。

出かける直前に、一男から言われた言葉が頭から離れないのだ。

『いいか、一也。男は決して泣いてはいけないんだ。泣くのは弱い証拠だ。強くなれ、一也。強くなって、自分の一番大切な人を守る立派な人になりなさい』

父から授かった言葉を胸に、一也はひたすら二人の笑顔を思い出していた。

一男と明美が死んでからは、一也は執事の小林と何人かのメイドたちによって大切に育てられてきた。

毎日勉強をして、少しずつ運動をして、跡取りとしての教育をさせられた。

しかし、それ以外は自由だった。

欲しいものがあればなんでも手に入れることができ、したいことがあればすぐにさせてくれた。

普通の人から見れば、なに不自由なく贅沢に暮らしているのかもしれない。

だが、一也はどんなことをしても楽しさを感じることができなかった。

小林やメイドと一緒にいても一人でいるような孤独感が常に纏わりついていた。

まるで、この世界には自分一人しかいないような……。

小学生になった一也は、お金持ちが通う聖宝学園の初等部に入學した。

その入学式で、一也はまた寂しさを感じた。

皆自分のお父さんやお母さんがそばにいて、楽しそうに手を繋いでいた。

一也のそばにいるのは執事の小林。

どうして自分だけ違うのだろうかと思えてきそうになった。

一也はそのままエスカレーター式に中等部に進学した。

この聖宝学園は全国トップクラスの偏差値を持ち、中学生ですでに、国語・数学・英語は高校レベル、その他ロシア語・フランス語・ドイツ語・イタリア語などを勉強する。

一也は、テストでは常に一番を取って優秀な成績を残していた。

だが、反対に毎日のようにケンカをするようになった。

気に入くわない者、邪魔な者、肩がぶつかった者など誰であろうと容赦なく殴った。何回か救急車が来ることもあった。

伊集院という名前はどの名前よりも強く有名で、適うものはおらず、誰も逆らえなかった。先生ですら、注意も叱ることもしなかった。

三年生になってからはとうとうケンカで頂点に上りついた。

それでも、一也の心は満足感も達成感も湧くことはできなかった。

本来ならば、そのまま高等部へ進学するのだが、一也はそれを拒み、普通の私立青南高校へ入学した。

入学早々、一番強いと言われている不良のところへ行き、ケンカを売ったら簡単に倒してしまった。

結局、ここでも自分の心は変わらず、一也は自分が何をしたいのか分からなくなった。

だが、一也の人生が変わるのはここからだった。

愛情がどんなに暖かく、美しいものか。

友情がどんなに大きく、偉大なものか。

それは、ある一人の少女によって知ることになる。

第二章：本物の親友

『あなたは、幸せですか？』

声が聞こえる。優しく、暖かい声が。

一也は夢を見ていた。暗闇の中、一人ぽつんと立っている自分がない。

『あなたにとって、幸せってなんですか？』

また声が聞こえた。

いったいどこから聞こえるのだろうか。辺りを見回したが分からなかった。

そのとき、一筋の光を見つけた。一也はその光に向かって手を伸ばした。しかし、どんなに手を伸ばしても届くことはできず、その光はゆっくりと消えてしまった……。

一人のメイドが大きな白いカーテンを開き、朝日が部屋いっぱい差し込んできた。その光のせいで、瞼が眩しく燃えるようになった。

「おはようございます、ご主人様。学校に行く時間です」

その声で眠たい目を擦りながら一也は体を起こした。

なにか夢を見たような気がしたがどうしても思い出すことができなかった。

一也は、三人は入れそうな大きなベッドから降りて、部屋の隅にある洗面所へ向かった。

カーテンを開けていたメイドは、ベッドのシートを取り払い、部屋から出て行った。すると、入れ替わりにまた一人、青いブレザーの制服を持っているメイドが入ってきた。

顔を洗ってタオルで拭いている一也は、タオルをその場に投げ捨て、制服に着替えた。残った寝間着とタオルは制服を持ってきたメイドが持っていた。

支度のできた一也は自室から出て、奥の部屋へ足を進めた。

そこはお葬式があつた部屋で、父と母の部屋でもあつた。中はあの時と変わらず、毎日変えているたくさんの花で埋め尽くされていた。

一也は二人の写真の前に歩み寄り、手を合わせ、ゆっくり目を閉じた。

「おはようございます、父さん、母さん。今日から俺は二年生だ。毎日が退屈だけど、俺なりに一生懸命生きる。そして、父さんと母さんが死んだ原因を突き止める。じゃ、行ってきます」

一也は目を開け、笑っている二人の顔を見たあと部屋から出た。

部屋から出ると、目の前に執事の小林が立っていた。

「おはようございます、一也様。朝食の準備が整いました。どうぞ、こちらへ」

黒いスーツに赤い蝶ネクタイを着た小林は、この屋敷にいるただ一人の執事だ。歳はすでに60を超えて髪は白くなっている。

一男と明美がいたころはもつとたくさんの執事がいたが、何人かは総一郎のところへ行った。

総一郎とは今でも別々に暮らしており、今どこにいるのかは分からない。いつも、突然にやってくる。それが迷惑だと知らずに。

「ああ。そんなことより、父さんと母さんの遺体は見つかったのか！ 原因は判明したのか！」

一也は小林にむかって年上だというのに吐き捨てるように言った。

「も、申し訳ありません。只今捜査中であります」

「ちつ。一刻も早く見つけ出せ！ 見つけ出せなくても、死因だけでも判明しろ」

「はっ、かしこまりました」

小林は姿勢良く頭を下げた。一也はそれを睨みつけるように見下し、朝食を食べに向かった。

一也は朝食を終え、学校へ行く準備をし、玄関へ向かった。

「いつてらっしゃいませ、ご主人様」

一也が出かけるときは皆が総出で送り迎えするのだ。

「ああ、行ってくる。あと、小林」

「はい。なんでもございましょう」

運転手に車の準備をさせていた小林は、疑問に思いながらこつちを振り向いた。いつも学校へは車で行っているのだ。

「今日から学校へは一人で行く」

突然の言葉に小林は驚き、焦ってしまった。

「そ、それはなぜですか。学校までどうやって……」

「バイクで行く。この前免許取ったろ」

一也は春休みの間に免許を取りに行っていたのだ。本来ならば、春休み期間中に取得できるものではないが、お金で簡単になんとかしてくれた。

「し、しかし、一也様の身に何かあったら……、事故にでもあったらどうするのですか？ そんなことがあれば、一男様と明美様に顔向けできません」

「心配するな。お前のせいではない。自分の意志で言っているんだ

からな。それに、事故に遭うほどヘタではないしな」

一也は携帯とイヤホンを取り出し壁に掛けてあるヘルメットを被り、音楽を聴きながら扉を開けた。

「行ってくる」

「は、はい。いつてらっしゃいませ」

一也は表に止めてある大きな青いバイクに跨り、エンジンを駆けて学校へ走らせた。

初めてのバイク通学は快適だった。うるさい執事もおせっかいなメイドもない。最高の一時だった。

なにより、風を切り、景色を眺め、加速してぶっ飛ばすのは気持ちがいい。

一也はどんどんスピードを上げて、事故に遭うんじゃないかというスリルを楽しんだ。

三十分してあつという間に青南高校へ着いた。バイクを中へ入れると登校中の生徒みんなが注目してきた。無理もない。本当はバイクでの登校は許可されていないのだ。みんな珍しがって見ているのだ。

バイクを自転車の駐輪場へ停め、鍵を閉め、ヘルメットを外すと後ろから声が聞こえた。

「おーい、一也ー!」

中にはなにも入っていないであろうペチャンコのカバンを片手に、一人の男が片手を上げてこっちに近づいてくる。

こいつがいつもうるさいのだ。正直消えてほしい。

「気安くしゃべりかけてくるな。殺すぞ」

「まあまあ、そんなに怒るなって」

彼の名前は茨城駿。一年のころから一也に話しかけるようになり、勝手に友達にされている。ケンカはまだしたことないがけっこう強いらしい。

「おい。これお前のバイクか!？」

駿はいきなり一也のバイクに触りだした。

「触るな!」

一也は駿の手を払い、おもいつき蹴り飛ばした。駿は少し吹っ飛び、仰向けに倒れた。

「イテテ、分かったよ。もう触らない」

駿は手でお尻を払い、カバンを拾った。

「じゃ、先に教室へ行ってるぜ」

駿は片手を上げて、靴箱へ向かった。

一也は駿を睨みつけた。

理解できなかった。今までの奴らは、あんなことされればすぐにキレて、殴りかかってくる。それが当たり前だと思っていた。だが、あいつは怒らない。効いていないのだろうか。それとも、負けるのが怖いのだろうか。

一也はヘルメットを座席の中に入れ、教室へ向かった。

今日は初日だということで始業式がある。

出るのが面倒ということで、一也は教室でサボることにした。隠れもせず、窓際の一番後ろの席に座っているが、たまに先生が見回りに来ても、一也には逆らえず、皆見なかったことにする。

どいつもこいつもお金と力には適わないのだ。

「ああ、暇だな。なんかおもしろいことないかな」

駿は一也の隣の席に座りながら壁にもたれかかり、足を机の上に乗せていた。一也はこいつと一緒にいたい訳ではないが、なぜか駿もサボっている。こいつのことは無視して、携帯で音楽を聴くことにした。

「なあ、一也。お前彼女とか作らねーの？ お前けっこう人気なんだぜ。強くて、かつこよくて、頭もよくて。おまけに金持ちだもん

な。あんなバイク買うつくらいだし」

一也は駿の言うことをすべて無視した。

「はあ、お前さあ、いつも一人で楽しいか？ 人は決して一人では生きていけないんだぞ」

そのときだけ一也は駿の言葉に耳を傾けた。

人は一人では生きていけない？ そんなの嘘だ。自分はいつも一人だった。いつも一人でやってきた。このとおり一人で生きているじゃないか。

「一也。オレと友達になれよ。オレと一緒にいれば絶対楽しいぜ」

一也は立ち上がり、駿を睨みつけて言った。

「二度と俺にしゃべりかけてくるな。今度話しかけてきたらお前を殺す」

そう言って教室から出て行った。

時間ではまだ始業式をしているはずだ。教室には行きたくないので学校で一番のお気に入り場所へ行くことにした。本当は今の時期はあまり行きたくないのだが仕方ない。

一也は階段を一番上まで上がり、鉄の扉を開けた。お気に入りの場所とは屋上のことなのだ。

小さいころから空や雲を見ることが好きで一日中見ていたこともあった。さすがに今の時期はまだ肌寒かった。

「クソ寒いな。なんで俺がこんな寒い思いしなければならないんだ」

体を丸くして前を見ると先客がいることが分かった。見た感じ、いや、見たままの三人の不良がタバコを吸っていた。

一人は茶髪、一人は坊主、一人はモヒカンだった。

よくあんな髪型にできるなと感心してしまった。こいつらも始業式がだるく、ここでサボっているんだろう。

だが、邪魔だ。自分のお気に入りの場所に敵が入ってくるのは気に入くない。

「おい、そのバカども」

三人の不良はこっちを一齐に睨みつけてきた。

「ここは俺の場所だ。目障りだから今すぐ消えろ。そのタバコの吸い殻も持って帰れ」

三人の不良は立ち上がり、唾を吐いて威嚇してきた。

「ああ？ なめてんじゃねーぞ。お前が消えろや！」

坊主頭の不良が殴りかかってきた。一也はその勢いを利用し、力ウンターを鼻にくらわせた。

「ぐわっ！」

坊主頭の不良の鼻から血が出だした。一也はそれがおもしろくニヤッと笑った。

「このやる！」

次は茶髪の不良が後ろから殴りかかってきた。一也は左足を軸に体を回転させ、右回し蹴りを頭にくらわせた。茶髪の不良はその場に倒れ込んだ。

「なんだよお前ら。めっちゃ弱いな。これなら俺が中学のときでも勝てるぜ」

「てめえ、殺してやる！」

モヒカン頭の不良が鉄パイプを手に襲いかかってきた。上からおもいきり振り落としたが、一也は左によけて右拳でおもいきり腹を殴った。

「うおっ！」

モヒカン頭の不良は鉄パイプを落とし、両手で腹を抑えて、口から涎が垂れながら倒れた。

一也は鉄パイプを拾い上げ、モヒカンを引っ張って顔を上げさせた。

「痛っ、わ、悪かった。助けてくれ」

「お前は武器を使った。つまり、殺し合いをしたいんだろ？ この鉄パイプが俺の頭に当たれば俺はどうなっていたかな」

一也は鉄パイプをモヒカン頭の不良の顔に軽く当てた。

「す、すまなかった。み、見逃してくれ」

「恐らく死んでたろうな。死ぬことがどんなものかお前に教えてやるよ」

一也は鉄パイプを掲げ、振り落とした。

「うわあああああ！」

キンコーンカーンコーン

一也は振り落とすのを止めた。どうやら始業式が終わったらしい。体育館からぞろぞろと生徒たちが出てくるのが見えた。

「今殺したらあとがうるさいな。良かったな命拾いして」

モヒカン頭の不良は本当に殺されると思ったのかズボンが濡れていた。

一也は教室に戻るために屋上から出て行った。

そのとき一也は微かに笑っていた。

ホームルームが終わり、今日はこれで解散となった。明日から授業だと思つとやる気がなくなる。

すでに高校の勉強は中学でしていたからすべて分かっているのだ。

では、なぜ嫌なのに学校に行くのかという小林やメイドがうるさいからだ。

例えば、気分が悪いと言って学校を休めば、いちいち世界一の医者と呼んだり、慌て騒いだり、ずっと治るまで一緒にいたりする。

前に、二人のメイドと無理やり一緒に寝かされたこともあった。

屋敷に戻つても暇なだけなので、午後は新しいバイクで気分転換をすることにした。好きなアーティストの音楽を聴きながら街中を飛ばした。

いろいろなところにバイクを走らせていたらすっかり暗くなってしまった。時刻は午後八時を回っていた。

小林たちも心配するだろうから今日はこれで帰ることにした。そのとき、携帯が鳴った。

「どうせ小林だろ。心配だからっていちいちかけてくるなよな」

しかし、かけてきたのは小林ではなかった。番号は登録しておらず、見たこともないものだった。出てみると知らない男の声だった。

「伊集院一也だな？」

「だったら」

「今すぐ学校に來い。お前のメイドが死んでしまっぜ」

こいつ何言ってるんだ。うちのメイドが捕まるわけない。めったに屋敷から出ることがないのだ。出るとしたらたまの休みか買い出しのときくらい。

すると、携帯から女性の声が聞こえた。

「一也様。助けてください」

そのとき、一也はおかしなことに気づいた。

「こいつが死んでもいいのか？」

「いいだろ。今すぐ行く。待っている」

一也は携帯を切り、余裕の気持ちで学校へバイクを走らせた。

三十分して学校へ着いた。バイクを止め、どこにいるのか探した。すると、また携帯が鳴った。

「俺たちは体育館にいる。今すぐ來い」

ということは相手は複数いるのか。

一也はニヤつと笑いながら体育館へ向かった。

体育館の明かりは点いておらず、一也はどうとうと中へ入った。

そのとき、天井の明かりがいきなり点いた。体育館には十人以上の不良たちがいた。

「よくもうちの仲間をボコボコにしてくれたな。ただじゃ済まさねーぞ」

真ん中のリーダーらしき男が話しかけてきた。確かに見覚えのある奴がいる。今日屋上でケンカをしたあの茶髪と坊主とモヒカンの三人がいた。

どうやら仕返しにきたらしい。

「つまり俺を殺したいんだろ。さっさとやってやるよ」

「ふふ、迂闊には手を出せねーだろ。こっちは人質がいるんだぜ」

一也は走り出し、一番近かったやつをぶつとばした。

「ぐわっ！」

殴られたやつは鼻を抑えてその場に寝転がった。手の隙間から血が出てきた。

「てめえ、なにしゃがる！ 人質がどうなってもいいのか！」

一也は笑いながら、リーダーを見た。

「人質なんて最初っからいないだろ。そんなこと分かってんだよ」
不良たちは凶星をつかれ驚いた。

「なんで分かった？ 声を聴いただろ！」

「聴いたから分かったんだよ。うちのメイドは俺のことを一也様なんて言わないからな」

「じゃあ、なんで来たんだよ。なんにも用はねーだろ！」

一也はまた笑った。そして、ずっと睨みつけた。

「決まってるだろ。お前らを……殺すためだ」

一也は無差別にどんどん不良たちを倒した。泣こうが喚こうが容赦なく殴る蹴るを繰り返した。生きていると思われるものは確実に息の根を止めた。

そのときの一也は、まるで鬼のようだった。人が死んでも何とも思わず、むしろ喜ぶように笑っている。

すでに三人は血まみれになり横たわっている。ちょっと疲れたそのときだった。

パーンッ

乾いた音が体育館中に響いた。

一也は左腕を抑えその場に倒れた。リーダーが銃で一也を打ったのだ。

「お前ら！ 今すぐこいつを殺してしまえ！」

しかし、不良たちは動けなかった。一也が起き出したのだ。左腕を抑えながらゆっくりとリーダーのほうを向いた。

「……………くっ、……………よくも、……………やってくれたな……………。お前は……………本気で……………殺してやるよ……………」

そのときの一也の目は、獲物を見つけた野獣のような鋭い目をしていた。

「ちっ、なにしてる！ さっさと殺せ！」

その合図で全員がかかってきた。一也は左手を使わず、殴ったり蹴ったりと対抗したが、とうとう捕まってしまう袋叩きにあった。

「うっ……………、ぐっ……………、うわっ……………」

一也はその場に倒れたが、三人に捕まれ顔を上げさせられた。

「さっ、死ぬことがどんなものか教えてくれるんだろ」

モヒカン頭の不良は鉄パイプを両手で握り締めた。

「だったらお前が死んで教えてくれよ！」

一也は目を瞑って覚悟を決めた。

俺ここで死ぬんだ。意外と短かったな。まだ、父さんと母さんの死因もつきとめていないのに……。

「やめろ〜!」

「うわっ!」

鉄パイプがこない。

恐る恐る目を開けるとモヒカン頭の不良は倒れて、変わりに駿が立っていた。

「一人相手にこんな人数は卑怯だな。大丈夫か、一也?」

そう言つと、駿は一也を押さえつけていた三人をいとも簡単に倒した。

「な、なんでお前がここにいるんだよ」

「話しはあとだ。まずはごみを片付けるぞ」

「誰がごみだ! 二人とも殺してしまえ!」

残っている奴ら全員がかかってきた。

「おりゃ〜!」

駿はやはりけっこう強く、どんどん倒していった。一也も負けて

られなかった。

「このやる！」

一也は腕を使わず、脚だけで倒していった。

十分くらいして全員を二人で倒してしまった。残るはリーダーだけだ。

「なかなかやるな。だが、これで終わりだ」

リーダーは銃を二人に向けた。

だが、一也は撃たれる前に素早く近づき銃を蹴り飛ばしてリーダーを殴った。

「うおっ！」

一也は倒れそうになるリーダーの腕を取り、片手で十の字固めを決めた。

「イテテ、クソ！ なにしゃがる！」

駿はその姿に大笑いした。しかし、一也は冷静な目をしてリーダーの腕の骨を折った。

「うわああああ！」

腕を外すとリーダーは自分の腕を抑え転がり込んだ。

一也はその間に銃を取った。

「お、おい。一也。ちょっとやりすぎじゃないか？」

一也は駿の言葉を見殺してリーダーに近寄り銃を向けた。

パンッ パンッ

一也は躊躇なく、リーダーの両足を撃った。

「ぐわああああ！」

リーダーは苦渋の叫び声を上げ、痛みを耐えていた。両足からどろどろと血が溢れ出てくる。

「一也！ やりすぎだ！ もうそのへんでいいだろ！」

一也は駿を睨みつけた。

「うっ！……」

その目を見て駿は腰がひけた。これ以上文句を言ったら殺すという目をしていた。

駿はその場から動けず見ることしかできなかった。

一也は銃の弾数を確認した。

「あと四発か……」

一也は再び銃をリーダーに向けた。

リーダーは逃げる事ができず、涙目になっていた。

「ご、ごめんなさい。ゆ、許してください。もうしません」

しかし、一也は笑みを浮かべながら引き金を引いた。

パーンッ

「あああああああ！」

今度は折れていないほうの腕に当たり、リーダーは大の字になって倒れた。

「あと……三発」

「ハア、ハア、た、頼む。た、助けてください」

リーダーは大粒の涙を流しながら動かない手足を必死に動かそうとして逃げようとした。

「言つたろ。お前だけは本気で殺すつて。だから、痛みを味あわせて苦しみながら地獄へ送ってやる」

パーンッ パーンッ

「あああああ！あああああああああ！」

「あと一発」

リーダーの腹に二発当たった。血が至るところから溢れ出し、回りは大きな血の水溜まりができていた。

「痛え……、痛えよ……」

一也はリーダーの上に仁王立ちになり、頭に銃口を向けた。

「さようなら。俺にケンカ売ったことを後悔するんだな。あと……俺はどんなに人を殺しても警察に捕まることはない」

パンッ

リーダーはピクンと体が動いたあと、ゆっくり目を閉じ動かなくなった。

一也はリーダーを見下ろし、微笑んだ。

駿は一也に恐る恐る近寄った。

「お、おい、一也。どうする気だよ。人を殺したんだぜ。マジで捕まるぞ」

しかし、一也は駿の言葉が聞こえないのか、今だに笑っていた。

「おい、一也！ さっさと逃げるぞ！ 警察がいつ来てもおかしくないんだ」

すると、遠くのほうからパトカーの音が聞こえた。だんだん大きくなりこっちに向かっていているようだ。

「ほら、来てしまったぞ。どうするんだよ」

駿は一也の目を見たときたん息を呑んだ。

一也が一瞬悪魔に見えた。人を殺してもなんとも思わず当たり前のような顔をしていた。

「駿……」

ようやく一也が口を開いた。

「お前はどこかに隠れてる。俺がいいと言うまでそこにいるんだ」

「お、お前はどつするんだよ。逃げるのか？」

「逃げてもすぐに捕まる。俺の血が飛び散っているんだから調べられればすぐに分かる。心配すんな。いい考えがあるんだ。さっさと隠れる」

「わ、わかった」

駿は体育館の用具入れのところに隠れた。

やはり警察はここに来たようだ。体育館に入ってくる靴の音がどんどん聞こえる。

一也はどうするんだろうか。やっぱり捕まったんじゃないだろうか。

三十分くらいして用具入れの扉が開いた。そこには一也が立って

いた。なにこともなかったかのように平然としている。

「出ていいぞ」

用具入れから出てみると、警察の姿はなく、不良の遺体どころか飛び散った血まで綺麗に拭き取られていた。

「どうしたんだよ。てっきりお前が捕まっただって思ってたのに」

「……金だ。三億円払ったら簡単に引き下がったよ。どいつもお金には弱いな」

「……だから、捕まらないのか……。でも、どうも思わないのか？人を殺しておいてなんとも思わないのかよ」

一也はゆっくりと駿を見た。

「なんとも思わねーな。強いていうなら……おもしろかったぜ」

駿は背中に寒気が走ったのを感じた。初めて一也を怖いと思った。いつも一人でクールにしている不良ではなく、人間ではないようなものに見えた。

「そんなことより、なんでここに来たんだよ」

そこにはいつもの一也がいた。それを見て駿は少しほっとした。

「バイクが見えたんだ。お前のバイクが学校に向かっててな。試しに学校行くとやっぱりバイクが置いてあって、なぜか体育館の電気が点いてたから行ってみたんだよ」

一也は納得し体育館から出た。それにつられて駿も出た。

一也はバイクに跨りエンジンをかけた。

「いやゝ、お前のバイクやつぱかっこいいな」

駿は触らず、羨ましそうに見ていた。

「お前、怪我してるな」

駿の顔はところどころ青く腫れていた。

「ああ、こんなもん唾でもつけたら治るだろ」

「俺の屋敷に來い。治療してやる」

「えっ？ 大丈夫だって。すぐに治る」

「うちのメイドは手際がよくてな。すごく優しいんだ。みんな綺麗で美人だし」

「えっ、マジで？ じゃあ、お邪魔しようかな」

「じゃあ、乗れよ。送っていつてやる」

「いいのか？ あんなに触らせなかったのに」

「特別に許してやる。さっさと乗れよ」

「お、おう！」

駿はヘルメット無しで後ろに座った。

「かつこいいな。最高だぜ」

「行くぞ。しっかり捕まってる」

「やつほーい！」

一也と駿は屋敷に向かって走り出した。

「おい、駿」

「なんだよ」

「お前、なんで怒らないんだ。俺が蹴り飛ばしても、文句を言ってもお前は怒らずいつも笑っている。なんで反抗しないんだよ」

「なんだ、そんなことか。言ったる。人は決して一人では生きて行けない。親父が言ってたんだ。人生の中で持つべきものは親友。そう、心から信頼でき、自分のすべてをまかせることができる最高のパートナーを探せてな。オレは一目で分かったぜ。お前がオレの最高のパートナーだってな！」

駿は両手を大きく伸ばし雄叫びを上げた。

「俺がお前のパートナーか……」

二人はお互いに認め合い、大声で笑った。

第三章：運命の出会い

あの事件以来、一也は駿と一緒にいることが多くなった。今では毎日のように一緒にいる。少しずつ心を開くようになり、自分の思うことも正直に言うようになった。

たしかに駿といると楽しかった。冗談を言い合ったり、からかったりとだんだんと昔のように笑うようになった。

校内ではケンカ最強コンビとして一躍有名になり、それは街中に広まっていった。

「いやゝ。一也の屋敷はすげゝな。でかいし、居心地良いし、なによりメイドは優しくかわいいし最高じゃねゝか」

あのあと一也は自分の屋敷を紹介し、駿はそのまま泊まったのだ。お互いのことをよく知るためだと言って駿は陽が昇るまで無駄話をし、次の日の学校をサボることになった。

だが、一也は駿のことを少しは知ることができた。

どうやら駿は、今はアパートで一人暮らしをし、実家は九州にあるらしい。

わざわざこっちの高校を受験したのはバンドメンバーを結成し活動するためだそうだ。しかし、結成に成功してもまったく売れずすぐに解散してしまった。

親にはまだ活動していることにして仕送りを貰ってなんとか生活しているらしい。言いたい放題言ってすぐに帰ったら格好つかないか

ら言えないようだ。

そんなこんなしているうちに夜は更けていったのだ。

「なあ、また行っていいか？ 頼む！ オレ実は寂しがりやでな。一人じゃ眠れないんだ。お願い！」

一也はあきれて言った。

「お前の目的はうちのメイドだっていうのは分かってる。まったくしょうがないな」

あつという間に六月になった。

雨の回数が増えるこの季節に、青南高校では文化祭の準備が始まった。午前は授業、午後からは準備となる。

「あゝ、文化祭の準備なんて面倒くさいやな。しかも、ウチのクラス喫茶店だぜ」

五月の内にクラスの出し物を話し合った結果喫茶店になった。

女子の提案でメイド服やウエイトレスの服を着て接客したいらしい。男子は接客か料理作りで、一也と駿は料理は作れないから接客になったが練習などせずサボっていた。

「別に適当にすればいいだろ。なにもせず見てるだけでもいいし」

一也は図書室の窓から外を眺めた。どす黒いもわもわとした雲が大きな滴を落としながら右から左へ通り過ぎた。

「それもなんだが寂しいな。せつかくだしかわいい子接客して仲良くなりたいな」

駿も一也のように空を見上げた。

「お前はそういうことばかりだな。だったらさつさと告ってそこらへんのやつと付き合えよ。あいつはどうだ。美奈津嘉穂とか」

美奈津嘉穂は、クラスでは暗くちよつと太ったおとなしい性格の子だ。いつも席に座り本を読んでいる。

「えゝ、嫌だよ。もつとかわいい子がいいなゝ。オレは探しているんだよ。運命の人が現れるのを」

「運命の人ねゝ」

その日はなにもせず、図書室で時間が過ぎるのを待つだけだった。

この日、一也は少し遅れて学校に着いた。久しぶりに天気がよく公園のベンチで寝ていたのだ。

仰向けになると、雲一つない青い空に朝日が混じり、鳥が自由に飛び回っていた。

小さいころ翼が欲しいと思ったことがあった。鳥のように空を自由

に泳ぎたいと思った。その願いが叶わないと知ったとき絶句したのを今でも覚えている。

学校に着いたときはすでに二時間目が始まっていた。

そんなことは気にせず一也は余裕で廊下を歩いていた。

職員室の前を通るとちょうど中から一人の少女が出て来た。学校では今まで見たことがない顔だった。

だが、一也はどこかで見た覚えがあった。少し考えてみたがどうしても思い出すことができず深く考えるのは辞め忘れることにした。

一也は授業の途中から教室に入りみんなの視線が自分に集まるのが嫌いだった。ということだったん屋上に行って時間を潰すことにした。

静かで自分の足音しかない階段を登り鉄格子の扉を開けた。

軽やかな風が吹いたと思ったら人影が見えた。そこには駿がいた。なにやら何かを見ているようだ。

「おい、駿」

声をかけると駿は一瞬びくついてゆっくりこっちを振り向いた。

「よ、よう、一也。なんでここにいるんだ？」

駿はあきらかに動揺していた。なにかを隠している顔だ。

「お前こそ、屋上でなにしてんだよ。授業でなくていいのか？ た
だでさえ頭悪いのに」

「いやいや、お前こそでなくていいのかよ」

そのとき、駿は黒いものをサツとポケットに入れた。それを一也
は見逃さなかった。

「おい、今何隠したんだ？」

「えっ？ い、いや、なにもか、隠してないぜ。き、気のせいだろ」

「いや、確かに何か隠した。ちよつと見せてみるよ」

「だ、だめだつて！ ちよつと待てよ！」

一也は駿から無理矢理ポケットにあるものを奪った。入っていた
のはたんなる手帳だった。

「なんだよ。ただの手帳じゃねーか。ん？」

手帳の1ページ目には『青南高校美少女一覧手帳』と書かれてあ
った。

「……なんだ、これ？」

「うっ……、オレの秘密が……」

ページを捲ると1ページ1ページ丁寧にたくさんの女子の顔写真
とプロフィールが書かれていた。どれもこれもかわいい女子ばかり

だ。

「お前も暇な奴だな。こんなの作るくらいならもつと他のことに時間を使えよ」

「うるせー。バカにするな。これはオレの宝だ。返せよ」

駿は一也の手から手帳を奪った。

「しょぼい宝だな。それで、なんでここでサボってんだよ」

「だっておもしろくないし。お前いないし。暇だし」

しかたなく、午前中は屋上でサボることにした。

午後に入り文化祭の準備が始まった。二人は適当に他のクラスの出し物を見に行くことにした。

「みんなよくやるよな。お疲れさんって感じ」

どのクラスもみんなで一致団結して頑張っていた。

お化け屋敷や出店、ゲームコーナーに小さな演劇もあった。一通り見終わって歩いていたら一つのチラシが目に残った。

「ん？ なんだ。舞台発表者募集中？」

そこには体育館でやる舞台発表の募集案内をしていた。バンドや

演劇などなんでも良いそうだ。締め切りは今週中だからあと三日だ。

「駿、お前なんかできるか？」

「ふふ、前に言っただろ？ こう見えてギターが弾けるんだぜ」

「そっぴやそんなことも言っただな。けど、俺だって弾けるぜ。暇つぶしにしてたんだ」

「マジで？ じゃあ二人で出てみるか？」

「まあ、考えとく」

「なんだよ、やろっぜ。きつといい思い出になる」

二人はギターなどの話しをしながら屋上へ向かった。

屋上にはすでに先客がいた。そこにはあの職員室の前で見た少女だった。制服からしておそらく同じ二年生の女子だと推測できた。

彼女はサラサラで肩まで伸びた綺麗な髪が風でなびき、制服のスカートが揺れながら景色を眺めていた。

「駿。あいつ知ってるか？ お前のバカ手帳に載ってない？」

「バカ手帳じゃないから！ 青南高校美少女一覧手帳だから！」

「どちらにしろバカバカしいからバカでいい」

「よくないから！ でもオレも見たことないな。あんなにかわいい

なら一目見て憶えるはずなんだが……」

確かにかわいかった。パツチリとした瞳、おそらく化粧をしていないだろう綺麗な肌、一言で言えば美少女だ。

駿は手帳を何度もぱらぱらと捲っていた。

「……の、載ってない……。な、なぜだ……。このオレが見逃すはずがー！」

駿は両手で頭を抱え絶句した。

「まったく。こういうときに使えないんじゃ、お前も使えないな」

「オレはお前の何なんだ！」

「でもよ」

「おい！ 無視か！」

「俺、どこかであいつ見たことあるんだよな」

「マジかよ？ 誰なんだ！ 羨ましいぞチキショー！」

「ちょっと黙ってる。さっきからうるさいな」

一也は腕を組んで考えてみたがやっぱり思い出せなかった。

「ダメだ。忘れた」

「なんだよそれ！」

さっきから駿が叫んでいるが彼女は俺らの存在に気づかず未だに外を眺めていた。

「ちつ、それにしても邪魔だな。追い返すか」

「は？　ちょ、ちょっと待てよ。あんなかわいい子を追い返すなんてお前酷すぎるぞ。少しは優しくしろよ」

一也は駿の言葉を見無視して彼女に近寄った。すると、ようやく一也たちの存在に気づいた。

「あつ、……ど、どうもです……」

彼女は一也を見て何かを思い出したような顔をして行儀よく頭を下げた。

そんなことはどうでもいいように、一也は冷たい視線で睨みつけた。

「……出てけ」

「え？……」

「出てけ。ここは俺たちの場所だ。もう二度とここには来るな」

「お、おい、一也。そんなこと言わなくていいだろ」

彼女の瞳は少しずつ潤いはじめ、一つの滴が頬をつたった。

「……ご、ごめんなさい」

彼女は駆け足で屋上から出て行った。

「あゝあ、泣かしちゃった。お前は誰であろうと容赦なく泣かすんだな。でも、かわいかったな。また逢えるかな」

一也はしばらく開け放たれたままの扉を見つめていた。

このとき初めて申し訳ないような感じがした。追い出せばいけないような……。

放課後、一也と駿はいつも行っているお店に行くことにした。

その途中駐輪場に停めてあるバイクを取りに行くと言った少女が木陰の下で気持ち良さそうに地面に座りながら本を読んでいた。

「おい。あの子屋上にいた子じゃないか。やっぱかわいいな」

すると、彼女は一也たちに気づき急いで立ち上がって去っていった。

「あゝあ、行っちゃった。お前を怖がっているんじゃないか？」

「……行くぞ」

「えっ？ ちょっと待てよ」

一也は彼女を見たくなかった。今まで自分がやってきたことを全て覆し、あのときの自分を蘇らせる気がした。あの地獄を再び……。

文化祭まで二週間と二日。どのクラスも準備で忙しそうにしていた。

一也と駿はそんなことは気にせず、トイレに行き土日の休みに何をするか検討中だった。

「なんかおもしろいことないかな。最近暇で暇でしょうがない」

「だったらまたバンド組めばいいだろ。解散しなければよかったんだ」

「しょうがないだろ。じゃあ、二人で組むか」

「それは面倒だな」

教室に戻ると喫茶店の準備は着実に進めていた。

壁や周りは綺麗に飾り付けられ、テーブルや椅子も揃っている。お茶やコーヒーもすでに専門店で注文しており、お菓子などの材料も買うだけとなっていた。

みんな楽しく浮かれた気分だったが、一人蚊帳の外にいる生徒がいた。あの少女だ。一人端のほうでみんなが騒いでいるのを羨ましそうに見ていた。自分もあの中に入りたい。しかし、勇気が出ず話しかけることができないようだ。

「あれ？ あの子ウチのクラスなんだ。気づかなかったな。今までいなかったような……」

彼女はドアにいた一也に気づき、サッと外に目をやった。

「あちゃ〜。おい、一也。ちょっと謝ってこいよ。あれは相当傷ついているぜ。なっ？」

駿は一也の手を引っ張り彼女の前に立たせた。

彼女はチラチラと一也を横目で見たあと、外に目を向けるのを辞めうつむいた。

一也はじつと見下していると彼女のほうから口を開いた。

「……こ、ここも、……ですか？」

「はっ？」

彼女の語尾は怖がるように震えていた。

「わ、私は、……ここにいてもダメなんですか？ 私に居場所はないんですか？」

手を前で固く握り締め必死に耐えていた。瞳からは大粒の涙を一滴ずつ頬をつたって流していた。

一也はその顔を見て記憶の奥底に沈めていた昔の自分の姿が一瞬甦った。そっくりだった。あのときの自分と同じだった。

「一也は我慢ならず彼女の手を掴んだ。

「ちょっと来い」

「えっ?……」

「一也と彼女は走って教室から出て行った。

「お、おい。待てよ!」

「一也は廊下にいる邪魔者を無理にどかし階段を登った。鉄格子の扉を開けると強い風が吹いてきた。

「二人は屋上のだ真ん中でようやく立ち止まった。

「あ、あの……」

「……もう泣くな」

「えっ……」

「一也は彼女にそつと振り向き瞳を真っ直ぐに見つめた。

「もう泣いたりするな。泣くのは弱い証拠だ。強くなれ」

「彼女は手で目から出る涙を拭き笑顔で返事をした。

「はい!」

すると、ようやく駿が追いついた。

「ハア、ハア、まったくいきなり走りやがって……。それで、いつまで手を繋いでいるんだ。お二人さん」

その言葉ですつと手を繋ぎっぱなしだったことを思い出しすぐに離れた。彼女は顔を真っ赤にしていた。

「それで一也はこの子を許したんだな。うんうん、それでいいんだよ。よろしくな」

「は、はい」

それから三人は、放課後行きつけのお店に行く約束をした。

放課後。とうとう駿は先生に怒られた。文化祭の準備をせずサボっていたからだ。

職員室に呼び出され担任の熊谷に床を竹刀でバシバシと叩いて俺がいかにも怖いだろうと見せ付けていた。

あいかわらず一也は有名なお金持ちということで怒られなかった。

説教は二十分続き、駿は肩を落として出てきた。

「クソ！　なんで俺ばかりが怒られるんだ！　世の中不公平だぜ。なあ、一也。お前の力でオレも怒られないようにしてくれよ」

「できると言えばできるが……、それは俺の楽しみがなくなることになる」

「お前はオレが怒られるのを楽しんでいるのか！ まっ、いいや。さっ、あの子のところに行こうぜ！」

一也と駿は教室に向かった。

彼女は廊下側の一番前の席にちょこんと座って待っていた。

近づいていくと彼女も俺たちの存在に気づいた。

「ごめんね、遅れて。説教が長くて」

「いいですよ。待つのは慣れてますから」

彼女はそっと一也を見た。それに気づいた一也は無表情で彼女を見ると彼女はすぐにうつむいてしまった。

「それじゃあ行こうか。せっかく同じクラスになったんだから仲良くしようぜ」

「はい」

三人は教室から出て、まず駐輪場へ向かった。

「す、すごいですね。こんなに大きなバイクに乗っているんですか」

「ああ、まあな」

一也はキーをまわしてエンジンをかけた。

「こいつの家、伊集院っていう大金持ちなんだぜ。だからなんでもおごってくれる。友達になって損はないぜ」

「今お前の本性が分かった。駿は俺のお金目的で友達になったんだな」

「えっ？ いや、違うぞ。決してそんなことはない。お前はいいやつだから友達になろうと思ったんだ」

「お前、後ろに乗って」

一也は駿のことを無視してシートの中からヘルメットを取り出し渡した。実はもう一個持っていたのだ。

「は、はい」

彼女は一也の後ろに座りヘルメットを被った。

「本当に違うんだ。一也。お前を一目見たとき……」

駿はまだ言い訳をしていた。

「しっかり捕まってる」

「はい！」

彼女は一也のお腹の前に手を組んでしっかり捕まった。そして、ゆっくりとバイクを走らせた。

そこでようやく駿は二人が先に行っていることに気づいた。

「あ。ま、待てよ、一也。オレも乗せてくれ」

「いつもの所に来い。待ってるぞ」

「待ってくれ」

一也と彼女は駿を置いて行ってしまった。

「い、いいんですか？　かわいそうですよ」

「大丈夫。目的地はここからそんなに遠くない。あとで俺のおごりになるのは分かっているしな。お前も好きなもの頼んでいいからな」

「えっ？　い、いいですよ。自分で払います。多少のお金は持つてきてます」

「ふん。じゃ、それは着いてから決めな。それでも払えるんだつたら払ってくれ」

バイクで五分走らせ、ある喫茶店に着いた。そこら辺にある喫茶店と違って高級感溢れるお店だった。

一階と二階の外には木製のテーブルと椅子が並べてあり、ガラス越しに中を見ると店内はふかふかのソファが並んでいた。

彼女はちょっと驚いていた。

「ここは俺の行きつけの一つでな。ここのお茶はおいしいんだ」

一也と彼女は中に入った。中は適度な温度に保たれており快適だった。

俺たちに気づいたウエイトレスが近づいてきた。

「いらっしやいませ、一也様。いつものところでいいですね？」

「ああ、それと。あとで一人のバカが来ると思うからこっちに案内してくれ」

ウエイトレスはくすくす笑って頭を下げた。

「かしこまりました。こちらへどうぞ」

いつものところというのは二階の裏の奥の場所のことだ。ここは特等席で景色が良く、海が見えるのだ。

「わあ、綺麗ですね」

彼女は喜び、身を乗り出して海を眺めた。さらさらな髪が潮風によって揺らされた。

そのときウエイトレスが話し掛けてきた。

「一也様の恋人ですか？ とてもかわいい方ですね」

その言葉に苛立ち一也はウエイトレスを睨みつけた。

「も、申し訳ありません。メニューでございます。失礼しました」

ウエイトレスはそそくさと行ってしまった。

一也は冗談でもからかわれるのが嫌いだった。自分をバカにするものは誰であろうと許せなかった。

「さ、座れよ。何か頼もう」

一也と彼女は椅子に座りメニューを開いた。そのとき彼女は思わず声を出してしまい、すぐにメニューを閉じてしまった。

「どうした？ もう決まったのか？」

彼女は顔をうつむいて正直に話した。

「そんなにお金がありません」

一也は鼻で笑い、ウエイトレスに注文した。

五分後、甘い香りがするアップルティーと綺麗にふんわりと焼けているホットケーキが二人分運ばれた。

彼女は驚いた。自分の前にもアップルティーとホットケーキが並べられているのだ。

「おいしいから食ってみな。俺のおごりだから遠慮しないでいいぞ」

「あ、ありがとうございます」

彼女が笑顔でお礼を言ったとき、ようやく駿が到着した。

「ハア……、ハア……、この野郎。よくも置いてったな。めちゃくちゃ疲れたぞ！」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫。一也のおごりでたらふく食べるから」

そう言っ て駿は席に座った。

「おっ、おいしそうなもの食べてるじゃん。オレもこれにしよう。すいませ〜ん！」

駿も同じものを頼み食事を始めた。

「どうだ？」

一也は彼女に聞いた。

「はい。とてもおいしいです。でも、本当にいいんですか？ おごってくれて……」

「いいよ。俺たちから誘ったんだ。おごるのは当然だ」

「ありがとうございます」

食事を終え、食後のミルクティーを飲んでいるときだ。

「そういえば自己紹介がまだだったね。オレは茨城駿。よろしく」

「俺は伊集院一也」

「私は一ノ瀬渚と申します。よろしくお願いします。一也さんとは前にもお会いしましたよね？」

やはりそうだったか。しかし……、

「悪いな。確かにどこかで会った気はするんだが思い出せないんだ」

渚は残念な顔をした。

「そうですか……。……でも、少しでも憶えてくれて嬉しいです」

「ねえ、渚ちゃん。オレ今まで渚ちゃんのこと見たことないんだよね。どうかしたの？」

渚は少し考え、意を決し話を切り出した。

「実は、……私は生まれたときから体が弱くてある持病を持っているのです。そのせいで、なかなか学校にも行けず……。一年生のときはほとんど学校を休んでました」

渚は俺たちを心配させないようにしているのか、表情は笑っていたが心の奥底では悲しく泣いているように見えた。

そのとき、駿が勢いよく立ち上がった。

「よし、今からこの出会いに乾杯しようぜ。ほらほら、二人ともカップ取って」

二人は立ち上がりカップを取った。

駿は軽く咳払いをして、口の前に拳を作りマイク代わりにした。

「えゝ、テスト、テスト。只今マイクのテスト中」

そのやり取りがおもしろく思わず吹き出してしまった。

「えゝ。今日は熊谷に怒られる不運なこともあったが、新しい仲間一ノ瀬渚ちゃんと知り合うことができたことに感謝し、乾杯したいと思います。では、乾杯！」

三人はカップを軽くぶつけ合った。この瞬間、三人の絆は固く結ばれた。

第四章：幼なじみと友達作り

「……うつ……、くつ……、……」

一也は震えていた。

暗闇の中、一人地べたに座り込み、体育座りをして奥歯を噛み締めていた。

どんなに力強く体を抑えても、その震えを止めることはできなかった。

不思議と涙は出てこなかった。ただ、怖いだけだった。

恐怖が体の奥まで蝕んでいくのがわかった。

やられる。殴られる。もう嫌だった。

すぐに逃げ出したかった。しかし、逃げたくてもどこに逃げれば……。……。

行くところも心休まる場所もない。どうすればいいのだろうか。

この地獄は、いったいいつまで続くのだろうか……。……。

ジャリ、ジャリ、

背後から足音が聞こえた。

またやられる。またあの苦しみが始まる。気が狂いそうなほどに恐怖がより強くなった。

誰か……助けて……。

一也は勢いよく体を起こした。全身汗だくで、息も荒くとり乱れていた。

そつと自分の額に手をやった。

またあの夢を見た。まだ怖がつているのだろうか。まだ克服していないのだろうか。どれだけ強くなればいいのだろうか。

「クソッ！」

一也は拳をベッドの上に強く振り下ろした。いつまでも成長しない自分に腹がたった。

毎度毎度この夢を見ては恐怖が甦る。

なにが足りない。なにが俺を強くする。強いつてなんだ。

どんなに考えても解決策は思い浮かばず、小さく舌打ちをした。

一也はベッドの横にある冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出すと、いつきに飲み干した。

少しずつ落ち着きを取り戻すと、いつのまにか汗もひいていた。

一也は学校へ行く支度をした。そのあと、今日もあの部屋に向かった。

いつものように手を合わせ、ゆっくり目を閉じた。

「おはようございます。今日もあの夢を見てしまった。まだ、弱いということなのだろうか。ならば、どこまでも強くなる。誰であろうとケン力を売るやつは容赦なく殺す。それが俺の強さだ。父さんの言つとおり世界一強くなってやる。……では、いってきます」

ゆっくりと目を開けると、二人の写真を見て部屋を後にした。

朝食を終えた一也は、玄関の横にある引き出しからバイクの鍵を取り出した。

「いってらっしゃいませ、ご主人様」

「いってらっしゃいませ、一也様」

小林とメイドたちは今日も総出でお見送りをした。

「ああ、いってくる」

一也が扉を開けたそのときだった。

「おっはよう！　一也！」

後ろから誰かがいきなり抱きついてきた。だが、一也は驚かなかった。誰か分かっていたのだ。毎度どこかに隠れてはこうしてくる。

一也はあきれて言った。

「重いから離れろ。滋」

「そんなに照れなくていいのに。それに、レディに向かって重いなんて失礼よ」

「いい加減にしないと殺すぞ」

「わかったわかった。そんなに怒らないの」

そう言うのと、滋は一也の首に回していた腕をそつと解いた。

彼女の名前は三千院滋。一也の小さいころからの友達で、屋敷が近く、よく一也の屋敷に遊びに来ていた。言わば幼なじみだ。

女の子なのにおしとやかさがなく、いつも元気で活発すぎる。だが、とても優しい心を持っており、正義感が強い。

滋の父は警察庁長官なのだ。

「ねえ、昔みたいにまた一緒に学校行こ」

「バカかお前は。もう違う学校なんだ。一緒に行ったら遅刻するだろ」

滋は一也と違って、エスカレーター式に聖宝学園の高等部に進学したのだ。

滋はなぜ手で口を抑え笑っていた。

一也は意味が分からなかった。

「いつも学校サボったり、遅刻したりしているくせに……。だってバイクの後ろに乗せてよ。ねっ、お願い？」

滋は可愛い表情で一也におねだりした。しかし、

「断る」

滋はどんなに頼んでも無駄だとわかり、がっかりした。

「もう、いじわるね。昔はあんなにかわいかったのに」

滋は目を閉じ、昔を思い出していた。

一也はそれを無視して言った。

「早く行かないとお前も遅刻するぞ。生徒会長」

聖宝学園は代々成績がトップのものが生徒会長を務めることになっている。つまり、今の聖宝学園の一番は滋になる。

しかし、次の試験でトップが変われば生徒会長も変わることになる。皆、この生徒会長になるために頑張っていると言ってもいいくらい

にすごいのだ。

生徒会長になれば、将来すぐに幹部クラスまで昇りつめることができるのだ。それほど名誉なことであり、三年間務めることができるができれば総理大臣になることもできると言われている。

「分かってるわよ。本当は一也が生徒会長になるはずだったのにね」

「辞めて良かったよ。面倒なことはしたくないしな」

滋は時間を確認すると、一也に近づき頬に軽くキスをした。

「じゃ、行ってくるね。いつか一也のファーストキス奪うから覚悟しててね」

扉を開けて滋は出て行った。自分の高級車に乗り、見えなくなるまで窓からずっと手を振っていた。

一也も何も入ったいない鞆を取ると外にでた。

「……行ってくる。あと、小林」

「はい、なんでもございましょう」

小林は一步前に出ると、片手を胸にやり頭を下げた。

「滋を二度と屋敷に入れないようにしろ。敷地を跨ぐのも禁止だ」

一也は顔には出していないが心の中では激怒していた。本来なら即殺すのだが滋にはどうしても手を出せない理由があるのだ。

小林は少し戸惑い、恐る恐る答えた。

「……はい。かしこまりました。三千院の者とかけよっておきます」
それを聞くと、一也はヘルメットを被り学校へ向かってバイクを走らせた。

「おはよう、一也！」

教室に入ると駿がいきなり話し掛けてきた。

こいつも朝から元気なやつである。

「ああ」

駿と違ってやる気のない返事をする、一也は窓際が一番後ろにある自分の席に座った。

駿はその前の席に座った。

「なあ、一也。さっきある噂を聞いたんだ。なんだと思う？」

「さあ。なんだろうな」

駿はにやにやしながら自信たっぷり話した。

「このクラスに転校生が来るんだって！」

「へえ」

「一也はどうでもいいかのように返事をする、肘をついて外に目をやった。」

「なんだよその反応！　せつかくいい情報持ってきたのに。少しは驚けよ」

「マジ？　転校生がくるの？　目が合ったら殺そ」

「一也はあいかわらず外を見て、口だけ驚いたふりをした。」

「全然驚いてないし！　しかも、なにげに怖いこと言ってるし！」

「転校生なんて別にどうでもいいだろ。そんな奴ほっとけ」

駿は腕を組むと不気味に笑い始めた。

「ふふふ。オレの情報はそれだけではない。なんと、美少女だそうだ！」

「へえ」

「なんだよその態度！　しかも、お前と同じ金持ちらしいぞ。かわいくてお金持ちなんて最高だな。とうとうオレの運命の人が現れたのかも」

「お前に運命の人なんて現れねーよ」

「なにげにひどいこと言ってるぞ！」

「おはようございます。一也さん。駿さん」

いつものように丁寧な言葉遣いで渚が挨拶をしてきた。

「おはよう、渚ちゃん」

渚は一也を一目見ると、挨拶を返さないとわかり少しがっかりした。

「なに話してたんですか？」

「今日転校生が来るんだって」

駿はまたもやにやにやしながら話した。

なにがそんなに嬉しいのだろうか。

「入ってきたら盛大に出迎えてやろうぜ」

「それで目が合ったら殺すんだと」

「それ言ったのはお前だろ！」

すると、渚はいつもと違う真剣な目で駿を見た。

「やめてください、駿さん！初めてこの学校に来たのですから、きつと緊張しています。もっと優しくしてください！」

「オレじゃないのに……」

駿は机の上に頭を乗せ、うつぶせになって落ち込んだ。

そのとき担任の熊谷が入ってきた。

「ホームルームを始める前に、今日は転校生を紹介する。ある事情でこの高校に通うことになった。入ってきて」

全員が扉に注目した。一也だけは外を見て、駿は目を輝かせながら渴目していた。

ガラスと扉が開き、髪が長く綺麗な制服を着ていかにもお嬢様という感じのした美少女が入ってきた。

彼女は黒板に綺麗な字で自分の名前を書くとみんなのほうに向き直り一礼した。

「今日から夏休みまでの間、ここに通わせていただきます。三千院滋です。よろしく願います。……あつ、一也……!」

一也を見つけた滋は大きく手を振った。

それに気づいた一也は滋を見ておもわず勢いよく立ち上がってしまった。

「し、滋……。なんでお前がここにいるんだよ!……」

「お、おい、一也。なに? お前ら知り合いなの?」

「一也と私は夫婦だよ」

「え〜〜〜!」

クラス全員の声が一同に揃った。

一也はとうとう堪忍袋の尾が切れた。

「ちょっと来い!」

一也は滋の手を掴み教室から出て行った。

その姿を、渚は心配そうな表情で見つめていた。

ガシャ!

一也は滋を屋上に連れて行き、おもいつきり金網を蹴飛ばした。

「どういうことだ!　なんでお前がいるんだよ!」

今回ばかりはいつもクールな一也も冷静さを保つことはできなかった。

「へへ。実は、今度の文化祭の個人発表のテーマは一般生徒の学校生活にしてみたんだ。それで、お父様に頼んで少しの間この学校に転校させてもらったの」

聖宝学園では文化祭で個人発表をしなければならない。課題は自

由。夏休みまでに仕上げ提出し、その中で特に優秀と選ばれたものは舞台で発表するのだ。

「だからってここを選ぶ必要はないだろ！ ふざけるのもいい加減にしる！ 朝は何も言わなかったじゃねーか！」

「びっくりさせようと思って……、てへっ」

滋は舌を出して頭をなでた。

一也は今すぐに滋を殺したかった。

「いいか。ここでは俺のことは無視しろ。絶対に話し掛けて来るなにながあつてもだ。お前と俺は他人ということにしる！」

「えゝ。どうして？ せつかくここに入ったのに」

「どうしてもだ！ いいな！」

「はあゝ。そんなに怒んなくてもいいのに」

すると、屋上の扉が開き駿が入ってきた。

「お邪魔しまゝす。それで、一也。滋ちゃんと知り合いなの？」

駿は二人に近づき、滋を見た。

「こんなやつ知らねーよ。勝手に話し掛けてきたからシメてやろうとしたんだよ」

「そうだよ。私と一也は幼なじみなんだよ」

この野郎。いきなり約束破りやがって。

「なんだそうなのか。いいな。一也。こんなかわいい子と幼なじみなんて羨ましい。オレ茨城駿っていうんだ。一也の親友だ。よろしく」

「茨城君ね。こちらこそ、よろしく」

二人が自己紹介を終えると一也は駿に話し掛けた。

「それで、何しに来たんだよ」

「ああ、そろそろ授業が始まるから呼びに行けって言われたんだ。滋ちゃん、楽しませてたんだろ？」

「えっ？ もう始まるの？ 急がなきゃ。じゃあね、一也。先に行ってるよ」

滋は手を振りながら屋上から出て行き教室へ向かった。

「いや。滋ちゃんもかわいいな。みんな驚いてたぞ。二人が夫婦だなんてな。なら、渚ちゃんはオレがもらっぜ」

「お前は死にたいのか？」

一也は鋭い目つきで駿を睨みつけた。

「じよ、冗談だよ。冗談。さ、オレたちも教室に戻ろっぜ」

この日から滋を加えた新しいクラスで授業は始まった。

休み時間。駿は一也にある疑問を打ち明けた。

この何気ない疑問が、後に大惨事になることを知らずに。

「なあ、一也。渚ちゃん、なんかかわいそうに見えるのは気のせいかな？」

渚は廊下側の一番前の席に座り、誰からも話しかけられず、一人黙々と読書をしていた。

クラスの人達はみな滋のところに集まり、いろいろな話を聴いていた。

「滋ちゃんと渚ちゃんのどこが違うのかな？ 二人ともかわいいし。大して変わらないと思うんだが」

一也は分かっていた。おそらく存在感のせいだろう。

滋は昔からよく話をして、回りにはたくさんの人が集まっていた。

その転、渚はあまり人とは話をせず読書ばかり。これだと、渚のころなど知るの難しい。

「渚ちゃんも、明るく元気があればな……」

それができれば今ごろ友達ができてるし、俺たちと一緒にいることもない。

「別にいいんじゃないか。読書が好きなんだろ？今のままでいいだろ」

「でもよ。一人くらい女友達がいてもいいだろ？」

「お前は どうしたいんだよ」

駿は真剣な目で言った。

「渚ちゃんに友達を作らせたい」

一也はあきれてしまった。

「だったら勝手にしろ」

「お前は渚ちゃんのこと心配じゃないのか？」

「別に。他人のことなんてどうでもいい。友達が作りたければ作ればいい。人気者になりたいならそうなるように努力すればいい。だが、したければ自分一人の力でしなければ意味がない。これからも人に頼ってしまうからな。一人で生きられなくなる」

「少し手伝うくらいいいだろ」

「だいたい、あいつはそれを望んでいるのか分からないだろ」

「だったら聞いてみようぜ」

ということで昼休み。一也と駿は渚を連れて屋上で昼食を食べた。

さっそく駿は単刀直入に話を切り出した。

「ねえ、渚ちゃん。女友達作りたくない？」

駿は口に売店で買ったメロンパンを頬張りながら話した。

「えっ？ 女友達ですか？ …… どうしてそんなことを？」

渚の表情は怯えているように見えた。

なにかを怖がっているかのようだ。

「いや、オレらだけじゃおもしろくないだろうと思って」

渚はそつと一也を見た。

一也は学校に来る途中で買った伊集院家行きつけのパン屋の焼きそばパンを食べていた。

一也は渚の視線に合わせると、じつと渚の回答を待った。

渚は駿に向き直り、お弁当箱を置き、うつむいて話した。

「……私は、一也さんと駿さんと一緒にいれて楽しいです。おもしろくないなんて思ったことは一度もありません」

渚は拳を握り締め小刻みに体が震えていた。

「でも、女は女同士のほうがいいだろ？」

渚の震えが強くなった。

一也はこの震えを見て渚が考えていることが自然と分かった。

「私は……このままでいいです。このまま一也さんと駿さんが友達でいてくれたら……」

「でも、一人くらい欲しいだろ？」

「……でも、……でも、……」

渚は今にでも泣き出しそうだった。

一也は渚の正面に立ちしゃがみ込むと、そつと肩に手を置いた。

渚の体が一瞬ビクついたのが分かった。

「言っておくが、俺たちはお前と一緒にいたくないから友達を作れっ
て言っているんじゃない」

すると、渚の震えはピタリと止まった。そして、うつむいていた
顔をそつと上げた。

「お前が他に友達を作っても、そいつらと仲良くしようと、俺たちが
友達ということに変わりはない。どうしても俺たちと一緒にいた

いなら自分からこっちに来い」

いつもならこんなこと言わないのだが言わずにはおれなかった。
いつのまにか一也は渚の存在を認めているのかもしれない。

渚は目をこすり、安心しきった笑顔で返事した。

「はい」

「駿がお前と違って気持ち悪い笑顔で迎えてくれるけどな」

「誰の笑顔が気持ち悪いって！　じゃ、渚ちゃんの友達作り大作戦の会議を始めるぞ！」

「……でも、友達になってくれる人はいるのでしょうか。滋さんのように話し上手ではありませんし……」

駿は手に持っていたメロンパンを置き、ポケットから手帳を取り出した。

「お前、まだそれ持っていたのか」

駿の手には青南高校美少女一覧表が握られていた。

「いらねーだろ、こんなもの。おらっ」

「え？　おい、ちょっと！」

一也は駿の手から手帳を奪うと後ろに投げ捨てた。

手帳は風に乗り、危険防止のための金網を越えた。

「ち、ちよつと待て！」

駿は走って追いかけて、手帳に向かって手を伸ばした。なんとか手帳に触れた。しかし、手が滑って捕まえることはできず、手帳はパタパタと舞いながら落ちていった。

「ちくしょ〜〜！」

そう叫ぶと駿はすごい勢いで手帳を取りに屋上から飛び出して行った。

「一也さん……。駿さんがちよつとかわいそうです。なんですか、あの手帳は？」

「知らぬが仏。ま、いつか分かるだろ。もしかしたら、お前のことも書いてあるかも」

「えっ？」

駿はすぐに帰ってきた。

手帳は少し砂がついただけで無事だった。

「ちつ、無事かよ。次は火で燃やすか……」

「これはオレの宝だって言ったよな！ 知っててやってるよな！」

駿は手帳についた砂を払い落とすと、ページを捲りだした。

「これもなかなか使えるんだからな！ おっ、この子なんていいんじゃないか？ 同じクラスの姫垣梓」

姫垣梓は、一也たちのクラスの学級委員長を務めており、頭がよく真面目な優等生だ。長い髪を後ろで一つにくくり、スポーツをしていてもかわいらしさを持っているということで男子からの人気は高かった。

手帳の中を見た渚は駿を軽蔑した。

「駿さん……、こんなものを作っていたのですか……」

「だから変人って言ったろ」

駿は気まずい雰囲気になってしまい、焦りに焦ってしまった。

「で、でも、梓ちゃんなら友達になってくれるよ」

「でも、私は姫垣さんのことよく知りません」

「大丈夫。相手のことを知りたいならまず友達になることからなんだ。友達になればわかるよ。あとで話してみよう」

放課後。一也と駿はさっそく姫垣梓に会いに行った。

梓は、これから部活であるバスケの練習が始まるということで終わ

るまで待つことになった。

渚は今日は病院に行かなければならないということで先に帰ってしまった。

ようやく練習が終わり、コートのもップがけを終え、梓は体育館から出てきた。

時刻は夜の八時を過ぎていた。

「ごめんね。遅くなっちゃって。それで、話ってなに？」

梓はタオルで汗を拭きながら尋ねてきた。

「実は、お願いがあつてきたんだ。ちょっと聞いてくれる？」

「そうね。前みたいな変なお願いじゃなかったらいいわ」

「大丈夫。これはちゃんとしたお願いだから」

ここじゃなんだからと言って、三人はファーストフード店に向かった。

「一也。オレお金ないから代わりに出してくれ。いいだろ？」

「お前が言い出したんだろ。自分で出せ」

「そんなこと言うなって。これも渚ちゃんのためと思って」

そこで一也はいいことを思いついた。

「さっきあいつ、前みたいになって言ったよな。あいつと前に何があったか教えてくれたらいいぞ」

「えっ？ …… い、いや、あれは…」

「じゃ、自分で払うんだな。あいつにでも払ってもらえば」

こっちから誘っておいておごらせるのは格好悪い。

駿は悩みに悩んだ末、勘弁して話した。

「分かったよ。実はな、一年のころ梓ちゃんに告白したんだ。それで、毎朝お越しにきてくださって言ったんだよ。見事にふられたけど」

それを聞いた一也是大笑いした。

「お前バカだろ。何考えてんだよ」

一也の笑い声は店に着くまで続いた。

店に着き、三人は中に入った。

爽やかな笑顔でアルバイトらしき女性が挨拶をしてきた。

意外に広い中には、家族一組とカップル一組しかおらず、店員は暇そうだった。

駿と梓は適当にセットメニューを頼み、一番奥の席に座った。

もちろん、代金は一也が払った。お礼がなく、一万円払ってお釣りは持つておくのが面倒なので断った。

「それで、話して何？ それよりも、茨城君。ちゃんと学校には遅刻せず、授業中は居眠りしないように」

さすが学級委員長。よく見ていると一也は感心した。

「一也君もね」

その言葉に、一也は怒りを覚えそうになったが駿がなんとか抑えた。

「そ、その話しはおいといて。お願いっていうのは、友達になって欲しい人がいるんだ」

梓は訳が分からないらしく首を傾げていた。

「友達って……、あんたの？」

駿を見て、梓はいかにも嫌そうな顔をした。

それに気づいた駿は手を振って否定した。

「い、いや。オレじゃないよ。できればなってほしいけど……」

「じゃあ……」

次にそつと一也のほうを見た。

星で輝く夜空を見ていた一也は視線に気づき、梓を睨みつけた。梓はその目を見て恐怖を覚えた。

「ち、違う違う。一也でもないよ」

それを聞いた梓は胸をそつとなでおろした。

「じゃあ、誰なの？」

駿は真剣な目をして、真面目に話を切り出した。

「友達になって欲しいのは渚ちゃんだよ」

「渚……」

梓は腕を組んで誰なのか考え始め、思いつくと手を合わせた。

「ああ、一ノ瀬さんのことね。そういえば、あなた達一ノ瀬さんとよく一緒にいるわね。仲良いの？」

「まあ、仲良いね。最初に友達になったのもオレ達だし」

「へえ。それで、なんで私に友達になって欲しいの？」

「そりゃ、女の子なんだし。女同士の友達がいたほうがいいと思うし。梓ちゃんは優しいから友達になってくれると思うんだよ」

梓は駿の話を聴きながら、ジュースを飲んだ。

「うーん、でもねえ。私一ノ瀬さんのことよく分らないのよね。唯一わかるのは本が好きそうということくらいだし」

「でも、友達になってから分かるということもあるし。少し話すくらい。ね？」

駿は手を合わせお願いした。梓はしばらく考え、顔の前に手を合わせ、頭を下げた。

「ごめんなさい。やっぱり友達になるのも相性というのもあるし、どう接したらいいのか分からないの。本当にごめんなさい」

一也はその言葉を聞き、軽く息を吐いた。駿は愕然として頭を抱えた。

「でも、一つアドバイスしてあげる」

その言葉に駿は食らいついてきた。

「アドバイス？」

「そう、何か自分の特技や趣味を披露してみたら。部活って相手のことが一番分かりやすいものだと思うのよね。例えば、体育系と文化系で感じがある程度分かるでしょ？」

「うん。確かに」

「自分の興味あることを披露したら気の合う人と出会って友達ができるんじゃないかな？でも、一番大切なことは勇気を出して自分から話しかけること。これでなんとかなると思うわ」

駿はおもむろに梓の手を取り、ぎゅっと握った。

「ありがとう、梓ちゃん。さっそくその作戦考えてみるよ」

「そ、そう。……それはよかったわ」

駿があまりにも強く手を握るから梓は少しひいていた。

その後、梓といろいろ話をして各自家に帰った。

屋敷に戻った一也は、夕食と入浴を済ませ自室に戻った。

ベッドにはすでに真っ白なシーツに取り替えられており、寝る準備はできていた。

一也はリモコンを取り、大好きなアーティストの曲を流した。

「一也〜！一緒に寝よ〜！」

またもや滋が後ろから抱きついてきた。

一也は強引に腕を取り解き、拳を上げ滋の頭に軽く振り落とした。

ゴツンッ

「痛った〜い。なにすんのよ〜」

滋は両手で頭を抑え、その場にしゃがみ込んだ。

「いちいち抱きついてくるな。なんでここにいるんだよ。出入り禁止にしたはずだろ」

「そんな硬いこと言わなくていいじゃない」

滋は一也からリモコンを奪うと、音楽を消した。

「さ、明日も学校なんだからさっさと寝るわよ」

そういうと滋はベッドの中に入り込んだ。しかも、すでに枕も二つ並んでいた。

一也は滋のやることにいらいらして、乱暴に頭をかいた。

「いい加減にしろ！ もう昔のようなガキじゃねんだ！」

一也は滋に背を向けベッドに腰を降ろした。

「確かに一也は昔と比べたら変わったわよね。こっちの高校にきても変わったようだし。気にしなくてもあのことは誰にも言わないよ」

一也は一瞬あのときのことを思い出した。昔の、自分の苦しみを。

「あのときのことは感謝してる。だが、これからは誰の力も借りず一人で生きる。だから、この高校に入ったんだ。お前の力に頼らないように」

一也は立ち上がると冷蔵庫から飲み物を二つ取り出し、一つを滋

に渡した。

「これ飲んだらもう帰れよ」

「うん。ありがとう。……でもね、少しは頼りにしてね。私、一也の力になりたいの。あのとき、約束したでしょ」

「……ああ、そうだな」

そのとき、一也は名案を思いついた。

「滋。お願い事ができたぞ」

「なに？ 帰れとかはダメよ」

「あいつの友達になれ」

「あいつって？」

一也は渚のことを話し、今友達を作っていることも話した。

「なるほどね。いいわよ。友達になってあげる。一也の友達だもん。ちよつと興味があるわね。ライバルかも」

「普通の女だよ。いや、ちよつと違うか」

そこで滋は、なにか思いついたらしく手をパンと叩いた。

「あのね、一也。友達になってあげるけど、条件がある」

「なんだよ」

「今度デートして」

一也は滋を部屋から追い出し、眠りについた。

昼休み。さつそく一也は渚を屋上へ連れて行った。

「一也〜！」

屋上には滋だけがあり、手を振ってきた。

その他にはやはり誰もいない。

一也がよく屋上に来ることは噂になっているから誰一人近寄らないようになっていた。

隠し事をするのなら絶好の場所だ。

一也は渚に向き直った。

「お前には隠さずに話す。滋は俺の幼なじみで中学まで同じ学校だった。少し迷惑なところがあるが優しいところもある」

滋は渚に歩み寄った。

「あらためて自己紹介するわね。三千院滋と申します」

滋は丁寧に頭を下げた。渚は慌てて自分も自己紹介をした。

「わ、私は一ノ瀬渚と申します。か、一也さんの……」

渚は少し悩んだ末、はっきり言った。

「一也さんの友達です」

滋は渚に近寄り、顔をじっと見た。

渚は戸惑い、目を固く瞑ってじっとしていた。

すると、滋はいきなり渚に抱きついてきた。

「あんたかわいすぎ〜！」

「えっ？」

渚はいきなり抱きつかれてしまい困惑していた。滋はあらためて渚の顔を見た。

「とても一也の友達とは思えないほどかわいいわね。ねえ、よければ友達にならない？一也の友達なら少しは話しやすいと思うし。どうかな？」

「も、もちろんです。こちらこそよろしくおねがいします」

渚はようやく滋に一番の笑顔を見せた。

一也は滋を感じた。

さすがは警察官の娘。緊張しきっていた渚をいとも簡単に解き、心を開かせた。

すでに渚は安心しきっていた。

一也は一つ目の用が済み、二つ目の用に取り組んだ。

「あと、お前。なにか特技とかあるか？」

一也は昨日梓が言っていたことをためそうと思い聞いてみた。

「えっ？ と、特技ですか？」

渚は顎に手をやり考え始めた。しばらくして不安そうに答えた。

「……物事を考えること……」

「はっ？」

一也は渚の言っている意味が分からなかった。

こいつはいつもなにを考えているのだろうか。

「物事って、例えば何だよ」

「そうですね。例えば……」

渚は空を見上げ、それに向かって指を立てた。

「一也と滋もそれにつられて空を見上げた。

「どうして空は青いのだろうと考えませんか？」

「一也はだんだんと渚のことを変人と思ってきた。

「他にも、どうして雲は白いのだろうとか、どうして人に感情があるのだろうとか」

「つまり、哲学的なことを考えるのが好きということね」

「滋がうまくまとめてくれた。

「はい。そういうことですね」

「一也は額に手をやった。

「それは特技じゃなくて趣味だ。しかもどうでもいいような。

「他にないのか？」

「ほ、他にですか？……」

「渚はまた深く考え始めた。今度はさっきよりも時間がかかった。

「……ピアノ……」

「えっ？」

「ピアノなら……少しだけ弾けます。小さい頃お母さんに教わりま

した。お母さんはとても上手で綺麗な音がリズムに乗って奏でるんですよ」

一也はそれだと確信した。

「今日の放課後、さっそく聴かせてくれ」

「えっ？ ……で、でも、 …… 本当に少ししか弾けませよ。それにすぐくへタですし……」

「別にかまわない。聴かせてくれ」

「 …… わかりました」

放課後。

さっそく一也、駿、渚、滋の四人は音楽室に入った。

中には音楽部や吹奏楽部が練習中だったが、一也が簡単に追い出した。

渚はピアノの前に座り、音を確認めた。

一也たち三人は椅子を持ってきて近くに座った。

「おい、今から何するんだ？」

駿だけが何も分かっておらず、困惑していた。一也は、

「黙って聴いてろ」

と、一喝して渚を待った。

準備のできた渚は、大きく息を吸って深呼吸をした。

「それでは、弾きます」

渚は鍵盤の上にそつと手を置き、弾き始めた。

一也と滋は目を閉じ、奏でる音に耳をすませた。

楽譜を見なくても、渚は手をすべるようになめらかに動かし、綺麗な音が音楽室を響かせた。

五分くらいして、演奏が終わった。渚は立ち上がり、三人の前に向き直った。

「い、いかがでしょうか……」

駿は立ち上がり、大きく手を叩いた。

「すごくよかったよ、渚ちゃん。うますぎる！」

滋も一緒になって拍手を送った。

「ありがとうございます」

次に渚は一也に視線を向けた。

「か、一也さんはどうでしたでしょうか……」

一也は閉じていた目を開き、渚を見た。

「まあ、基本はなっているようだ。そんなに悪くもない。そこら辺のやつと比べたらうまい方だろ」

「ふふ、素直にうまいって言えばいいのに」

滋はくすくすと小さく笑った。

「それで、この演奏に何の意味があるんだ？」

駿は昨日梓が言ったことを忘れているのか、まるでわかっていないようだ。

「あいつが言っただろ。自分の興味あることを披露したら気の会う人と出会って友達ができるんじゃないかってな。それ以外何を覚えてんだよ」

「昨日は梓ちゃんと楽しく話したことしか覚えていないな」

一也は駿をほっというて話しを進めた。

「文化祭で舞台発表があるだろ。それに出て演奏しろ」

「つまり、注目度をあげるってことね。いい考えじゃん。私は賛成。頑張ってるね、渚。でも、こっちの文化祭は早いよね。これから楽しみ」

「で、でも、……私、ヘタですし、……自信がありません。失敗したら……」

「渚ちゃんなら大丈夫だって。絶対うまくいく」

駿もようやく今から何をするのか分かったようだ。

すると、滋はなにかを思いついたらしく、なぜかにやにやしていた。

「ねえ、せっかくだし。私達もなにかやらない？」

「いいね。オレ達もなにかしよう。でも、なにする？ オレ、できるとしたらギターくらいだし」

「なら、ちょうどいいわ。私がヴォーカルして、一也がベース、茨城君がギター、渚がピアノでバンドをやりましょう！」

一也は頭を抱えた。滋はいつもそうやって突然言い出し一也を困らせるのだ。

「お前はバカか。肝心のドラムはどうするんだよ。」

「それなら心配ないわ。プロの人に頼んでやってもらうから」

「なんかいい感じだな。さっそく、練習開始だ！」

四人は文化祭の舞台発表に向けて練習を始めた。

第五章：猛特訓と秘密

渚の存在感と注目度を上げ、友達を作らせるために、一也達4人は文化祭の自由発表でバンドをすることになった。

一也はベース、駿はギター、渚はピアノ、滋はヴォーカルで、ドラムは滋がプロに頼み当日連れてくるそうだ。

滋の唐突な思いつきで始めることになったが、どうせなにもすることはないのだから良い暇つぶしにはなった。

文化祭当日まであと一週間と二日。本番に向けて猛練習に励んだ。

放課後。

今日も音楽室を勝手に貸し切り、それぞれの練習に磨きをかけていた。

駿はさすがに昔やっていただけであつてすでに完璧に弾いていた。自分のギターを家から持ってきて練習するのはいいのだが、あきたら関係ない曲を弾いてそこら辺にいる女子生徒たちに聞かせていた。

滋は外で発声練習をしていた。その美声の虜になり、いつのまにか周りにはたくさんの見物人が集まり、練習のついでに宣伝もしていた。

「いいんですか、一也さん？ 私の練習ばかり付き合ってもらって……」

渚は申し訳なさそうに顔を下に向けうつむいていた。

一也は自分の練習を後回しにして渚のピアノの練習に付き合っていた。昔ピアノの経験がある一也は難しいところを教えてあげていた。今のところ、完成度に一番遠いのは渚である。基本はなっているのだが、難しいところはなかなかうまく弾けない。

「気にするな。元々お前のためのバンドなんだ。お前が一番頑張らないといけないんだからな」

「はい」

渚は気合いを入れて、ピアノに向き直り再び演奏を始めた。

時刻は7時を回っていた。明日は土曜日だということギリギリまで練習をしたのだ。

辺りはだんだんと薄暗くなり、下校する生徒が増え、学校の中は静まり返っていた。電気も点いているのはこの音楽室と職員室くらいだった。

「よし、今日はここまでだ」

一也がそういうと渚はピアノから手を離しホッと息を吐いた。

4時から3時間休みなく弾いていたのだ。その根性だけは一也は認めていた。しかし、うまく上達はしていなかった。

このままでは当日までに間に合わないかもしれない。それに、渚だけは二曲弾けるようにならないといけない。一つはなんとかできているが、肝心のもう一つがうまく弾けないのだ。

人一倍頑張っではいるがこの曲は渚にとって難しすぎるのかもしれない。

「じゃあ、一也。私は迎えが来たからもう帰るわね。またね」

滋は手を振り音楽室から出て行った。それにつられて駿も音楽室をあとにした。

二人が音楽室から出ると静かになった。聞こえるのは風が吹いて木の葉が揺れる音。

渚はピアノに座ったまま動かなかった。じつとなにかを考え込んでいた。

一也は近くの椅子を引っ張り出し足を組んで座った。

すると、渚は体が少し震えながら口を開いた。

「……一也さん。……どうしたらいいんでしょうか……」

渚の声は震えていた。涙が出てくるのを必死にこらえ、膝の上で

拳を強く握っていた。

「……自分でも分かっています。……このままじゃ、……このままじゃ、間に合わないって……。私……。どうしたらいいんですか……。諦めしかないんですか……」

一也は静かに黙って聞いていた。

「……一也さん」

渚は一也の方を向いた。目から滴が一滴ずつ流れていた。

自分の力では無理だと承知して、助けて欲しいと訴えているようだった。

一也はその目をじっと見つめていた。渚がどうするか試しているのだ。ここで辞めるか、諦めずに頑張るか。

渚が頑張るなら力を貸したい。いや、貸すつもりだ。一也は渚の誠意を知りたかった。

「……みんなの、……みんなの期待に応えたいです。……駿さんや滋さんに……。一也さんに、迷惑をかけたくないです……」

一也は組んでいた足を解いて口を開いた。

「お前は、プロのようにうまくなりたいのか？ それとも、……あいつらのために少しでも足手まといになりたくないのか？」

渚は手の甲で涙を拭いはっきり答えた。

「私は、足手まといになりたくないです」

一也はそつと微笑んだ。すると、懐から紙とペンを出して何かを書くとその紙を渚に渡した。

「明日、学校休みだろ。朝の１０時にここに来な」

「は、はい……」

渚がその紙を受け取ると一也はポケットに手をつ込み音楽室から出て行った。

土曜日。

渚は一也の言われたとおり、１０時に紙に書いてある場所に着いた。自分の家から街まで歩いてその場所まで３０分かった。

目の前には三階建てのビルが立っており、屋上に取り付けられた看板には大きく黒でピアノ演奏教室と書かれてあった。

事前に家で紙に書かれてある住所で場所を調べたが、渚はここで合っているのか不安だった。しかし、ここで合っているはずだ。

緊張しながら恐る恐る中に入っていった。

中は快適な温度に保たれ、受付の人以外誰もいなかった。一也の姿が見当たらないので、渚は緊張しながらも受付に向かった。

「……あ、あの……」

声をかけると、二十歳くらいの若い女性が顔を上げ渚を見つめた。すると、すぐに事情が分かってのか満面の笑顔になった。

「あなたが一ノ瀬渚さんね」

「は、はい」

「ようこそお越しくださいました。こちらへどうぞ」

受付のお姉さんは椅子から立ち上がると渚を奥へ案内した。

エレベーターを使って三階で降り、奥の部屋に連れて来られた。

ドアには演奏室とかかれていた。受付のお姉さんはドアを軽くノックした。

「一也様、一ノ瀬渚様がお越しになりました」

「入ってくれ」

中から声が聞こえると、受付のお姉さんはドアを開け渚を中に入れた。

部屋の中はとても広く、壁一面に大きな窓があり、真ん中には大きなグランドピアノ、その横には大きなテーブル、反対側にはふかふかのソファが置いてあった。

そこに一也は腰掛けていた。

「よく来たな。いいか。今日と明日、ここに泊まり込みで練習をする。お前がうまくなるまで俺がつきつきりで指導してサポートしてやる」

一也は自信満々に言うと、ソファから立ち上がった。

渚はわけがわからず、慌てふためいていた。

「えっ？ と、泊まり込みですか？ でも、着替えとか持ってきてないですし……」

「それなら心配するな。ちゃんと準備させてある」

「で、でも、こんなところに泊まり込みなんて……」

渚があまりにも怖じ気づいているので、一也は渚に近づき頭を掴んだ。

「あいつらの足手まといになりたくないんだろ？ それとも、あいつらの期待を裏切るのか？」

すると、渚はハッと気づき、拳を握り気合いを入れた。

「や、やります！」

一也はそつと微笑むと、渚をピアノの前に座らせ、早速練習を始めた。

練習を始めてから七時間が経った。時刻は午後六時を回り、大きな窓は茜色に染まった空を映し出していた。

渚は休むことなく練習をしていた。一也は楽譜に間違っているところに赤で記しをつけ、そこを重点的に何度も弾かせた。

よくピアノ教室などでは、間違ったら叩いたりして恐怖感を覚えさせて克服させようとしているが、一也はその方法は使わなかった。いや、誰であろうと使いたくなかった。

人が一番記憶に残りやすいのは楽しいことである。一也はできるだけ渚に楽しくピアノを弾かせ、自分が成長しているという楽しさを覚えさせながら指導をした。

間違えることは悪いことではない。間違えたら叩くというのは、指導者が間違っている。一也は決してそんなことはしなかった。

おかげで少しずつ、失敗は減っていった。

「よし、そろそろ夕食にしよう」

一也は携帯を取り出し電話をかけた。

十分して、ドアから豪華な食事が運び込まれた。

それを従業員がテーブルの上に並べ、一也と渚は向き合って食べた。

「どうだ、おいしいか？」

「は、はい。とてもおいしいです」

渚は震える手でゆっくりと食事を口元に運んでいく。

無理もない。七時間も休まずにしていれば手は疲れてしまっただろう。だが、渚は最後まで残さず完食したのだ。

食事を終えて練習にとりかかろうとしたとき、渚はあることを思い出した。

「あつ、お母さんに連絡するの忘れてました。きっと、心配してます」

「じゃあ俺が連絡しとく。呼んだのは俺だからな」

「すみません。お願いします」

渚は一也に家の電話番号を教えるとピアノの練習に戻った。

一也は部屋を後にし、廊下に出て渚の家に電話をかけた。発信音が一回鳴るか鳴らないかですぐに出てきた。

「お前かー！　うちの娘を誘拐したのは！　なにが目的だ！　さっさと返せ！」

突然の怒鳴り声が廊下中に響いた。一也は一瞬間違えたかと思っ

た。

しかし、電話番号はちゃんと合っている。失礼な人が一也は今だけ耐えることにした。

「もしもし、夜分遅く申し訳ありません。お宅の娘さんは今こつちに……」

「はああ！ てめえ、娘に出だしてみろ！ すぐに殺してやるからな！」

一也はその言葉で我慢していた感情が甦った。

「お宅の居場所なんて調べればすぐに分かるんだ。貧乏風情が偉そうなこというなよ。今すぐにお前を殺してやろうか。それとも地獄を味合わせてやろうか」

「ああ？ やれるもんならやってみろ。この変態野郎！」

一也はもう一つの携帯を取り出し、渚の家の在りかをあばこうとした。

その時、電話の奥からもう一人の声が聞こえた。

「進さん！ やめてください！ 近所迷惑です。それに相手に失礼ですよ。……はい、お電話代わりました。先ほどは失礼しました。一ノ瀬と申します。ご用件はなんでしょう？」

どうやらまともな人が出てきたらしい。

「一也はもう一つの携帯を収め、怒りの感情を抑えて用件を伝えた。

「お宅の渚さんは今こちらで預かっております。連絡が遅れましたが今日はこちらで泊まりますので」

「あ、はい。わかりました。よろしくお願いします」

「おい、桜。ちょっと俺に代われ。こっちの気が収まらねー」

「進さん。静かにしてください。渚の部屋の入室を一カ月間禁止にしますよ」

「えっ、そ、それだけは勘弁してくれ」

「だったら静かにしてください」

「……はい」

ようやく静かになったようだ。

「申し訳ありません。それで、渚の着替えはどうしたらいいんでしょうか？」

「それならご心配ありません。こちらで準備しておりますので」

「わかりました。娘をよろしく願います」

そいつと相手は電話を切った。

あれが渚の両親？ 母親はまともだが、父親は礼儀知らずだな。

一也は携帯をポケットに入れ部屋に入った。

時刻はとうとう九時を回った。

ここなら夜遅くにピアノを弾いても外に響くことはないからいつまでも練習できる。だが、持病のある渚の体を考えるともう止めたほうがいいのかもしれない。

そこで一也は練習を止めさせ、風呂に入るように言った。渚は受付のお姉さんの後ろに着いて行き浴室へ向かった。

一也は明日どこを練習するか考えようと楽譜を取ろうとした。すると、鍵盤の上になにかが付着していることに気づいた。

それがなにかわかったら、鍵盤を綺麗に拭き、蓋を閉め、部屋の明かりを消すと部屋を後にした。

「ふう、気持ち良かったです」

渚は受付のお姉さんが用意してくれた寝間着に身をまとい、濡れた髪をタオルで拭いていた。

風呂から上がった渚はより綺麗に見えた。石鹸の香りが漂い、こいつは女なんだとあらためて認識した。

一也は渚を寝室に案内した。

寝室は二階にあり、中は大きなベッドとテレビ、小型冷蔵庫、ソファ、洗面所、夜景が綺麗な窓が着いており快適だった。

渚はあまりにも豪華で驚いていた。

「好きに使っていいからな。冷蔵庫の中には飲み物もある。テレビも好きなものを見てもいい。明日は八時から練習を始める。朝食は七時から。他に質問は？」

「いえ、なにもありません。でも、いいんですか？ こんなところに寝泊まりして……」

「いいんだよ。たまには贅沢しな。いつも頑張っているんだからな」

「ありがとうございます」

渚はちょこんとソファに座った。

一也もソファに近寄り、向かい側に座った。

そして、渚に向かって手を差し伸べた。

「えっ、なんですか？」

渚は意味がわからず一也を見た。

「手。見せてみな」

「えっ？」

一也は強引に渚の手を掴んだ。やはり、渚の指は皮が破けて血が出ていたようだ。今は止まっているようだがすぐにでもまた流血しそうだった。

あの鍵盤の上に着いていたものは渚の血だったのだ。手が疲れようと指から血が出ようと、練習を止めず頑張っていたのだ。

一也はできるだけの応急処置をしてやった。

「あ、ありがとうございます、一也さん。もう大丈夫ですよ」

そういうと、渚は手を引っ込ませようとした。しかし、一也はそうはさせなかった。

「か、一也さん……」

一也は渚の手を取りマッサージをしてやった。

「言ったる。俺がお前をサポートするって。これもその一つだ」

渚は一也に微笑んで礼を言った。

「ありがとうございます」

一時間マッサージをして、渚の手は少しは疲れが取れたようだった。それを確認すると、一也はソファから立ち上がった。

「じゃ、俺は隣の部屋にいるからなにかあったら呼んでくれ」

一也が部屋から出ようとしたときだった。渚が出て行こうとする
一也の袖を掴んだ。

「……も、もう少し、……ここにいてください……」

渚は顔が真っ赤になっていようと袖を離そうとはしなかった。

一也は一つため息をつき、ソファに座りなおした。

しばらくは静寂な刻が過ぎた。それを打ち破ったのは渚だった。

「か、一也さんは昔ピアノをしていたんですね？　すごく上手なのはどうして辞めたりしたんですか？」

一也は手を頭の後ろに組みながら答えた。

「始めたのは親が薦めたからだ。幼いころに勝手に入れられて気づいたらやっていた。すぐに簡単にできて暇つぶしにもならなかったからすぐに辞めた」

「そ、そうですか……」

またもや静寂な刻が訪れた。渚は一生懸命頭を働かせ話題を考えた。

一度ためらったが恐る恐る聞いてみた。

「あ、あの、一也さん。噂で校内一ケンカが強いと聞きましたが…
…。本当なんですか？」

一也は組むのを辞め、渚に向き直った。

「……俺は舐められるのが嫌なんだ。それにお前は親がいるだろ。
うるさい父親に優しそうな母親が」

「は、はい……」

渚はちよつと笑いながら答えた。

一也は顔を俯きながら話を進めた。

「お前に、親のいない苦しみとあのときの地獄の日々が分かるか…
…」

「親のいない苦しみと地獄の日々……？」

渚は一也の顔をそつと覗いた。一也の目はその苦しみを思い出しているのか真剣な目をしていた。

やがて、ゆつくりと瞼を閉じて立ち上がった。

「もう遅い。寝るぞ」

「は、はい。おやすみなさい」

「……おやすみ」

一也は部屋から出ると浴室へ向かった。

シャワーを浴びながらさっきのことを思い出していた。

どうしてあんなことをあいつに話したんだろうか。誰にも話したことないのに。話す気など全くなかった。しかし、口から出てしまった。

自分の油断に腹が立ち、一也は壁に左拳を突きつけた。少しずつ痛みが走り、拳から腕に伝わってくる。

しばらくシャワーの滴にうたれ、その音だけを聞いていた。

日曜日朝からピアノの練習を始めた。渚の手はマッサージをしたことにより、十分に動かせていた。

渚の上達は確実に進歩していた。本人にも分かるのか渚は間違っているところがうまくいくと子供のように喜んだ。

そして、午後五時。とうとう一度も失敗することなく演奏できたのだ。

「……できた。できました。一也さん」

「ああ、よくやった」

渚の目からうつすらと涙がにじみ出ていた。この二日間は無駄ではなかった。

「一也は一安心すると大きく息を吐いた。

「どれもこれも、一也さんのおかげです。ありがとうございます」

「一也は渚に近づきそつと肩に手を置いた。

「できたのはお前が頑張ったからだ。よくやった」

渚は少し頬を赤らめ微笑んだ。

「はい、ありがとうございます」

「それでは帰りますね。お世話になりました」

渚は来たときの服装に戻り、ビルの前に出た。

「ああ、この一週間は全員で通しての練習をするつもりだ。今日はゆっくり休め」

「わかりました」

「一也は前から一つの疑問を浮かべていた。そのことを渚に聞いてみた。

「おい、どうしてあの曲を弾くことにしたんだ？ 他にも簡単なものはあるだろ？」

渚は昔のことを思い出しながら話した。

「あの曲はお母さんが大好きな曲なんです。入院中もよく聴いていました。それで、この曲を弾きたいと思ったのです。文化祭も来てくれるそうですから」

一也は理由に納得すると渚を見送り、自分も久しぶりの屋敷に戻った。

渚の家では、お父さんがかんかんに怒って、渚とお母さんが笑いながら止めていた。

この一週間は予定通り全員で通しての練習をした。渚も練習の成果が十分に出ていた。

そして、文化祭もとうとう明日に迫った。

「よし、完璧だな。これならきつとうまくいくぜ」

「そうね。渚も見違えるほどに上達したし。まるで魔法みたい。どうやったの？ 一也」

一也はベースを脇に起き、足を組んだ。

「あいつが努力したからだよ。頑張ったからうまくなったんだ。俺はなにもしてない」

渚が嬉しそうに微笑んだ。そのときだった。

「あ！……忘れてた。やばい、本当に忘れてた」

駿が突然大きな声を上げて、椅子から立ち上がった。

「な、なに？　どうしたの？」

滋が恐る恐る聞くと、駿は額に手をやりながらしぶしぶ答えた。

「自由発表な参加するには募集案内の紙に書いて生徒会に提出しないといけないんだ。それをしていなかったら出られないんだよ」

渚と滋は大声を上げて驚き、慌てふためいていた。

一也は少しでも心配した自分がバカらしくなり、溜めていた息を吐いた。

「そんなことかよ……」

「そんなことつてなんだよ！　重大なことだぞ！」

駿があまりにもうるさいので、一也たちは生徒会室に向かった。

中にはちょうど会長と副会長がいた。駿は何度も頼み込んだが、二人は頑として承諾しなかった。

そこで、渚と滋が廊下で待っていた一也にお願いした。

一也がちよっと頼むと二人はすぐに快く承諾してくれて、問題は無事に終わった。

そして、とうとう文化祭が訪れた。

第六章：文化祭と事件の始まり

とうとう待ちに待った文化祭が始まった。

校門の前には青南学園文化祭の看板が取り付けられ、学校中が綺麗に飾り付けられていた。校舎の前には数々の屋台がずらりと並び、みんなお祭り騒ぎだった。

この日のために頑張ってきた人たちはいつも以上に張り切っている顔をしている。それにつられて、他の人も伝染したかのようにいつも以上に頑張っている。

もちろん生徒ばかりでなく、小さな子供や小中学生、保護者やお年寄りまで参加していた。OBの方々は、自分の高校時代を思い出して、懐かしんでいるようだ。他校の生徒まで参加し、めったにできない交流を深めていた。

こういうお祭りは、クラスの和を深めるのに最適だろう。普段話さない人と力を合わせ、一緒の時間を過ごすことで相手がどんな人なのか分かってくる。先生も生徒たちと協力し合い、楽しい時を過ごしていた。

「へへ。文化祭ってまるでお祭りなんだね。すごく楽しそう」

滋は首にカメラをかけ、ペンとメモ帳を手に、いろいろなところを見ては記録していた。一也、渚、駿はその後ろについて行った。

「ねえ、滋ちゃん。聖宝学園の文化祭ってこんな感じじゃないの？」

駿が話し掛けると滋は写真を撮りながら説明した。

「うちの学園はこんなじゃないわね。お祭りというより、研究発表会ね。だから、私もこうやって自分の課題を決め、研究してるのでも、うちの文化祭でもお祭りみたいにしたいわね」

聖宝学園は、すべてイベントのような遊びではなく勉強を中心にしたものばかりだった。楽しい学園生活とは言えず勉強ばかりの日。

学校は遊ぶところではなく学力を上げる場と校長は言っていた。それを口癖のように先生たちも言っており、生徒たちは第一に勉強と毎日が同じように、縛られた環境の中で日夜送っていた。

「一也も何か研究してたんだろう？ 何をしてたんだ？」

「一也はサボってばかりだったわね。真面目にすればすごい発見したかもしれないのに」

滋が代わりに話し、駿は納得した表情になった。

「それにしても、どれもこれもおいしそうだな。どれから食べようかな」

駿は屋台に向かって走り出し、片っ端から注文を始めた。

「おい、お前もなにか食ったらどうだ？」

一也は渚に声をかけた。渚はさっきからおとなしく、緊張しているのか体が小刻みに震えていた。

「……本当にうまくいくのでしょうか。不安でいっぱいです」

一也は軽く舌打ちをすると、渚の頭に手を置いた。

「お前、誰がレッスンしてやったと思っているんだ。自信持て。言つたろ？ やるんじゃないか楽しめって」

「……はい」

渚は多少元気を取り戻し、うつむいていた顔を上げた。そのとき、駿が帰って来て、両手いっぱい食べ物を抱えていた。

「なあ、俺たちの番って何時からだっけ？」

「午前の組の最後だから12時ごろね。まだまだ時間はあるわ」

ちょうど滋も戻ってきた。

「なら、中も見に行こうぜ」

「いいわね。中もどんなものか見てみたいし。さっそく行きましょ
う。ほら、渚」

「は、はい」

滋は渚の手を取り、引つ張って校舎の中に入って行った。一也と駿はその後ろをついて行った。

中も外と劣らず、すごくにぎやかだった。さまざまなお出物が用意され、その前の廊下ではいろんな人が宣伝していた。

たくさんのお出物の笑い声が響いており、小さな子供たちははしゃぎ回っていた。

「中もすごいにぎやかね。あつ、あれなに？」

滋が指したのはお化け屋敷だった。入り口の前ではドラキュラに変装した生徒が看板を持って宣伝していた。

「あれはお化け屋敷です。中に入るとお化けが脅かしてくるんです。とっても怖いんですよ」

渚はびくびくと怖がりながら説明すると、滋は心を躍らせながらお化け屋敷を見ていた。

「へー、おもしろそう。渚、入ってみましょう」

「え？ わ、私はいいです。遠慮します」

「ほら、入るわよ」

滋は渚の手を掴み強引にお化け屋敷の中に入って行った。渚が一也と駿を見て助けを求めていたが、滋に敵うはずないので二人は手を振って見送った。

二人が出てくるまでの五分間。中からさまざまの恐怖の叫び声と愉快な笑い声が響いていた。

その声が騒がしい廊下まで聞こえてくるのでよっぱどである。

「こ、怖かったです……」

中から出てくると、渚は涙目になっていた。逆に滋は怖さなど微塵のかけらも出さずに笑っていた。

「おもしろかった。うちの文化祭でも取り入れるか検討してみよう」

滋はこのことをメモ帳に記録した。

それからも滋を中心に中を見て回った。行きたいところを全て回り、体験しては記録していった。

いつのまにか、渚の緊張はなくなっていた。今では楽しそうに笑っている。これは滋の考えだったのかもしれない。

一也たちの番まで二時間というときに、駿が一也の肩を叩いた。

「なあ、一也。そろそろあれやらないか？」

またもや駿がバカなことを思いついたらしい。よからぬことを考えているのが目に見えている。

一也は軽蔑した目で駿を見た。

「なにがしたいんだ？」

「決まっているだろ。ナンパだよ。ナ・ン・パ。他校の女子もいるから友達になるなら今がチャンス！」

「一人でやってろ」

一也は駿を無視して滋と渚の後ろを着いて行く。その後ろを駿が追いかけた。

「ちょっと待てよ。一也。お前も健全な高校生。彼女の一人や二人は欲しいだろ？」

「欲しくない」

一也がはっきりと答えた。

「なんだよ。屋敷にメイドがたくさんいるから感覚が鈍っているのか？」

「お前死にたいのか」

一也のするどい目が駿を捕らえる。駿は少し怖気づいてしまった。

「ごめん。冗談です。でもよ、好きな女子が一人くらいはいるだろ？それが普通だぜ。誰かいるのか？」

一也は一瞬一人の少女の影が頭に浮かんだ。夢にもでてきたあの少女。

「いるとしたら、あいつかもな」

「え？ うそ。マジで？ 好きなやついるのか？ 冗談で言ったのに……。誰なんだよ？」

「詳しくは覚えてない。顔も忘れた。ただ、おもしろいやつだった。綺麗な声をしていた」

「そいつとはどこで会ったんだ？」

「俺のお気に入りの公園」

「正体がわからず顔も覚えていない。わかるのは出合った場所と綺麗な声。なかなかロマンチックですね。これはいいことを聞いた」

駿は一也に見られないように、影でにやにやと笑っていた。

「誰かにしゃべったら殺すからな」

駿は一也の肩に手を置きながら了承した。

「分かっているよ。でも、好きなやつがいるならナンパはできねーな。俺も好きな人がいればな」

「知らないのか？ お前ってけっこう人気あるんだぞ」

駿が心底驚いた顔になった。

「えっ、うそ、マジで？ オレってそんなに人気者なの？」

「ああ、噂だがお前のファンクラブもあるらしい。しかも、人数は1000人を超える」

「マジかよ！ 知らなかった。オレってそんなに……」

「……全部うそだけどな」

「なんだよ！ うそかよ！」

それから、ナンパはすることなく午前の自由時間は終わってしまった。

一也たちは一度音楽室に集まり、それぞれの楽器の調整や衣装に着替えた。そのときにプロのドラム担当が来て、滋が楽譜を渡した。

プロの人は木村というらしく、いろんなアーティストの曲を担当されているらしい。音楽業界ではけっこう有名なようだ。

駿はチューニングをして、外ばかりを見ていた。

一也はそつと渚を見た。さっきまでは滋に引つ張られ楽しそうにしていたが、今では口を閉ざして椅子に座りながらじつと両手を握り締めていた。

「時間ですので準備をお願いします」

係員が呼び出しをし、一也たちは体育館へ向かった。

体育館の舞台裏に入ると、客席のほうから無数の声が聞こえた。まだ、開始まで15分あるのだが、すでに集まってきている。滋の

宣伝が効いたのだろうか。

一也たちはまず、自分達の配置に楽器を運んだ。ステージ側を見て、左側にピアノ、その右隣にベース、右側にドラムを置き、その左隣にギター、そして、真ん中にヴォーカルという配置となった。準備の最中、一也はがらの悪い不良を一瞬見たが、そのときは気にしなかった。

開始まで5分前となった。

会場はすでに歓声でいっぱいである。

さすがプロなのか、木村さんはこの歓声の中でも緊張一つせずに暢気に鼻歌を歌っていた。逆に渚は緊張のしすぎで慌てふためいている。滋も意外に緊張せず声の調節をしていた。駿は裏からそと客席を覗いてあまりの人数の多さに驚いていた。

「ちょっとすごいな。ほぼ満席だぜ。俺ら人気アーティストみたいだ」

「そりゃそうでしょ。私が歌うんだし。それじゃ、始める前に一也从一言どうぞ」

滋が全員を集合させ、一也の近くに集まった。

「なんで俺が言うんだよ。お前が言えればいいだろ」

「いいでしょ。こういうときは男の子のほうが気合が入るのよ。いい言葉期待してるわ」

一也は小さくため息をつく、そつと渚を見た。あいかわらず緊張している。

一也は一つ咳払いすると全員に言った。

「緊張なんかせずに、まずは楽しむことを優先にすること。別に失敗してもかまわない。それを補うのがチームだ。一人じゃないことを忘れるな」

「なかなかいいこと言うわね」

「一也からこんな言葉が聞けるとは思わなかった」

駿は若干驚いているようだった。

この言葉は咄嗟に思いついたことで、みんなにというより渚に言ったのだ。

この言葉を聞いた渚は少しは緊張がほぐれたようだ。

「それじゃ、いくぞ！」

一也たちはいつせいにステージに登場した。その瞬間、会場から大歓声が広がった。自分たちのどこにこんな人気があるのだろうと思う。

一也たちはそれぞれの配置につき、それを滋が確認するとマイクのスイッチを入れた。

「みなさん、こんにちは！」

最初に軽く挨拶すると、会場中から挨拶が返ってきた。

「最初は全員の自己紹介をします。まずはベースの一也!」

一也は紹介されても無視してベースの準備をしていた。

「そして、ギターの駿!」

駿はしっかりと紹介に応え、大きく手を振っていた。客席はたいして反応していなかった。

「続いて、ピアノの渚!」

紹介されると、渚は一瞬体をびくつかせ、おどおどしながら立ち上がり、頭を下げて小さく手を上げるとすぐに椅子に座った。会場は大歓声で応えてくれた。

「そして、今回特別に参加してくれたプロのドラム木村さん!」

木村さんは、軽くドラムをさばいて歓声に応えた。軽くと言っても綺麗で高度なドラムさばきだった。

「最後に、ヴォーカルの私、滋です!」

すると、会場は一番と言える歓声で迎えてくれた。

「これで、午前の部は最後だから楽しんでいてね。それでは、さっそく一曲目いきます!」

とうとう本番が始まった。ドラムがさばき始め、一緒にギターとベースが引き始める。ピアノも必死になって音を出していた。そして、リズムの乗ったヴォーカルが歌い始めた。

滋の美声が体育館中に響く。会場のモチベーションは最高に高まっていた。飛び跳ねたり、腕を大きく回したりと盛り上がっている。

それに負けないくらいに、駿もギターを弾いて跳ねたりとしていた。一也はそつと渚を見た。渚は大変そうにピアノを弾いていたが、多少は楽しんでいるように見える。

5分くらいして、曲は無事誰も失敗することなく終わった。

「みんな、どうだった?!」

滋が全員に問いかけると、会場から歓声が跳んだ。最高や良かったなどと聞こえてくる。

そのとき、一也は入り口の方で数人の人影を見た。体育館中は暗くしてあるので、全員の顔は見えないが、入り口は光が若干漏れており、かすかに顔が見ることができた。その中に、こつちを睨みつけているやつがいた。そいつらは一也と目が会うと、会場から出て行った。

「残念ながら、次の曲で最後となります!」

その言葉で、会場は大きくため息を吐いたり、ブーイングが起きた。それを滋が静める。

「最後の曲は、渚のソロ演奏です。みんな静かに聞いてね!」

そういうと、一也たちは楽器を持ち、舞台裏に戻っていった。そのうちに、係員が渚のピアノを中央に持っていく。

その間、渚は緊張して体を震わせていた。すでに、楽しもうとしていない。

準備が整い、一つのライトが席に当てられ渚は座った。会場中が静かになり、演奏が始まるのを待つ。

しかし、渚はなかなか弾こうとしなかった。手を鍵盤の上に乗せてすらおらず、膝の上で強く握っていた。あきらかに緊張している。

客席からはなかなか始まらないから、少しずつざわめき始めていた。

「渚、大丈夫かな？」

「渚ちゃんどうしたんだ？」

渚はいつこうに弾き始めずつつむいたままだった。

一也はマイクを掴み、渚に近づいていった。その前に、客席に向かって言った。

「すみません。マイクのスイッチがなかなか入らず、始めることができませんでした。ここで、渚から一言ありますので」

その言葉でうつむいていた渚が顔を上げる。一也は持っていたマイクを渚に渡した。

「お前言ったよな。この曲は大事な曲だって。それを全部台無しにしているのか？」

すると、渚はなにかを思い出し、微笑みながらマイクを受け取った。椅子から立ち上がると、一つ大きく深呼吸して、マイクのスイッチを入れた。

「今から弾く曲は、私のお母さんが大好きな曲で、幼いころから聞いてた私も好きになりました。ご静聴おねがいします」

渚はマイクを一也に返すと、椅子に座り、そつと鍵盤に手を置くと、なめらかに動かし弾き始めた。綺麗な音が会場を包み、心が和まされる想いがした。

客席全員が静聴し、何人かは、左右に腕をリズムよく動かしていた。駿たちも静かに聞いていた。

渚の表情は楽しそうに笑っていた。一也はそれを見て、僅かながら安心した。

そして、演奏を聞きながら、あの少女のことを思い出した。今でもあいつは楽しい学校生活を送っているのだろうか。一也は、またあいつと逢いたくなかった。また逢える日が来るのか、期待を持たせ…。

そして、渚は一度も間違えることなく演奏は静かに終わった。

渚がその場に立って丁寧に頭を下げる。そのとき、客席から大きな拍手がわきおこった。その状況に渚を戸惑っていた。自分が最後まで弾けたことに、そして、大成功に収めることができ、ほっとした

のか、うつすらと目に涙を浮かべていた。

一也たちは裏から出てきて渚のもとに向かった。

「最高の演奏でしたね。それでは、渚さんから最後に一言どうぞ」

滋が渚にマイクを渡した。

「え？ えと、その……」

全員が渚に言葉に耳を傾ける。少し考えた末、渚は思い切った。言った。

「二年A組では喫茶店をしています。私たちもしているので、どうぞきてください」

なぜか宣伝になっていた。しかし、みんな大歓声を上げて応えてくれた。渚はほっとした表情になった。こうして、一也たちのバンドは幕を閉じた。

午後からは、一也たちはクラスの出し物のほうを手伝った。

「さっすが一也。よく似合っているな」

一也と駿はタキシードに着替えた。何人かの女子がちらほらこっちを見てるのが分かった。しろうじきうざったい。

「面倒だから俺は何もしねーぞ」

「まあ、そう言うなって。少しはお前のために働いているメイドたちの気持ちも分かってやれよ」

すると、教室の扉が開き二人の女子生徒が入ってきた。

「お、おまたせしました」

メイド服を着た渚が顔を真つ赤にして入ってきた。一也と駿はついその姿に見とれてしまった。

「あ、あの……に、似合うでしょうか？」

「渚ちゃん似合いすぎ！ めっちゃかわいいよ！」

「か、一也さんは……どうですか？」

「いいんじゃないの」

一也は近くにあった椅子に座り、ぶっきらぼうに言った。

「ありがとうございます」

渚はそつと微笑んだ。その後ろからもう一人が出てきた。

「一也！ 見て見て。初めてメイド服着たよ。どう？ 似合ってる？」

「おおー！ 滋ちゃんもすごく似合ってるよ。かわいい」

滋は駿を無視して一也のところにいった。

「ねえ、どう一也？ けっこう似合ってるでしょ？」

「なんでお前まで着てんだよ。さっさと帰れ」

「まあまあそんなこと言うなって、一也。見ろよ。渚ちゃんを」

いつのまにか、渚はたくさんの女子に囲まれ人気者となっていた。

「渚ちゃん、メイド服すごく似合ってるよ」

「ありがとうございます」

「ピアノ上手だったよ」

「は、はい。ありがとうございます」

こんなにも人と話すのは初めてなのか、異様に緊張しながら、一人一人耳を傾け、受け応えていた。それもそのはず、渚は同じクラス的女子と話をするのは今が始めてと言って良いだろう。

「やつぱりしてよかったな。渚ちゃんも一躍人気者だぜ。大成功におさまったということだな」

駿の言うとおり大成功だった。しかし、それと一緒に心の奥そこでは寂しさもあった。

午後の部が始まった。お客は男子生徒ばかりで雪崩のように襲いかかってきた。

「渚ちゃん、コーヒーちょうだい」

「オレも、オレも」

「オレに紅茶くれ」

「滋ちゃん、こっち向いて」

「滋ちゃん、コーヒー持ってきて」

教室は渚と滋を呼ぶ声で溢れていた。

「すごい人気ね。ちょっと悔しいけど。はい、二人とも。これ持ってきて」

「わかりました」

「まかせて」

二人は、コーヒーと紅茶をおぼんに乗せ、次々に持っていくた。

教室の外は未だに長蛇の列で、ほとんどが男子生徒だが中には女子生徒も交じっていた。

「ねえ、一也くん。あそこの席にコーヒー持っていくてくれない？」

梓がコーヒーの乗ったおぼんを椅子に座っていた一也に渡してき

た。

「は？　なんで俺なんだよ。お前がやればいいだろ」

一也は再び外を眺めた。

「でも、あのお客さんは……」

その席は三年生の先輩だった。見るからに化粧をしていて髪は茶色に染めた不良のようだ。みな怖がっているようでそこだけ別空間のようだった。

「まかせろ！　オレが持っていてやるよ」

駿が梓からコーヒーマットの乗ったおぼんを奪い、どつどつと姿勢よくその席に向かった。

「お待たせしました。コーヒーでございます」

駿は自分なりにかつこよく接客し、コーヒーマットを置いた。

「なにあんた？　私は一也くんに持ってきて欲しかったのに。これじゃないから持っていて」

「一也くん。コーヒーマット持ってきて」

駿の持ってきたコーヒーマットは完全に無視され、二人は何度も一也の名前を呼んでいた。

「なんで……？　なんでオレだけ……」

駿は隅の方で持っていたコーヒーを一人寂しく飲んでいた。

「だからね。お願い」

梓が手を合わせてお願いした。一也は舌打ちをして新しいコーヒーの乗ったおぼんを手にとった。

「これだけだぞ」

一也は片手でコーヒーを席に持っていた。

「お待たせしました。コーヒーです」

一也は二人の前にわざとらしく乱暴に置くと、その弾みで中身が飛び散ってしまい、制服に付着してしまった。

「熱い！」

「ちょっと！ なにすんのよ！」

二人の女子は椅子から立ち上がって一也を睨みつけてきた。一也は鋭い目つきで睨み返した。

「あ？ お前らが持つてこいって言ったんだろ？ ガタガタ言ってるじゃねーよ。殺されてーのか」

その目は本気で殺すという目をしていた。その目を見た二人の女子は怖がってすぐさま教室から出て行った。

「一也くん。そんなんじゃないお客さん減っちゃうよ」

「いいだろ別に。ちゃんと持ってたんだから」

「ちゃんとじゃないけど……」

すると、滋がこっちに跳んできた。

「ダメね一也は。私をよく見ておきなさい」

滋はコーヒーと紅茶を持って、二人の男子生徒のもとに持っていた。

「おまたせしました。コーヒーと紅茶をお持ちしました。ごゆっくりどうぞ。熱いから気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

滋は最後にかわいらしいしぐさを見せてその場から去った。

「どう？ 分かった？ 接客はこうするのよ」

「全くわからねーな。つかさつさと帰れ」

「おいおい一也。そんなひどいこと言うなって」

いつのまにか駿は立ち直っていた。

「そうよ。見なさい渚を。一生懸命頑張っているわよ」

「也たちは渚を見た。」

「おまたせしました。コーヒーです。ごゆっくりどうぞ」

「熱いので気をつけてお飲みください」

「ありがとうございます。また来てくださいね」

渚は忙しそうに働いていた。飲み物を運んで、接客して、最後にテーブルを拭いたり、お礼を言ったりと大変そうだった。そのときだった。

「ああ！」

ガシャ ガシャ ガチャン

渚は足をつまずき、その場に転んでしまった。

「渚！」

「渚ちゃん！」

滋と駿が渚のそばに寄った。

「大丈夫？ 渚……」

「は、はい。大丈夫です。……うつ」

渚は足首を抑えた。そこは赤く腫れあがっていた。

「ちょっと捻ったみたいね。一也、保健室に連れて行って」

「は？　なんで俺なんだよ。お前が連れて行けばいいだろ」

一也は接客などせずに、どうどうと勝手に紅茶を飲んでいた。

「あんたが一番暇でしょ。それともなに？　あのこと言っているの？」

一也は滋が考えていることがすぐに分かった。一也はため息を着くとカップを元の位置に戻した。

「わかったよ。ほら、いくぞ」

渚の手を取り立ち上がらせると、保健室に向かった。

保健室にむかうと生徒たちがすれ違ったびにこっちを見てくる生徒たちがおり一也は腹がたった。

「あ、あの、か、一也さん。このかつこうはさすがに恥ずかしいです」

渚の顔はまたもや真っ赤になっていた。一也は渚をお姫様抱っこをしているのだ。

「しょうがないだろ。足が痛いんじゃないし」

「は、はい。……ありがとうございます」

「それにしても、お前けっこう軽いな。もっと飯食えよ」

「……一也さん、……デリカシーがないです……」

保健室に着くと一也はドアを足で蹴飛ばした。中には誰もおらず、電気だけが着いていた。

「くそ。誰もいねーのか。こういうときにいないんじゃない先生なんていう意味ねーな」

一也は渚を窓際のベッドに寝かせ、適当にシップを探し出し、渚の足首に貼った。

「ありがとうございます。いつかお礼をしますね」

「いいよ、別に」

一也は隣のベッドに倒れ、仰向けに寝転がった。

「……一也さん、本当にありがとうございます。私、今日は本当に楽しかったです。あんなに人に囲まれて、あんなに人と話して、たくさん友達ができて、とてもうれしいです」

「それは良かったな」

「どれもこれも、一也さんと駿さんと滋さんのおかげです。本当にありがとうございます」

「お前が頑張ったからできたんだよ。俺たちは少し手伝っただけだ」

「はい。でも、ありがとうございます」

渚はそつと一也に微笑むと、陽気に鼻歌を歌っていた。

その後、滋が渚の制服を持って、駿は一也の制服を持ってきた。それぞれ着替えるとさっき喫茶店は終わったと伝えられ、売上は学年一位だったようだ。

そして、文化祭の全日程が終了した。

放課後。一也は車を呼び、渚の家まで送ることにした。滋は今日のことをレポートにまとめるため、一足先に帰った。駿は明日休校日だから一也の屋敷に泊まると言い出し、一緒に帰ることになった。車が来るまで保健室で待つことにした。

「いいんですか？ 一也さん。送ってもらって……」

「いいって言ってるだろ。滋が送れってうるさいんだ」

「お前なんで滋ちゃんのいうことは聞くんだ？ なんか弱みでも握られてんの？」

駿は一也の隣のベッドに寝転がり、携帯をいじっていた。一也はするどい目つきで駿を睨みつけた。

「お前の首を握ってやろうか？」

駿は一瞬で一也の危険を覺つて毛布を被つた。渚はそれがおかし
く笑つていた。

その時、なにか不吉な音がした。その音を聞いた一也は窓を見る
とすぐにベッドから降りた。そのときだった。

ガシャンッ パリンッ ガシャンッ ガシャンッ

第七章：事件と過去

突然窓ガラスが割れた。凄まじい音が響き渡り、無数の破片が飛んで一也たちに襲い掛かってきた。下にはたくさんの破片でいっぱいだった。

渚と駿が恐る恐る毛布から出てきた。渚はすぐに一也に毛布を被せられたおかげでまったくケガをしなかった。

「すごい音だったな。何で窓が……。一也！」

「どうしたんですか？ 駿さん……。一也さん！」

二人は一也を見た。一也は左腕を顔の前に上げた状態で立っていた。その左腕にはいくつものガラスの破片が刺さっていた。傷口からは赤い血がしたっており、一滴ずつ床に落ちていった。

一也は渚に毛布を被せたあと、自分の分は間に合わなかったので、咄嗟に左腕でかばったのだ。

一也は痛みにくらえながら、そつと落ちたガラスの破片を見渡した。その中にいくつか石が交じっているのに気づいた。

それを見た一也はすぐに外を見た。やはり外には誰かいた。

「やろっ……」

一也は割れた窓ガラスに飛ぶ移り外に飛び出した。外には何人も不良らしきがらの悪いやつらが立っていた。

どいつもこいつも見たことないやつらばかりだった。しかし、一人だけ覚えがあった。そいつはステージの上で見た入り口にいたやつだった。あの睨みつけてきたやつが襲ってきたようだ。金髪のそいつの手にはいくつかの石が握られていた。

そのとき、後ろから駿がきた。

「ん？ あいつ……」

駿は金髪の奴を見覚えがあるようだった。

「あいつを知ってんのか？」

「あいつ、たしか織田聡だ。隣町に住んでいる奴でケンカが一番強いって噂がある」

すると、織田聡は不敵に笑いながら前に出てきた。

「その通りだ。俺が織田聡だ。お前らがこの町のケンカ最強コンビ一也と駿だな。どっちがケンカが強いかな勝負しようぜ」

一也は駿に小声で問い掛けた。

「あいつはどうしてる？」

「保健室から出ないように言っておいた」

「そうか……」

それを聞くと、一也はにやりと笑みを浮かべた。

「いいか、駿。こいつらは俺が相手する。今機嫌が悪いんだ。いいな？」

駿は一つため息をついて、一也の肩に手を置いた。

「嫌って言うてもどうせ取るんだろ。わかったよ。でも、あいつらがオレにも襲ってきたら悪いが参加するぜ」

「いいだろ」

一也は不良たちの前に出ると、右手を出して手招きした。

「今左手使えないんだ。右手一本と足でお前ら全員を相手してやる。これから用があるんだ。さっさとかかって来い」

すると、織田はまたも笑った。

「いい度胸だな。その態度がいつまで続くかな」

織田が手を上げると周りにいたやつらがいつせいに襲いかかってきた。

一也は左腕を後ろに手を回すにとやっと笑い立ち向かった。十人くらいいる不良たちは一也に襲いかかるが、一也は手を使わず足を中心に対戦した。そのせいで、スピードが若干遅れてしまい避けることはせず殴られる前に蹴るかたちになっていた。これは意外に体力を使うので技のキレが少しずつ落ちていく。

そのとき、一也の腹に一人の拳があたり、動きが止まってしまった。その瞬間、全員で殴ってきて四方から拳や脚が飛んできた。一也は身動きできずやられるだけだった。

その間に何人かが駿のほうにも襲いかかってきた。

「ああ。こつちにも来ちゃったよ。せつかく疲れなくてすむと思っただのに」

駿はしぶしぶ腕をかまえると、その場にリズムよくジャンプした。それはボクサースタイルのようだった。

「おりゃああ！」

一人の拳が襲い掛かる。駿はそれを綺麗にかわすと、カウンターをくらわせた。

ドガッ

カウンターが綺麗にきまり、一人はその場に倒れ込んだ。

「カウンターって綺麗にきまると超気持ちいいんだな」

それからも、駿は襲い掛かってきたやつらに立ち向かっていった。

一也は何度も殴られてしまい、怒りが頂点に上りついた。

「お前ら、まじで殺してやる……」

一也はその場に右手を着くと、脚を上げ、体を回転させ全員を蹴

り飛ばした。

すぐに脚を下ろすと近くにいた奴の顔をおもいきり蹴飛ばした。そいつはそのまま転がり動かなくなった。

「一人目」

次に一也は、また近くにいたやつを腹を蹴り、寝転がっているところで頭に踵落としをした。

「二人目」

「うおおお」

後ろから一人が襲いかかってきた。

一也はすぐに右回し蹴りをくらわし、倒れたところに左脚で顔を蹴り上げた。そして、そのまま上げた足を腹に振り落とし地面に叩きつけた。

「三人目」

それからも一也一人一人確実に倒していった。

そのとき、背中に突然痛みが走った。体が動かない。一也の後ろには織田が立っていた。その手にはナイフが握られ、その刃先は一也の背中に刺さっている。

「そこまでだ。やっぱ強いな。でもここで、お前は死ぬ」

その光景を駿も見ていた。

「一也！」

ナイフを抜いた織田は高笑いすると、一也はその場に倒れた。背中からは赤い血がどんどん溢れていく。

「おい、一也！」

しかし、どんなに呼んでも一也はぴくりとも動かなかった。

「俺の勝ちだな。たしかにお前は強い。でも、物には叶わないだろう」とすると、一也は突然拳を握り、ゆつくりと立ち上がった。

「……お前のいうとおりだ。物には敵わねーな。でも、扱うやつが弱ければ役目は果たせない」

一也は織田にゆつくりと振り返った。血走った一也の目は織田を睨みつけ、その鬼のような目を見た織田は恐れもせず笑った。

そのとき、突然雨が降り出した。地面が少しずつ黒く染まっていた。冷たい滴が二人に襲い掛かり、一也の左腕と背中血が雨水と一緒に流れていく。

「いくぞ」

織田がナイフをかまえ襲い掛かってきた。一也は右脚を少し退いた。

織田がナイフを突き出した瞬間、一也は脚をすばやく動かそうとした。しかし、背中に激痛が走り、足が上がらない。

ナイフは容赦なく襲い掛かり、避けようとしたが肩をかすめてしまった。

「うっ！」

左肩から血が出始めた。激痛で地面に膝を着く。

「一也！」

駿が一也のそばによって声をかける。その光景を見て織田が笑った。

「ははは。なんだよお前ら。やっぱり二人で一人前なんだな。一人じゃなんにもできねーじゃん。二人で仲良く死ね！」

その言葉に、一也は今までに味わったことのない怒りをおぼえた。駿を無理矢理どいかし、近づいてくる織田の顔をおもいつきり殴った。

「ぐわっ！」

織田は吹っ飛び、その弾みでナイフが手から離れた。

「……俺が一人で何もできないだ……。ふざけんな。俺は今までずっと一人だったんだ。お前ごときが、調子にのんじゃね！」

一也は織田のもとに向かうと、倒れている頭に向かって踵を降ろし鼻の骨を折った。

「がっ！」

織田の鼻から鼻血が大量に出てきた。一也は気にすることなく右手で腹を殴る。

織田は口から唾液を出しながら腹を抑え、一也から離れるとすぐに立ち上がった。

「てめえ、殺してやる！」

織田が拳を振るう。一也はそれを綺麗に避けると右拳を顔に突き出す。織田はカウンターと思った。しかし、怒りに満ち溢れた一也はそんな甘いことはしなかった。突き出された拳から二本の指が飛び出し、その指は織田の目に突き刺された。

「うわあああ！」

織田はその場から離れ目を抑える。目からは血が溢れていた。

一也はその光景を見て笑った。そして、落ちていたナイフを拾った。

「へえ、なかなかいいナイフじゃん」

一也はナイフを握ると、織田に近づいた。駿は、

「ああ、終わったなあいつ」

といい、濡れた髪の毛を目にかからないように払っていた。

すでに他のやつらは全員倒れてしまっている。

一也は、織田の右手で胸倉を掴むと宙に浮かせた。

「俺の声が聞こえるか？」

織田は目を抑えながら口を開いた。

「…………お前、鬼のようだ。…………平気でこんなことしゃがって、正気じゃね」

「お前とはくぐってきた修羅場が違うんだ。それに、あの苦しみも知らねーだろ」

そのとき、背中に激痛が走った。

どうやら、速く治療したほうがいいようだ。出血のせいで目眩も起きてきた。

「そろそろお前とのケンカも終わらせるか。じゃあな、あの世で後悔しな」

一也がナイフを握り直し、織田の腹に突き刺そうとした。そのときだった。

「やめてください！」

突然後ろから声が聞こえ、一也は腕を止め振り返った。

そこには渚がいた。

「一也さん、やめてください。これ以上この人を傷つけないでください！ どうしてケンカなんて……」

「うるさい。お前には関係ないだろ。これは俺のケンカだ」

一也がナイフを突き刺そうとする。しかし、途中で手を掴まれ止められた。そこには駿がいた。

「やめろ、一也。渚ちゃんの前で、それはないだろ」

駿がじつと睨みつける。一也は舌打ちをするとナイフをその場に落とした。そして織田を振り飛ばした。織田は数メートル離れたところで寝転がり、痛みにもがいている。

「お前も邪魔をするのか、駿」

「もういいだろ、十分にやった。それに、渚ちゃんの前でやりすぎだ」

「だからどうした」

一也はするどい目つき駿を睨みつけた。

「俺は相手が死ぬまでやり続ける。誰にも邪魔はさせない」

一也は倒れている織田に近づいた。

しかし、それを渚が両手を広げ立ちはだかった。震える体で一也の前に立っていた。

「これ以上させません。どうして平気で人を傷つけることができるんですか？ 相手の気持ちを考えたことがあるんですか？」

一也は鼻で笑うと渚の質問に答えた。

「ないな。相手の気持ちなんて知るわけないだろ。相手がかかってくるからこっちはつきやってやってるんだ」

「……どうして、どうしてそんなことを……。それでも人なんですか？ それでも心を持っているんですか？ 人を傷つける人は最低の人間です。一也さんは最低です！」

渚の目には涙が溢れていた。それを一也は無表情で見е言った。

「言いたいのはそのただけか？」

「えっ？」

「お前が言いたいのはそのただけか？」

一也は渚を無理矢理どかし、織田のもとに向かった。しかし、渚は一也の何度も立ちはだかった。

「どうしても言うなら……私を倒してください」

渚は今度は泣きもせず、真剣な目で一也を睨みつけていた。一也は渚の頭を掴むと睨みつけた。

「お前に、あのときの俺の気持ちがわかるか？ あのときの苦しみと悲しみが。なにもわからないやつが俺の邪魔をするな」

そのとき、渚は前に言われた一也の言葉を思い出した。あれは、一也とピアノの練習したあとのときだ。

『お前に、親のいない苦しみとあのときの地獄の日々が分かるか』

あのときも、こんなことを言っていた。

「親のいない苦しみと地獄の日々……」

一也は渚の言葉に反応した。どうやらあのとき言った言葉を覚えていたらしい。

「そのとおりだ。お前は苦しみを知らないだろ。幸福な人は強くない。屈辱と憎しみを知っているやつだけが強くなる。そして、復讐するんだ」

一也が渚の横を通って織田に近づく。

それを渚が一也の腕を掴み止めた。一也は渚に振り返った。すると、渚は一也に必死で訴えた。

「……私じゃ、……私じゃ一也さんを助けることができませんか？」

涙がにじみ出ている瞳で渚は真剣に一也を見ていた。一也はその瞳を見ると目を反らし、渚の手を離れた。

「もう遅い。俺を助けることができるのは……」

一也の頭にはあの少女の姿が映し出されていた。

「……あいつだけだ」

一也は左腕を抑え、織田を一目見ると校門から出て行った。

その姿を渚と駿は静かに見送った。

「駿さん、……私一也さんを助けたいです。明日一也さんの家に行きましょう」

「でも、渚ちゃん……」

「お願いします。教えてください」

渚は真剣な目で駿に訴える。

駿は一つため息を吐くと、自分の上着を脱ぎ渚の頭に被せた。

「明日風邪を引かなかつたら教えてやるよ」

「はい」

すると、渚は緊張が緩んだのかその場に座り込んでしまった。そして、捻挫した脚を抑えた。

いつまでも、雨の音ばかりが耳の中に響いていた。

次の日、学校は前日が文化祭だったので休み。

渚と駿は学校で待ち合わせをして、目的地へと向かった。

「渚ちゃん、昨日濡れたけど大丈夫？ 風邪引かなかった？」

「はい、大丈夫です。それより、一也さんの家はどこにあるんですか？」

渚は窓から外を見た。タクシーでずいぶんと走っているが、家らしきものは見られない。さっきから、大きな広場の柵しか映らない。

「どこっていうか、……もう着いているんだよね」

「え？」

二人はタクシーから降りると、目の前には大きな門が立ちほだかっていた。

渚は意味が分からず、何度も駿と門を見ていた。

「ここが、一也さんの家ですか？」

「家と言うより屋敷だな」

駿は門に近づくと、インターフォンを鳴らした。中から執事の小林の声が聞こえてきた。

「はい、どちら様でしょうか？」

「お久しぶりです。茨城駿です」

「これは、これは、ようこそおいでくださいました。どうぞ中へ」

すると、大きな門が自動で動き始め、ゆっくりと開いていった。

その光景を見て渚は口を開けて驚いていた。

少しして奥のほうから黒い高級車が来た。二人の前に停まると、中から小林が出てきて丁寧にお辞儀した。

「ようこそお越しくださいました。心より歓迎いたします。どうぞ、中へ」

小林は二人を車の中へ促し、屋敷に向かって走り出した。

屋敷の中に入ると、二人は客間に案内された。

渚は緊張しており、ぎこちない足取りで歩いていた。

「渚ちゃん、そんなに緊張しないで」

「で、でも、こんなお屋敷に入ったの初めてで」

その様子を見て、案内しているメイドはくすくすと笑っていた。

一つのドアの前で立ち止まり、メイドは二人を中に入れた。

上にシャンデリア、真ん中に綺麗に磨かれたテーブルにふかふかのソファが置かれていた。

「こちらで御寛ぎください。あとで、紅茶とお菓子を持ってきてまいります。どうぞ、ごゆっくり」

メイドは丁寧にお辞儀をして、部屋から出て行った。

駿はさっそくふかふかのソファに座り、ゆったりと寛いだ。

「いや、やっぱりここはいいな。最高」

駿は遠慮もなくしているが、渚はさっきからおろおろしており、ソファに座ろうとしなかった。

「渚ちゃんも座ったら？」

「で、でも、私なんか座っていいのでしょうか？ こんな高そうなソファに……」

「いいんだよ。ほら」

駿は渚に手を掴み、ソファに座らせた。渚はあまりにもソファがふかふかしていたので手で触っていた。

「本当に高そうですね。それにしても、一也さんて何者なんですか？ こんな屋敷に住んでいるなんて」

「うーん、オレが言っているのかな？」

すると、ドアが開き小林が入ってきた。

「申し訳ありません。只今、一也様は外出中でして、しばらくすれば帰って来ると思われますが」

「そうですか……。渚ちゃんどうする？」

渚は考えた末、小林に言った。

「あ、あの、あなたは一也さんのことを知っていますか？」

小林は少し黙っていたがすぐに口を開いた。

「はい、ご存知です」

「それなら、お話しをしてもらえませんか？」

小林はゆっくりとうなづいた。

「私でよろしければ、なんでも」

そういうと、小林は二人に一礼してソファに座った。

「まずは、自己紹介をさせてもらいます。一也さまの保護者代わりでもあり、伊集院家の執事であります。小林と申します」

「私は、一也さんと同じクラスの一ノ瀬渚と申します」

「これは、これは、一也様にこんなにも可愛らしいお友達がいるとは、これからもよろしく願います」

「いえ、こちらこそ」

二人はお互いに自己紹介が終わり、本題に入った。

「さて、何から話したら良いのでしょうか？」

「まずは、一也さんの過去を知りたいんです。いったい何があったのか？」

「その前に、一つよろしいですか？」

「はい、なんでしょう？」

「どうして、一ノ瀬様はそんなにも一也様のことを？」

渚は、少し考えはつきりと言った。

「一也さんは、昨日ケンカをしました。それも、やりすぎるように。私は信じられないんです。どうして平気であんなことができるのか。とても心があるとは思えません。だから……」

小林は小さくうなずいた。

「分かりました。それでは話しましょう。しかしその前に」

すると、ドアが開きメイドが紅茶とお菓子を持ってきた。

「いゆっくりどうぞ」

そう言つて、メイドは部屋から出て行つた。

「遠慮せずに、お召し上がりください」

「はい、ありがとうございます」

二人は紅茶を啜つた。

「おいしいです」

「ありがとうございます」

小林は満面の笑顔で礼を言つた。

「それでは、お話しいたします。まずは、伊集院家の当主である一男様とその奥様である明美様。そう一也様のご両親のことをご存知ですか？」

二人は首を横に振つた。

「いえ、知りません」

小林はゆつくりとうなずいた。

「一男様と明美様は、一也様がまだ幼いころに……原因不明でお亡くなりになってしまったのです。二人はお仕事で忙しく、一也様のことは私とメイドたちにまかせつきりでした。そんなときにお亡くなりになってしまったので、一也様は親の愛情というものを知らず育ってしまったのです」

「そうだったんですか……」

駿は悲しげな表情になった。しかし、渚は違った。

「けれども、それだけであんなことができるとは思いません。もっと、なにかあるはずです。過去に、何か一也さんを傷つけたような……。私は、一也さんを助けたいんです。一也さんを……」

小林は真剣な表情になると、重い口を開いた。

「少し長くなりますが、聞いてくれますか？」

第八章：衝撃の過去

小林は重い口を開いて、話し始めた。

「一ノ瀬様の言うとおり、それだけではあんなことはできません。もっと、一也様には苦しい過去があります。しかし、このことを話すには私一人では……」

すると、小林は懷から携帯を取り出し電話をかけた。

「突然お掛けして申し訳ありません。ちょっとお願いがありましてはい、では、お待ちしております」

そう言っで、小林は電話を切った。

「失礼しました。しばらくお待ちください。ある人物をお呼びしましたので」

十分くらいして、その人物は訪れた。

「え？」

「呼んだ人って……」

ドアの前には滋が立っていた。小林はソファから立ち上がると、滋に深くお辞儀をした。

「突然のお誘い、申し訳ありません。お礼はきっちりいたしますので」

「それより、私は何をしたらいいの？」

「はい、茨木様と一ノ瀬様に一也様の過去をお話して欲しいのです。このお二方には知る権利があります」

滋はその言葉を聞くと二人の顔を見た。

その表情はいつもの元気で優しい顔ではなく、険悪とした真剣な表情だった。

「いいの？ あなた、もう伊集院家の執事として入られなくなるかも知れないのよ？」

小林は胸に手を添えると深く頭を下げた。

「もちろん、その覚悟はできております」

その言葉を聞いて、滋はため息を吐いた。

「まあいいわ。もしクビになったら私が雇ってあげる」

そういうと、滋はソファに座り二人に向き直った。

「いい？ これは私と一也と小林の三人しか知らないことで、一也に誰にも話すなって言われているの。これを聞いたら、……一生苦しい生活が待っているわよ。それは自分だけでなく、家族や身内にも。それくらい、一也にとったら簡単なことよ。それでも、……聞く覚悟はできてる？」

滋は真剣な表情で二人を見つめる。逃げ出すなら今と訴えているようだ。しかし、

「覚悟はできてます。そのために、……一也さんを助けるために来たんですから」

滋は渚の目を見て首を縦に振った。

「あんたは？」

滋は駿に問い掛けた。駿はやれやれといった感じで答えた。

「渚ちゃん一人を苦しい目に合うことはできないね。それに、俺も一也のことは知りたい」

滋はうなずくと腕を組んでソファに深く座った。

「わかったわ。話してあげる。まあ、なにかあつたらできるだけ私もサポートするけどね」

「ありがとうございます」

「じゃあ、話すわね。その前にこれを見てもらいましょうか」

すると、滋は左腕の袖を捲くり上げ、二人に見せた。

「え？　おい、なんだよそれ……」

「滋さん、その傷……」

二人は滋の腕を見て驚いた。

腕にはざっくりとナイフかなにかで切られた跡があった。その痛々しい傷は、半分以上傷跡があり、跡が無い部分は少しだけだった。

「この傷跡は今なら簡単に消すことができるわ。でも、私はしない。この傷を見るたびにあのことを思い出して、胸の中で一也の力になるうって誓っているの」

二人はごくりと喉を鳴らした。いったい、一也にはなにがあったのか。そればかりが気になった。

「それじゃあ、始めるわよ。一也の過去を。そして、あの強さの秘密と苦しさを」

二人は滋の話に耳を傾け集中した。そして、一也の秘密が始まった。

親のいない一也は、なにか学校行事があるたびに一人だった。

たまに、小林やメイドが着いてくれるが、本当の親ではなく、血の繋がりが無いから他人としか思えなかった。

周りからは哀れな目で見られていた。子供は知らなくても、親たちは、一也の両親が死んだことは知っていた。一也を見るたびに、お金持ちの親はそのことばかりを話題にしていた。

事件が起こったのは、一也が小学四年生のときだった。毎年行わ

れる体育祭のとき、たまたま小林のメイドも来ることができず、一也は隅の方で、一人昼食を食べていた。

すると、数人の生徒が一也に近づいてきた。一也は顔を上げると、その生徒たちはいきなり地面に落ちている石や砂を投げてきた。

「うわっ！ やめてよ！」

一也は目を瞑って反発する。しかし、いつこうに止める気配は無く、すでにお弁当は砂だらけで、一也の腕や足には無数の傷ができていた。

「お前のお父さんとお母さんいないんだろ。父ちゃんが言っただぜ。伊集院家の人たちはみんなおかしなやつらばかりだから死ぬんだって」

「莫大なお金ばかり貰っているんだろ？ 卑怯な奴だな」

「二人とも死んで、お前は見捨てられたんだ。お前も死ね」

生徒たちは再び石や砂を投げ出した。その一つの石が一也の頭に当たり、血が出だした。

「よかったな。これでお前も死ねるぞ」

それを聞いた生徒たちは大声で笑い始めた。それを見ていた周りの親たちは、止めようとせず、一緒にくすくすと笑っていた。

一也は今初めてわかった。伊集院家はこんなにも嫌われていることを。自分は一人なんだとあらためてわかった。そのことがわかったと、

恐怖心が生まれ、体が震えてきた。

「やめなよ！」

笑っている生徒たちをどかし、滋が一也のそばに寄った。

「大丈夫？ 一也……」

滋はポケットからハンカチを取り出すと、そっと一也の傷口を拭いてあげた。

「なんだよ、三千院。こいつをかばうのかよ」

「もしかして、お前ら付き合ってたの？」

それを聞いた滋は、顔を赤くして否定した。

「ち、違っわよ！」

「付き合ってたかったら、普通助けねーよな」

「ラブラブ！ ラブラブ！ ラブラブ！ ラブラブ！」

生徒たちは二人をからかい始めた。

とつとつ怒りが芽生えた滋は、その生徒の中でも一番強くリーダーでもある三井の頬を叩いた。

「最低！」

叩かれた三井は滋を睨みつけた。

「なにすんだよ！」

「きゃあ！」

三井は滋を力強く押して吹っ飛ばした。滋はその場に倒れてしまった。

その光景を見た一也はその場に立ち上がった。いくらなんでも女の子に手を出すのは最低なことだ。許せなかった。それが、幼なじみの滋ならなおさらだ。

しかし、一也は立つたまま動けなかった。三井が憎い。今すぐに謝らせてやりたい。だが、体が恐れを感じ、力が入らない。

滋は涙目でこっちを見ていた。三井たちもこっちを見ている。

一也は目を瞑ると、渾身の力を振り絞ってその場から逃げ出してしまった。

あのとき以来、一也は毎日いじめられるようになった。

弱虫、卑怯者、捨て子、くさい、きたない、きもいなど、三井たちから罵声を浴びせられ続けた。少なからずいた友達もいつしか消えていった。

昼休みや放課後には殴られるようになった。

小林やメイドたちは心配してくれるが、主のいない家など力はない。小林たちにはもとも力がないので、他の者たちに逆らうことができない。だから、いじめを止めることもできなかった。

一也は、ただ耐えることしかできなかった。

いじめられてから一年以上経ち、いつしか全生徒からいじめられるようになった。

中でも三井のいじめは苦しかった。トイレに行けば水をかけられたり、便器の水に顔を無理矢理押し込まれ窒息しそうになったこともあった。

ほかにも、一也がいない間にお弁当をゴミ箱に捨てたり、机や椅子をペンキだらけにされた。

そのようなことをされても、先生は助けられなかった。

それも当然である。先生たちは勉強を教えるだけで、その他のことは一切関わらないようにしているのだ。

裏では、親からお金をいただいて、子供がなにをしても無視するようになっているのだ。

それでも、一也は泣くことはなかった。お父さんに言われたとおり、じっと耐えて、なにをされても泣かないと心に誓っているのだ。

そして、いつか強い男になると。その気持ちが実るのはこれからだった。

初等部六年生ときだ。

この日は、六年生主催のダンスパーティーが開かれた。午後六時から十時まで行われ、みな綺麗なドレスに着替え、男女ペアになって踊るのだ。

このパーティーの目的は、これからのためにいろんな人と親睦を深めるためのものらしい。

伊集院家の力も、祖父の宗一郎により少しずつだが元に戻りつつあった。

会場では、中は綺麗に飾り付けられ、周りには豪華な食事があり、優雅な音楽にあわせ、みなパートナーと楽しく踊っていた。

一也は隅のほうで一人、みんなを見ていた。自分でも分かっているとおり、誰も一也をパートナーに選ぶ者なんていない。すると、

「一也、一緒に踊ろう」

目の前には滋が立っていた。綺麗な赤いドレスを身につけた滋は、そっと一也に手を差し伸べていた。

しょうじき、一也は嬉しかった。しかし、今自分と踊れば、滋もいじめられるかもしれない。それが怖かった。だから、一也はうつむいて手を取ろうとはしなかった。

滋はにこつと笑うと、

「行くよ」

と言い、一也の手を取り、強引に引つ張って行った。

会場の真ん中に陣取ると、滋は一也に向き直りそつと微笑んだ。

「さ、踊ろっ」

滋は一也の手を取り踊り出した。一也はあまり踊る気がなかったが、滋のリズムに合わせるようにはした。

すると、少しずつ楽しくなり、いつしか自分から踊るようにもなった。滋もそれを見て楽しそうに笑っている。一也も笑みを返そうとした。

そのとき、

「邪魔だ！ すっこんでろ！」

突然後ろから力強く押され、一也はその場に倒れた。

一也は後ろを振り返ると、そこには三井が立っていた。

「お前なんかが踊っているとせつかくの楽しい時間が台無しになんだよ。さっさと帰れ！ おい、三千院。俺と一緒に踊らないか？」

三井は一也を無視して、滋に向かって丁寧 hands を差し伸べた。

滋は怒りの表情でその手を払うと、一也のもとに寄った。

「一也、大丈夫？」

一也はこくつとうなずくと、その場に立ち上がった。

その光景を見ていた三井は、やれやれといった表情でため息を吐いた。

「ほんとうにお前らは付き合っているみたいだな。そんなやつのがいいんだよ。なあ、三千院」

「うるさい！ あんたには関係ないでしょ！ 気安く話し掛けないで！ 行こう、一也」

そういうと、二人は会場を後にした。

二人は会場から出て、階段の上に座った。

滋は座ると重いため息を吐いた。

「あゝあ、せっかく久しぶりに一也と踊ったのに。あいつのせいで楽しい時間が台無し。ねえ、一也」

すると、一也はうつむきながらぼそとつぶやいた。

「……ごめん」

「どうして一也が謝るの？ 気にしなくていいの。私はいつでも一也の味方だからね」

「……ありがとう、滋」

二人はしばらく星を眺めた。綺麗な空には満面の星が輝いていた。

「綺麗ね」

「うん」

滋は夜空を見上げながらにこにこしていた。

そのとき、後ろから三井の声が聞こえた。

「おい、三千院。今からおもしろいショーをするらしいぞ。お前も来いよ」

すると、滋は三井を睨みつけるような目で振り向いた。

「今一也と星を眺めているの。遠慮するわ」

「なんでそいつなんかと一緒にいるんだよ。俺のほうがいいだろ？ 強いし、かつこいいし、お金持ちだし」

「一也のほうがあんたなんかより、強くて、かつこよくて、お金持ちで、すっごく賢いわよ。さっさとどっか行つて」

それを聞いた三井は険悪な表情になった。すると、いいことをおもいついたのかにやっと笑った。

「こいつのほうが俺より強い？ だったら、今ここで俺のほうが強

いつてことを証明してやるよ」

そういうと、三井は後ろからいきなり一也を蹴り飛ばした。

一也は階段から転げ落ち、一番下まで行くどぐつたりと横たわった。

「一也！」

滋はすぐに階段を降りると、一也のそばに寄った。

そして、倒れている一也を三井が無理矢理立たせると、一也の顔を殴った。

「一也！ ちょっと止めなさいよ！」

「あいつのほうが強いんだろ？ だったら俺を倒してみろよ！」

三井は倒れている一也に容赦なく殴り始めた。一也は歯を食いしばり、じっと耐えていた。

「止めて！ もう止めて！ お願い！」

しかし、三井はいつこうに止めようとしなない。

「だめ！ もう殴らないで！ もう止めて！」

滋は三井に向かって体当たりした。

「うわっ！」

三井はその場に倒れた。その間に、滋は一也に寄り添った。

「一也……、大丈夫？」

滋はそつと一也の頭を持ち上げると、自分の太ももの上に乗せた。

一也の顔はところどころ青く腫れていた。口を切ったのか、端から血がしたっていた。

一也はゆっくりと呼吸をした。痛いけど我慢して泣かないようにした。そのとき、顔に冷たいものがあたった。

雨だろうか？ いや、さっきまで雲一つなかった。

一也は瞑っていた目をそつと開けた。目の前には、涙で瞳が溢れている滋の顔があった。

「一也……。……ごめんね。……私が、私が、……。あんなこと言うたから……。ごめんね……」

滋は泣いていた。大粒の涙を流して泣いていた。一也はそつと滋の頬に手を触れると笑みを浮かべた。

「滋、……。泣かないで。俺は大丈夫だから、……。だから……。怖がらないで。もう泣き止んで……」

滋は一也の手を握ると、涙をこぼしながら何度もうなずいた。一也は手の温もりを感じた。

温かい。とても温かく、心が落ち着く。

そこで、三井は体起こした。それに気づいた滋は後ろを振り返った。

「痛てて、おい、三千院！　なんでそいつを何度も何度もかばうんだよ！」

「そ、それは……」

滋はそつと一也を一目見た。

すると、そつと目を閉じ、決心したかのような表情になり、三井にはつきりと言った。

一也にも聞こえるように。

「私、……一也のことが好きだから！」

え？

一也は滋を見た。

どうして？　どうして俺なんかを？　どうして俺なんかを好きに？

一也はわからなかった。でも、これだけはわかる。今の自分の気持ち嬉しい。これだけはわかった。

「ふざけんな！」

突然三井が叫んだ。その怒り狂った目で一也を睨むと、いきなり胸倉を掴んできた。

滋が一也を助けようと、三井の腕を引っ張る。

「ちょっと、何すんのよ！ 離なさいよ！」

「俺がこいつより下だと？ ふざけんじゃね！ 今まで俺の言うことを聞かなかった奴はいない！ お前は俺の言うことを聞け！」

「いやよ！」

滋は三井にむかつてはつきりと言った。

それを聞いた三井は、一也をおもいつきり殴り飛ばした。

「だったらこいつを殺してやる！」

三井は懷に手をやると、中からナイフを取り出した。それを見た一也は身の危険を感じた。

殺される。死んでしまう。早く逃げないと。

しかし、頭では分かっているも体は動かない。刻一刻とナイフが近づいて来る。

「殺してやる……。殺してやる……」

とうとう三井は一也のところまで来た。一也を見下すと、にやつと笑ってナイフを掲げた。

そして、それを振り落としてきた。

「うつ！」

一也は目を固く瞑った。

もう終わりだと思った。これで自分の人生が終わる。けっきょく、楽しいことはなかった。苦しい毎日だった。けど、最後に嬉しいことがあった。滋は自分のことを好きだと言ってくれた。今までにな
い喜びだった。

これが、愛情というものののだろうか。

「きゃあ！」

悲鳴が聞こえた。滋の悲鳴。

一也はぱつと目を開けた。目の前に滋が立っていた。そして、自分
の上に倒れてきた。

それを一也はうまく受け止めた。一也は三井を見た。すでにナイフ
を振り落とされている。そして、ナイフには赤い血が。

「うつ！」

うめき声が耳に入り滋を見る。

滋は右手で左腕を抑えていた。そこから大量の血が流れていた。そ
こで、状況を理解した。

「滋、まさか……俺をかばって……」

すると、滋は一也にむかって涙をこぼしながらそつと微笑んだ。

「……当たり前でしょ。好きな人がやられるのを見たくないし、助けるのが当然。……私は大丈夫だから、一也は……早く逃げて……」

一也はぎゅつと滋を抱きしめた。

「一也……」

嬉しかった。初めて助けられ、初めて自分を心配してくれて。離れたくなかった。抱きしめたかった。もう……自分は一人じゃないんだと実感できたことが嬉しかった。滋の気持ちが自分の心に伝わってくる。

「一也……泣いてるの？」

一也は泣いていた。初めて一也が泣いた。今まで、どんなことをされてもなかった一也が。止めることができない涙を流していた。

それを、滋がそつと手で拭いた。

「一也……」

「……滋」

一也は顔を上げると、三井を睨みつけた。

こいつだけは許せない。初めて怒りという感情が湧いた。

滋を守るために。

「お前、……なに睨んでいるんだよ」

三井はへらへらと笑っていた。そして、ナイフを一也に向ける。

一也はその場に立ち上がった。すると、滋は一也のズボンを引っ張った。

「だめ、一也……逃げて」

そのとき、一也はあのときのことを思い出した。

あのときの記憶が鮮明に甦る。いじめの始まり。あの体育祭。

あのときは怖くて逃げてしまった。自分のことだけを考えて、滋を助けず、逃げ出してしまった。けど、今回は逃げない。もう、逃げたりしない。

一也は鬼のような殺気めいた目を三井に向けた。今までのような、臆病な目でなく、本気で助けようという目をしていた。

三井はナイフをとっしんしながら突き出してきた。一也は足をすばやく上げ、ナイフを吹っ飛ばした。ナイフは中に浮かび、後ろに落ちた。上げた足をそのまま下げ、三井の頭に落とした。三井勢いよくその場に倒れた。

「ぐはっ！」

三井は鼻を強く打ち、鼻血を出していた。

その間に、一也は落ちているナイフを拾った。

「一也……」

滋が心配した表情で見る。一也は凍りついた目をしており、三井に近寄った。そして、戸惑うことなく三井の背中にナイフを突き刺した。

「うわああ！」

三井はナイフの痛さにもがいていた。

一也はまだナイフを握っており、抜いてもいなかった。

「滋の痛みがわかったか？ この痛みがお前にわかるか！」

そこで、一也はナイフを背中から抜いた。そのとき、返り血を浴び、一也の顔や服は血だらけだった。

三井はその場に倒れた。一也はじつと三井を見下していた。

「か、一也……」

一也はそつと滋に振り向いた。そこで、滋は初めて一也から恐怖を覚えた。

返り血を浴びた一也はにやつと笑っていた。そして、鬼神のごとく鋭い目。今までの一也ではなかった。

一也は握っていたナイフを掲げた。

「一也！……一也！」

滋は何度も一也を呼んだ。しかし、聞こえていないのか一也は反応しない。

そして、三井に振り落とした。滋は目を瞑った。

ナイフは三井の肩に刺さり、そのまま一也は手を離れた。

滋はそこでそつと目を開けた。そして、一也に抱きついた。

「お願い！ もう止めて、一也！ もういいの。終わったの。もう一也を傷つけるやつはいないの。だから、……もう止めて……」

そこで、一也ははっとして滋を見た。そして、今の状況、自分の姿を見て驚いてしまった。自分がしたことなのに。

「滋……、俺……、俺……」

「もうなにも言わなくていい。だから、……ずっと私のそばにいて……私が一也を守るから。私を、……頼りにして……」

「滋……」

一也は滋を離すとそつと口を開いた。

「俺は、……これから一人で生きていく。誰の力も借りず、自分の

力だけを信じる。もう舐められるのはいやだ。もうこんな苦しい目に合うのは嫌だ。全てのやつらに復讐して、伊集院の力を思い知らせてやる」

「そんなこととして、何の意味があるの？ もういいの。このことも、全てなかったことにしてあげる。私が一也を苦しい目に合わせないこれから、楽しくしてあげる。だから、……ずっと、私のそばにいて……」

「滋……、俺は変わる。昔の自分を打ち消すために。今わかった気がする。強いって、こういうことなんだって。全て倒して一番になる。そのとき、強いっていう意味がわかりそうなんだ」

「そんなことどうでもいいよ！ 一也は……、一也は……、私のこと好きじゃないの？ 嫌いななの？」

「……わからない。でも、嬉しいということはある」

「だったら……、だったら……、私の気持ちわかってよ。……私の愛情受け取ってよ！」

そのとき、滋は自分のお腹に強い力を感じた。少しずつ力が抜けてくる。視界がどんどん狭くなっていく。

そのとき、声が聞こえた。

「……ごめん、滋。そして、……ありがとう」

そのとき、滋の意識が断ち切られた。そして、一也は滋を抱きとめ、その場に寝かせると、その場から去り姿を消した。

滋はそつと呟いた。

「一也……」

「これが、一也の過去。事件は私のお父様の力で打ち消すことができたの。……一也は自分を変えるため、そして、強いとはなんなのかを見つけ出すために、あなたたちのいる青南学園に転校したの」

「そ、そうだったんですか……」

渚は全てを聞いてうつむいてしまった。

一也にそんなことがあったなんて知らなかった。軽はずみで助けたいなんていったが、自分が助けることができるのかわからなくなつた。

駿はごくつと唾を飲み込み驚いていた。

「あいつに、そんなこと一言も言っていなかったのに……。オレ、一也のこと全然わかっていなかったんだな」

気持ちが悪く落ち込んでいる二人を見て、小林は口を開いた。

「一也様は確かにやってはいけなかったことをしました。しかし、どれもこれも私の責任。今まで、本当に申し訳ありません」

「い、いえ。謝らないで下さい。別に気にしてませんから」

駿が手を振っているとき、いきおいよくドアが開かれた。そこに立っている人物を見た四人は息を呑んだ。

渚はついその場に立ち上がってしまった。

「一也さん……」

第九章：奥底からの解放

力強く開けられたドアの前には、今会ってはならない人物、一也が立っていた。

一也は息を切らしながら鋭い目つきで四人を睨みつけていた。

「一也……。ど、どうしたの？ そんなに息を切らして、……何かあった？」

滋はこの状況を誤魔化そうとしていた。

「ほら、あんたのことを心配して、二人が来てくれたのよ。一也がいない間、私が代わりに相手してたのよ。小林も一緒にね」

しかし、その誤魔化しも、一也にはきかなかった。

「……滋、……裏切ったのか……」

「え？ ……何のこと？ 私何も裏切ってないわよ」

「とぼけんな！」

突然一也が大声を上げ、そこにいた四人全員がビクついた。

そして、一也は一つの携帯式のスピーカーを取り出し、スイッチを押した。

『……それじゃあ、始めるわよ。一也の過去を。そして、あの強さ

の秘密と苦しさを……』

それは、まぎれもなく滋の声だった。

それを聞いた滋は、体がガクガクと震えていた。

「一也……、どうして……わかったの？」

すると、一也はそつと腕を上げ小林を指さした。

小林は服のいたるところを調べた。すると、肩に小さな盗聴器が取り付けられていることに気づいた。

「小林は気づいてなかったようだが、つねに着けておいたよ。こうなることを恐れて……」

一也は小林を睨みつけた。

その殺気めいた目を見た小林は、逃げる気もなくその場に固まっていた。

「待つて、……違うの！ 一也。小林は悪くないの！」

滋が一也に立ちはだかる。しかし、今の一也に何を言おうと無駄だった。

一也は滋を無視すると、小林に近づき胸倉を掴んで無理矢理立たせた。

「小林、……お前、いったい何様のつもりだ？ 俺の親でもないの

にべらべらしやべりやがって。有能な執事だったが、それも今日で終わりだな」

小林は何を言われても目を瞑り、じっと耐えていた。

それを見た一也は、小林をおもいきり殴り飛ばした。小林は壁に頭をぶつけ、その場に倒れてしまった。

「おい、一也！　いくらなんでもやりすぎだぞ！」

駿が一也に向かって言うと、一也は駿のほうを振り向きそつと睨みつけた。

「次はお前か、駿」

駿は身の危険を感じた。

怖い。以前の恐怖が甦った。逃げたい。しかし、体が動かない。ましてや、一也から逃げるなんてできるのだろうか。

一也はゆっくりと近づいてくる。そして、正面に立った。

「一也、ちょっと待ちなさい！」

滋が何を言っても、一也には聞こえなかった。

駿はぶるぶると震えていた。

「駿、お前は友達だと思っていたよ。でも、……あれを聞いたら、生かしてはおけないな」

一也は拳を振るい、駿の顔を殴った。

駿はその場に倒れると、口を切ってしまい、端から血が出ていた。

「駿さん！」

渚は駿のそばに寄り添った。一也はその二人を冷たい目で見下ろした。

「……聞いてどうだった？」

「え？」

渚はそつと顔を上げた。

「俺には親がないんだぜ。……おもしろいか？ おかしいか？ 親がないからなんだっていうんだ！ お前らにあのときの苦しみがわかるか。俺の味わった絶望がわかるのかよ！」

渚はうつむいた。駿の姿を見て、悔しくて力強く拳を握った。

どうすればいいのだろうか。どうすれば一也の気持ちを沈めることができるのだろうか。自分にその力があるのだろうか。

親のいない苦しみはわからない。でも、助けてやりたい。その絶望から救ってやりたい。人は変われる。人は強くなれる。それを教えてくれたのは、一也だから。

「か、一也……」

一也はそつと滋を見た。

「滋……、お前だけは俺の味方だと思っていたよ。でも、……やっぱり裏切るんだな」

一也は滋にゆっくりと近づいていく。

滋はその度の後ずさりする。しかし、後ろに壁があり、これ以上下がれなかった。

そして、目の前にはじっと見ている一也。

「さようなら、……滋」

それを聞いた滋は首を振る。

「い、いや、……一也。……お願い、何でもするから、何でも言うこと聞くから、……許して」

しかし、一也は聞く耳持たず、そつと拳を構える。そのとき、

「一也さん！」

後ろから渚が叫ぶ声が聞こえた。

一也はそつと後ろを振り返る。

そのとき、渚の顔が一也の目の前にあった。そして、渚は目を瞑り、一也に顔を近づける。

一也は驚いて目を見開いていた。時間が止まったかのようにゆっくりと流れる。

自分がどういふ状況におかれているのかわからなくなり、その場に立ちすくんだ。

今わかるのは、渚が自分の目の前にいること。そして、その渚にキスをされたこと。自分の唇が渚と重なり合っている。

渚はそつと唇を離すと、潤んだ瞳で一也を見た。

「一也さん……」

渚はそつと一也に抱きついた。一也の胸に顔をしずめる。

「お前……」

一也は果然と立ち尽くしたまま、そつと自分の唇に触れた。

今でも残っている渚の唇の感触。少しずつ自分の心臓が激しく脈打つのがわかった。

「一也さん、……もういいんですよ。もう逃げなくて、怖がらなくていいですよ。……いじめは怖いです。あの孤独、苦しみ、寂しさ、辛さ、全部わかります。もう二度と、あんな目に合いたくないという気持ちはわかります。……でも、だからといって、ケン力をして相手を傷つけていいというわけではありません。そういう心を持っていいのなら、……優しい心を持ってください」

「渚……」

滋がそつと呟く。その光景を、駿と小林も見ていた。

「渚ちゃん……」

すると、我に返った一也は渚を振り払った。

「ふざけんな！ 俺は間違っていない！ 俺は何も恐れていない！
俺は自分のためにやっているんだ！ 強さを見つけるために、父
さんが言った強い男になるために、俺は強くなるんだ！ 俺は……、
俺は……」

一也は拳を強く握った。そして、滋にむかって構える。

「一也！」

駿が止めに入ろうとする。しかし、体が動かない。

滋は目を固く瞑って体を硬直させた。

拳が襲い掛かる。しかし、一也の拳は滋に当たらず壁に激突した。

緊張が解けた滋はその場にぐったりと座り込んだ。

一也は強く噛み締めた。できなかった。殴れなかった。滋には助け
られた恩がある。そのせいだろうか。

「クソッ……」

一也はそつと渚のほうを振り向く。

渚はじつと一也を見ていた。逃げようともせず、恐れようともせず、じつと一也を見ていた。視線を外そうともせず。今にも拳が襲い掛かるうとしている。

一也は渚に近づくと、拳を握り構えた。勢いをつけて襲い掛かる。

そのとき、渚は目を瞑りそつと口を開いた。

「……幸せですか？」

「え？」

一也は拳の力を解いた。

自分の耳を疑った。今の言葉、あいつの言葉だった。夢にも出てきたあいつの言葉。

「一也さんは、……今の自分で幸せですか？　今のままで満足ですか？」

渚は目を開くとそつと一也に微笑んだ。

その温かい笑顔を見て、一也は自分の心が少しずつ治まるのがわかった。心が癒されている。その笑顔が滋のあのときの笑顔と重なる。

怒りが少しずつ落ち着いていくのがわかる。

「一也様……」

小林がよろよとした足取りで立ち上がった。

「一也様、一男様はいつもおっしゃっておりまして。一也様を強い男にしたいと。優しく強い心を持った男にしたいと。一也様は、強いというのは力と思ったのかもしれませんが。ですが、これからは優しい心と強い心を持ってください」

「小林……」

一也はその場に立ち尽くした。

俺は、……間違っていたのだろうか。力が全てじゃないのだろうか。俺は、ただ怖かっただけなのだろうか。あのときの恐怖から逃れようとして、強いとは力だと自分で勝手に決めつけていた。

今までの一也なら、プライドにかけてこの屈辱を振り払おうとするだろう。しかし、その気持ちは起きなかった。むしろ開放感があった。苦しい呪縛から解かれたように。

一也の体が震えていた。怖いから？ 違う。恐れているから？ 違う。では、なぜ震えているのだろうか？

すると、渚は再び一也に抱きついてきた。

一也は振り払おうとはしなかった。

渚にはわかっていた。一也が今どういう気持ちなのか。それを助けてあげたい。包んであげたい。それが、今自分にできることだから。

渚は一也に言った。

「いいですよ。我慢しなくて。男の子だって泣きたいときはあります。もう苦しまなくていいんですよ」

その言葉を聞いて、一也の目から大量の涙がこぼれた。

そして、その場に膝を着き、齒を食いしばって涙を流した。

渚の言葉が温かく、安心できて、心が包まれる。

あ那时的恐怖心が無くなった。

一也は目を閉じた。そして渚を抱きしめた。強く抱きしめた。今は一緒にいたい。

プライドを全て捨てて、自分の心を癒して欲しい。温もりを感じていたい。

一也はそっと呟いた。

「……おい」

「はい?」

「……ありがとう」

その言葉を聞いた渚は、満面の笑顔で返事をした。

「はい」

夜になるまで四人は一也の屋敷におり、解散したのは七時ごろだった。

「じゃ、私は帰るわね。じゃあね、みんな」

そう言つて滋は自分の車に乗り、屋敷に帰っていった。

「俺はこいつを家まで送つてあげるよ。一人じゃ危ないしな」

「ありがとうございます」

渚はにこつと笑つてお礼を言つた。

「じゃ、俺はここで。じゃあな」

駿は手を振りながら一人街中へ消えていった。

「さつ、乗れよ。家まで案内してくれ」

「はい、お願いしますね」

一也は渚をバイクの後ろに乗せ家を目指した。

渚の家は屋敷とそんなに遠くなくけっこう近い場所だった。ちよつとぼろぼろの一軒家で今にも崩れそうだった。

「ここがお前の家？」

「はい、そうです。どうぞ、上がってってください。お父さんとお母さんにも一也さんのこと紹介したいですし」

一也は今にも底が抜けそうなので恐る恐る中へ入っていった。

玄関で靴を脱ぎ、廊下を歩くとぎしぎしと音をたてた。本当に今にも底が抜けそうだった。

渚はにこにこ笑みを浮かべながら中を案内した。

居間には二人の姿があつた。

一人はたばこを吸いながら新聞を読んで、一人はお裁縫をしていた。

「ただいま。お父さん、お母さん」

「おう、おかえり」

「おかえりなさい、渚。その子は？」

「はじめまして。一也と言います。渚さんの……」

クラスメイトと言おうとしたとき、渚のお父さんがいきなり立ち上がり胸倉を掴んできた。

「渚の彼氏か？ 渚を泣かせる奴は許さねえ」

「は？」

一也はいきなり訳の分からないことを言われ戸惑ってしまった。

そこであるときのことを思い出した。渚のピアノの練習をしているときに、親に連絡をして失礼な態度をとっていたお父さんがいたことを。

一也はあのときの苛立ちをおぼえ、拳に力を入れたとき渚が割って入ってきた。

「お父さん、止めてください。一也さんは私の友達です」

すると渚のお父さんは手を離しにつこりと笑った。

「なんだよ、友達か。友達なら大歓迎だ。今日は泊まってけ」

「えっ？」

一也はさっきまでの怒りが消えてしまった。

いきなりケンカをふっかけてきたと思ったたらすぐに笑顔になった。よくわからない人だ。

「いえ、遠慮します」

「なんだよ、つまんねーな。一緒にバスケしたかったのに」

「進さん。夜にバスケをするのは近所迷惑ですよ」

それを聞いた渚のお父さんは本当にがっかりしていた。

「こちらでも自己紹介しますね。私は桜さくらといいます。こちらが進すすむです」
「おう、よろしくな」

「私たちのことは名前で呼んでもかまいませんので。いつまでも渚の友達でいてくださいね。よろしくお願いします」

「いえこちらこそ」

渚のお母さんである桜さんはすごく若かった。お母さんというよりお姉さんだ。この進という人もお父さんというよりお兄さんだ。それほど若く見えた。

「よろしければ、渚の恋人になってもいいですからね」

「えっ？」

「ちょっと、お母さん」

渚は顔を真っ赤にして桜さんを止めた。進はなぜかじつとこっちを睨にらんでいた。

「なに言ってるの渚。こんなにかっこいいお友達がいたなんてお母さん知らなかったわ。それに友達を連れてきたのも初めてですし」

「だからって、余計なことは言わなくていいの。そりゃ、……なったら嬉しいですけど……」

最後に消え入りそうな声でなにか言っていたが一也には聞こえな

かった。

「一也さんはどうですか？　うちの渚はどうでしょう？」

桜さんが一也に問い掛けてきた。進はさっきから野犬のように睨んでくる。

一也は、ため息を吐くとしぶしぶ言った。

「今はそういう気持ちはありません」

それを聞いた渚はちよつと残念そうな顔をしていた。

「大丈夫よ渚。今はということは、いつかは変わるかもしれません。頑張って」

「うん」

いつのまにか、渚は桜さんを止めようともしせず自分もつなずいていた。

そのあと、一也は渚の部屋に案内された。

渚の部屋はたくさんのぬいぐるみで埋めつくされていた。

「お前、ぬいぐるみが好きなのか？」

「はい。とつてもかわいいですよね」

そう言つて渚は一つのぬいぐるみを抱えていた。よくわからない

キャラクターのぬいぐるみだ。

そのとき、廊下から声が聞こえた。

「進さん、なにをしているのですか？ 渚の部屋に耳を押し付けて」

「え？ い、いや、ちょっと気になって……」

「やめてください。二人に迷惑です。プライバシーの侵害です。今は二人だけにしてあげてください。進さんに一週間の渚の部屋への入室を禁止します」

「え？ ちょっと待ってくれ。それだけは」

「いいえ、だめです。さあ、行きますよ」

「渚」

そのやりとりを、二人は黙って聞いていた。

「……おもしろい親だな」

「はい。自慢のお父さんとお母さんです」

本当にそう思っているようで、にこにこ笑っていた。

それよりも、一也はある疑問を抱いていた。あるとき、渚はたしかに言った。幸せですかと。

あの言葉をどうして渚が言ったのだろうか。問い掛けてもいいのだ

が、勇気が出せなかった。

もし、あの少女の正体が渚だったら……。たしかに、今思えばあの笑顔はそっくりだった。しかし……、

「あ、あの、一也さん。どうかしたんですか？」

「え？」

「考え込んでしまっているようですが……」

「え？ ああ、悪い」

やっぱりあのことは触れないようにしようと思った。まだ時間はある。心が落ち着いてから聞けばいい。

「あ、あの、一也さん。私、これから一也さんの役に立ちたいと思います」

「役に立ちたい？」

「はい、これから一也さんの心を少しずつ改善していこうと思います」

「はあ？」

一也は渚が何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「明日からどうしたら優しい心を持てるか一緒に考えましょう」

よく意味がわからないが、力になりたいという心遣いは伝わる。

「ああ、わかった。これから頑張ってみようか」

「はい、一緒に頑張しましょう」

そのあと、お互いの携帯番号を交換したり、渚の話を聴いて終わった。

「すみません。そろそろ失礼します。明日も学校ですし。夜分晩くすみません」

一也は居間に降りて、桜さんと進に声をかけた。

「あら、そう。いつでも遊びに来てくださいね」

「たっしやでな」

「また明日」

一ノ瀬家全員で見送ってくれた。

ここの家族は一也がもっていない家族の愛情があることを知りなんだか羨ましく思えた。

そつと一也は空を見上げた。滋と見たときと一緒くらいに、星が満面に輝いていた。

これから変わろう。あいつのようになるために。

そう一也は心から誓った。

第十章：夏休みの旅行

今日から一也は心を入れ替え、優しい人になるように努めた。

しかし、そう簡単には変わらない。ましてや、まず何をすればいいのか。どうしたら優しくなるのか。それがわからなかった。

「よし、第一回一也の心改善計画の会議を始めようす！」

駿の一言で意味のわからない会議が屋上で始まった。

メンバーは、一也、渚、駿、滋の四人。

いったい何を始めるのか皆目検討もつかない。

「まず、どうしたら優しい心を持つことができるか考えてみましょう」

滋が手を上げて答えた。

「やっぱり、まずは笑顔よね。その人が笑うと明るい印象が出て、優しくそうに見えるし」

滋の言葉に駿は何度もうなづく。

「なるほど。それでは一也さん。さっそく笑ってみましょう」

「いやだ」

一也は今までそうそう笑ったことはない。それに普通笑えと言われて笑えない。

「でも、優しくなりたいんだろ？　ちよっとやってみろよ」

そういうと、三人ともいつせいに一也の顔を覗いてくる。

一也はそれが嫌で笑うどころか睨み返した。

「ちよ、ちよっと一也、逆に怖いわよ。もっと爽やかに」

しかし、こればかりはどうしようもない。

すると、駿が一也の後ろにしゃがみ込み脇腹をくすぐってきた。

そのせいで、一也はつい笑ってしまった。

「あ、笑いましたよ。一也さん、笑いました」

渚と滋は拍手して喜んだ。

その間に、一也はさっきからくすぐってくる駿の頭を殴った。

「今度したらマジで殺すからな」

「……はい。すいませんでした」

「ま、これで一つはクリアね。あとは何かな？」

滋は腕を組んで真剣に考えた。

「そうだな。やっぱり暴力は止めよう。人を殴るのは禁止」

駿の意見に渚と滋は意気投合してうなずいた。

「チツ、わかったよ。もう暴力は振るわない」

「あとはすぐ怒らない。その短気の治さないとね」

滋の意見に渚と駿はうなずいた。

「でもどうするんだよ」

すると、駿はいきなり一也の頭を軽く叩いてきた。

「痛て！ この野郎、死にたいのか！」

「ちょっと待て！　そこで怒ったらダメだろう！　変わりたくないのか？」

「明日から変わる」

そう言って、一也は駿を痛めつけた。

「あゝあ。これじゃ、先が思いやられるわ」

渚と滋は深いため息を吐いた。こうして、一回目の会議は無駄に終わった。

教室の中では、もうすぐ始まる夏休み話題でいっぱいだった。この長期休業をどう有意義に過ごすか検討中だ。

駿たちもその一人だった。

「うん。来年受験だからな。最後の夏休みと言ってもいいだろう。ということで、夏休みの間一也の屋敷に泊まってもいいか？」

「無理」

一也は考えもせず即答だった。

「そこがダメなんだよ。優しくなりたいたいならいろんなことを承諾しない」と

「お前はただ泊まりたいだけだろ」

「いいじゃん。頼むよ」

駿が手を合わせて頭を下げているが一也は無視した。

そのとき、渚が口を開いた。

「もうすぐ夏休みということは、滋さんは元の聖宝学園に戻られるのですよね？」

「うん。だから、みんなと過ごすのもあと少しね」

「寂しくなりますね……」

渚は本当に寂しそうでそんな表情をしていた。

そこで、一也はあることを思いついた。

「だったら、滋の送別会でも開くか？」

「お、いいね。そうしようぜ！」

駿がいち早くのつてきたが、逆に滋は驚いていた。

「一也からそんなこと言われるとは思わなかった……。送別会のときは雨ね」

「お前は嬉しくないのか？」

一也は滋を睨みつけた。

「いえ、嬉しいわよ。ありがとう」

「一也さんも、優しくなりましたね」

「お前を見習ってな」

それを聞いた渚は頬を赤く染めて照れてしまった。

「でも何をするんだ？」

「決まっているだろ？ 俺を誰だと思ってる。どこか旅行でも行くか」

「いいね！どこに行くんだよ？」

「それは滋が決める」

滋は指をあごにやると考え始めた。

「うーん、そうね。ハワイはもう飽きたし、アメリカはいまいちだし……。せつかくだし、二人の意見を聞きたいな。最後の研究内容『一般市民の夏休みの過ごし方』ということで」

滋は駿と渚に聞いてきた。二人は真剣に悩んだ。

「うーん、オレはいつも家でごろごろするだけだし。渚ちゃんは？」

「私も同じような感じです。普通なら、温泉旅行や海に行ったりするのではないのでしょうか？」

「温泉旅行に海か。いいな」

「じゃあ、それにしましょう！」

「え？」

滋が笑顔で決定したが、二人は少し困っている様子だった。

「でも、……そんなにお金がありません」

「そうだぜ。オレもまったくない。それよりも旅行に行けるお金も……」

「それなら俺が出してやるよ。それならいいだろ？」

「え、いいのか一也？」

「いいんですか？」

渚と駿は驚いた顔で一也に寄り添った。

「ああ、迷惑かけたお詫びだ」

「やったぜ！」

「ありがとうございます、一也さん」

二人は楽しい旅行に夢を含まらせて浮かれていた。

こうして、楽しい夏休みが始まった。

夏休み初日。

まずはみんなで旅行の買出しに出かけた。

一也の屋敷に集合し、そのあと車に乗って商店街へ向かった。

「ふふん。楽しみだな」

駿は常になににこしていた。

渚も嬉しそうにしている。

「楽しみですね」

「うん、こんなこと今まで無かったからね」

滋も楽しそうに渚と話している。

商店街に着くと、旅行バッグや日用品、水着やその他必要な物を
買ったために歩き回った。

四人の後ろには二人の滋の執事が着いており、今回荷物持ちとして
来てもらった。

「さて、旅行バッグは私と一也は持っているから二人のを買いまし
ょうか」

滋は渚と駿にむかって言った。

「ありがとうございます」

「悪いね」

二人は気に入った旅行バッグを買い、お金は一也が払った。

そして、男子女子と二手に分かれてそれぞれ買い物を始めた。

一也と駿は日用品売り場に向かった。

「なあ、一也。旅行中はやっぱり四人ずっと一緒だよな？」

「当たり前だろ。一緒じゃ嫌なのか？」

「だってよ、考えてもみる。こんなチャンス滅多にないぜ。友達同士の旅行なんてゲームでしかありえない」

駿がすごい勢いで迫り寄ってくる。

「だったらなんだよ」

「このことをきっかけに、オレはどちらかと仲良くなって彼女を作りたい」

「勝手にしてる」

一也はいろんな商品の値段を見ていた。どれも安いものだ。買う気が失せる。

「そこで、お前はどっちを取るんだ？」

「お前は本当のバカだな。今回の旅行は滋の送別会を兼ねてだろ。楽しめばいいんだよ」

「つまりどっちでも選んでいいんだな？ ふふふ」

駿は気味の悪い笑みを浮かべると、必要な日用品をかこの中に入れている。入った。

一也はやれやれといった表情でため息を吐いた。

そのころ、渚と滋は海で着る水着を選んでいた。

「ねえねえ、渚。これ似合うと思わない？」

滋はさつきから気に入ったものを取っては渚に聞いていた。

「い、いいと思いますよ。でも、ちょっと刺激が強すぎませんか？」

「うんそうかな？ 別にいいと思うけど。それより、渚は選ばないの？」

「え？ わ、私は、その……、なんか恥ずかしくて……」

「だったら私が選んであげる。これなんてどう？」

滋が選んだものはさっきのよりも刺激が強すぎるものだった。

「そ、そんなの着れません！」

「そう。でも、渚水着持ってるの？」

「え、えと、学校で使う水着なら……」

渚は顔を真っ赤にして答えた。

「それじゃあだめでしょ！ もっとおしゃれなのを着なきゃ。一也だって喜ぶわよ。水着姿見せたらきつと見とれるわね」

「ほ、本当ですか？」

「うん。一也、水着姿が好きだからね」

「そうなんですか……」

それを聞くと渚は真剣に考えていた。

「せっかくなんだから楽しみましょう」

「そうですね……」

しかし、渚は気にいった水着を購入しても、しばしば浮かない顔をしていた。

二時間くらいして、四人は待ち合わせ場所に合流した。

「必要なものは全部買った？」

「買った買った。大量だぜ」

駿はにやにやしながら喜んだ。それもそのはず、全部一也が負担したのだから。

「それじゃあ、出発は明日ね。一也の屋敷の前に朝の9時集合。遅刻はだめよ」

「はい」

「じゃあ、帰りましょう」

四人は車に乗り込むと、一也の屋敷に向かって走り出した。

9時5分前。

屋敷の前では一也が立っていた。すでに準備を終え、みんなが来るのを待っていた。

そのとき、渚の姿が見えた。

「おはようございます、一也さん」

「ああ、おはよう」

「今日は楽しみです」

「そうだな」

「滋さんと駿さんはまだですか？」

「駿なら屋敷の中だ」

「え？」

「昨日の夜泊まったんだよ。遅刻しないように。でも、おそろくまだ寝てるだろうな。一度起こしたんだが、着替えてから時間があるからってまた寝た」

「大丈夫なんですか？」

「自業自得だ。自己管理もできないやつは来る必要ない」

「そ、そうですか」

渚は若干笑みを浮かべながらも心配はしていた。

それから沈黙が続いた。

渚はさつきから落ち着きがない。ところどころきよろきよろしていた。

一也は考えごとをしていた。渚を見るたびに考え込んでしまう。

あの言葉。あの夢。そして、昔の出会い。依然に渚とは会ったことがある。渚もそう言っていた。しかし覚えていない。忘れてしまったようだ。

それとは別に、あの言葉は鮮明に覚えていた。

幸せ。

この言葉は忘れてくても忘れることができない。

今望んでいるのは、いつどこで渚と会ったのか。まずはこれを知りたかった。

そのとき、滋が時間ぴったりで到着した。

「おはよう。あれ、茨木くんは？」

そのとき、屋敷から大きな声が響いた。

「うわ！　しまった！　寝過ごした！」

「どうしました？」

「ああ、メイドさん。あれ？　一也は？」

「ご主人様はもう出られましたが……」

「なにー！？　あいつオレを置いていったのか？　急がなくちゃ！
取り残される！」

一也は屋敷を見上げながら呟いた。

「……いそがしい奴だな」

「一也……、あんた絶対おもしろがっているでしょ……」

十分くらいして、ようやく駿が到着した。

「一也の裏切り者！」

「それじゃあ、行くわよ！」

駿を無視して一同はまず駅に向かった。

二時間くらい乗り、波風駅なみかぜで降りると旅館を目指して歩くのだ。

駅は大勢の人たちで混んでいた。

「俺、電車に乗るの初めてだな」

「私も初めてかも」

一也と滋は電車を珍しそうに見ていた。

「お金持ちは公共の乗り物は乗らないんだな。少しは凡人の暮らしもわかりたまえ」

駿が偉そうににやにやしなから二人に言った。

「むかつく顔しやがって。それより早く乗ろうぜ」

一也はずかずかと電車に乗り込もうとした。

「ちょっと待て、一也。まだ切符買ってないぞ」

駿は一也の腕を掴んで止めた。

「切符？　なんだよそれ」

「電車に乗るには切符がなければダメなんだ。あそこの切符売り場で買っただよ」

駿は切符売り場を指した。

「なるほど。じゃあ、私が買ってくるわ」

「あ、滋さん。私も行きます」

滋は切符売り場に足を進めると、その後ろを渚が追いかけた。

滋は珍しそうに切符売り場の機械を見た。

「へえ、便利なものね。これにお金を払えば切符が出てくるのね」

「はい」

滋は財布からカードを出すと、お札入れに押し込もうとした。

「ちょ、ちょっと滋さん。何してるんですか」

「何ってお金を払ってるんじゃない」

「そこはお札を入れるところです。カードは使えません」

「なにそれ。私カードしか持ってないわよ。使えない機械ね」

その様子を見て回りはクスクスと笑っていた。滋は赤面すると渚に変わってもらった。

「チツ。なんかこんなやつらに笑われると腹立つな。ちょっと殴って黙らしてくるか」

一也は未だにクスクス笑っているやつらにむかって歩み出した。

「バ、バカかお前は！ そんなことしたら駅員に迷惑だろ！ 心を改善するんじゃないかったのか？」

駿は一也の服を掴んで引っ張った。

「これは正当防衛だ。あいつらが悪い」

「どう見てもお前が悪いだろ！ 頼むからおとなしくしてくれ！」

駿のおかげで騒動は起こらず、渚のおかげで切符を買って、四人は無事何事もなく電車に乗り込んだ。

「電車っていったらやっぱり駅弁だな。ということで一也、お金貸してくれ」

「お前が食いたいただけだろ。でも、俺も食ってみたいな」

「私も食べてみたいな」

「私もです」

駿は一也にお金を貰うと駅弁を買ってきた。

「お、けっこうおいしいな」

駿はすごいいきおいで消費するほど大絶賛だった。

「おいしいですね」

渚も喜んでいた。

しかし、一也と滋は違った。

「うーん、これのどこがおいしいのかな？　ウチのシェフの料理のほうがいちいと思っ」

滋はそんなに気に入らなかった。

「はっきりに言ってまじいな。こんなものをお前らはおいしいって言うて食べてんのか」

一也は一口で箸を置いた。

「お前らはうまいものを食いすぎなんだ。食べないなら俺にくれ」

駿は一也の分の弁当を食べた。滋はこれも研究だと言い最後まで食べた。

電車に乗っている間は、話しはもちろん、トランプやゲーム、駿が考えた遊びなどをして退屈せずに楽しむことができた。

そして、電車に揺られること二時間で、目的の波風駅に到着した。

第十一章：海と勝負

電車で揺られること二時間。

ようやく目的の駅である波風駅に辿り付き、ここから旅館まで歩いて行く。

「一般人って大変なのね。車で行けばいいのに」

「こういう旅もいいものですよ。頑張りましょう」

そして、歩くこと十五分で旅館に着いた。

木造のこの旅館は岩山^{いわやま}旅館というらしく、温泉旅館という雰囲気^{いふき}が漂っていた。

「一也たちは中に入ると、手続きを済ませ、それぞれの部屋へと別れた。」

「あゝ、疲れた。もう動きたくね」

駿は荷物を置くとすぐに倒れた。

中は和式になっており、畳にテーブルが一つ。縁側がついており、外を眺めると青く綺麗な海が広がっていた。

「へー、けっこういう眺めだな。お前も見ろよ」

駿はすでに布団を敷いて、その上に眠っていた。

「何しにきたんだ、こいつ」

そのころ、渚と滋も外を見ていた。

「わあ、綺麗ですね」

「うん。来てよかったわ。苦労して到着すると、いつそう嬉しく思えるわね」

「そうですね」

滋は腕時計を確認すると、もうすぐ12時を回ろうとしていた。

「そろそろお昼ね。せっかくだし、一也たちの部屋で食べましょうか」

「いいですね。いきましよう」

渚と滋は荷物を置いて一也たちの部屋に向かった。

「お邪魔します。あれ？ 駿さんどうかしたんですか？」

渚たちは一也たちの部屋にきた。

「疲れて寝たんだよ」

「せっかくきたのに何がしたいの？ こいつ」

駿が寝ている間に、旅館の人に昼食をお願いして、一也たちの部

屋で待った。

少しして料理が運び込まれた。

「わあ、おいしそうですね」

昼食は和食で、湯豆腐をメインにしたものだった。

一人一人小さな鍋が着いており、自分で豆腐を入れるのだ。他にも、茶碗蒸やお吸い物などもあった。

その匂いにつられてようやく駿が起きた。

「うーん、なんかいい匂いがする。……おつ、うまそうだな！」

「あ、やっと起きた。それじゃあ、さっそく食べましょう」

4人は会話をはずませながら昼食を進めた。

「これ、本当においしいわね。うちのシェフに作らせてみよう」

滋は料理をメモしていった。

「豆腐なんて初めて食ったな」

一也は不思議そうに豆腐を見ていた。

「庶民の食べ物もいいだろ。この茶碗蒸おいしいな」

駿はさつき駅弁を二つ食べたのにすごい食欲である。

「あ、熱い！ 火傷しそうです」

渚はお吸い物を啜って舌を火傷したようだ。痛そうに舌を出している。

「ねえ、これからどうするの？」

滋がみんなに聞いた。

「海があるし、午後は泳がないか？」

駿が提案した。

「俺は何でもいいよ。滋が決めるよ」

「じゃあ、泳ぎましょうか。渚はどう？」

「えっ？ ……は、はい。いいと思いますよ……」

渚はなぜか浮かない顔をしているが、午後は海に行くことに決定了。

「綺麗な海ね」

昼食を終え、四人は旅館から歩いて海に来た。

けっこう人もいて賑わっていた。

陽射しが強く、浜辺は裸足では熱かった。

「それじゃあ、さっそく泳ごうか」

そういつと、滋はすぐさま上着を脱いだ。

「ちょ、ちょっと待て！　滋ちゃん、ここで着替えるの？」

「なに焦ってんのよ、茨木くん。ちゃんと旅館で着替えてきたわよ」

「なんだ」

駿は若干残念そうな顔をしていた。

「一也も旅館で着替えてきたので、その場で脱いだ。」

「すごい筋肉だな、一也。やっぱり鍛えてあるな」

「お前の体はまったく引き締まっていけないな。少しは鍛えろ」

駿も服を脱いだ。

しかし、渚だけはまだ脱いでいなかった。

「渚、どうしたの？　早く脱ぎなよ。着替えてきたでしょ？」

「は、はい。でも……なんか恥ずかしいです……」

「大丈夫だよ、渚ちゃん。オレ意外誰も見てないよ」

「だから心配なんだよ。お前が一番危険だ。変態野郎は人を見ず、ごみでも見てろ」

「お前は本当に失礼なやつだな！」

一也が駿をバカにしている間に、滋は渚の耳元に近づきささやいた。

「大丈夫だって、一也もきつと似合うつて言ってくれるよ。それに、見れないほうが残念がると思うよ」

「そ、そうでしょうか……」

「うん。だから、ほら！」

滋は無理矢理渚の上着を脱がした。

一也と駿は渚の姿を見て、見とれてしまった。

「やっぱり恥ずかしいです」

そういうと、渚は滋の後ろに隠れた。

「大丈夫だって。ほら、一也。どう？ 渚の水着姿」

そういつて、滋は渚を一也の前に出した。

「かわいいよ！ めっちゃかわいい！」

「あんたは黙ってなさい」

滋は駿を引っ張ってどかした。

「……ど、どうですか？　一也さん。……に、似合ってますか？」

渚は恥ずかしそうに顔を赤らめ、もじもじとしていた。

「似合っていると思う」

一也は何も思っていないかのようにぶっきらぼうに言った。

それでも、それを聞いた渚は安心して笑顔になった。

「あ、ありがとうございます」

「さて、さっそく泳ぎましょうか！」

滋は海に向かって走っていった。

「ひゃほーい！」

その後ろを駿が追いかけた。

「あいつら……」

一也も二人を追いかけようとした。

しかし、渚がその場から動こうとしなかった。

「おい、どうしたんだ？」

「え、いえ、……ちょっと、先に行ってください」

そういうと、渚は一人どこかに行ってしまった。

「どうしたんだ、あいつ」

仕方なく、一也は渚を追いかけた。

渚は近くの木下で座っていた。

「おい」

声をかけると、渚は驚いた表情になって一也を見た。

「か、一也さん、どうして……」

「どうしてって、お前が泳がないからだろ。お前こそどうしたんだ」

すると、渚はうつむきながらしぶしぶ答えた。

「……泳げないんです……」

「は？」

「私、泳げないんです。水に入るだけで怖くて……。だから、三人だけで楽しんでください。私、ここで見てますから」

それを聞くと、一也はため息を吐いてその場に座った。

「一也さん？」

「俺もここにいる」

「え？」

それから、二人はじっと座っているだけを過ごした。

何一つ会話もせず、駿と滋を見ていた。

「あ、あの、一也さん。私のことは気にせず、泳いできてください。せつかくですし……」

「だったら、お前もこい」

「でも、私は……」

すると、一也はその場に立ち上がり渚に手を差し伸べた。

「せつかく来たんだ。もっと楽しもうぜ。俺が泳ぎ方教えてやるよ」

「一也さん、……はい！」

渚は笑顔で返事をする、一也の手を握り海にむかって走った。

「よし、まず、海の中に入ってみろ」

「は、はい」

渚は恐る恐るゆっくりと海の中に入っていった。そして、腰まで浸かると立ち止まった。

「こ、ここまでしか行けません……」

「じゃあ、顔を海につけてみる」

「は、はい……」

渚は大きく息を吸うと海に顔をつけた。そして、一秒とかわからずすぐに顔を上げた。

「よし、顔をつけられるのなんとなかなる。次は、実際に泳いでみる」

「え？ 無理です。できません！」

渚は手を振って否定した。

「いいから、やってみろ」

渚はしぶしぶ了解した。

「もし、溺れたら助けてくださいね」

「ああ」

渚は地面を蹴ると、体を伸ばし泳ごうとした。しかし、すぐに体が沈んでしまった。

「わ、わわ、……一也さん！」

一也はすぐに渚の体を掴むと浅瀬に運んで立たせた。

「大丈夫か？」

「はい、なんとか水を飲まずに済みました」

「お前は力が入りすぎだ。それじゃあ、体がうまく動かない。次はバタ足の練習だ。握っているから足を動かしてみろ。膝は曲げずに、太ももを動かす感じにするんだ」

「はい」

一也はゆつくりと後ろに下がりがりながら渚を泳がせた。渚はうまくバタ足をした。

「いいぞ。その調子だ」

三十分くらいして、とうとう渚は数メートルまで泳げるようになった。

「やりましたよ、一也さん！ 泳げました！」

「ああ、よくやった」

その二人の様子を滋と駿は見ていた。

「あいつら楽しそうだな」

駿は滋に話しかけた。滋は駿の言葉に反応せず、じつと二人を見ていた。

「滋ちゃん？　どうかしたの？」

「え？　ああ、なんでもない。ほら、泳ぐわよ」

滋はそう言うと、一也たちの反対方向へ泳いでいった。

全員は一度休憩を取ることにし、近くにあったベンチに座った。

「ああ、やっぱり海はいいな。最高におもしろい」

駿はかき氷を食べながら言った。

「うっ、頭が痛いです」

渚はかき氷のせいで頭が痛くなり、手で抑えていた。

「ねえ、次はみんなで遊びましょうよ。何かおもしろい遊びある？」

滋が全員に提案した。

「遊び道具があればな。駿、お前の出番だ」

「まかせろ！」

駿は真剣に悩みだした。

「よし！ 海と言ったらボートだ。ボートで遊ぼうぜ」

「ボートか。いいわね。さっそく遊びましょう」

四人はボートを借りに行った。

すると、後ろから声をかけられた。

「おい、そのかわいい子ちゃん。俺らと遊ばない？」

四人は後ろを振り返った。

目の前には四人の男が立っていた。みんな日焼けしていて肌が黒い。スポーツをしているのか体はがっしりしている。

見た感じ大学生だった。

「ねえ、その二人」

一人の男が渚と滋に声をかけた。

「わ、私たちですか？」

渚が恐る恐る聞き返した。

「そつだよ。俺らと一緒に遊ぼうぜ。こんなやつらよりか楽しいからよ」

その言葉に一也と駿は怒りを覚えた。

「おい、誰がこんなやつらだって？ オレ様を舐めんなよ」

駿がいかにも怖そうな目つきで睨みつけた。

「ああ？」

男たちは一斉に駿を睨みかえした。

「ひいゝ！」

駿は威圧感に負け、一也の後ろに隠れた。

「この弱虫」

「駿さ〜ん」

「ほら、行こうぜ」

そう言つて、一人の男が渚の肩を掴んだ。

その手を一也が掴み強く握った。

つかまれた男は、あまりの痛さにもがいていた。

「いててて！ な、何すんだよ！」

「勝手に手出すな。お前らが誰か知らねーが、容赦しないぞ」

一也は男たち全員を睨みつけた。

男たちは一瞬ひるんだが、すぐに文句を言ってきた。

「は？ ふざけんなよ！ この野郎！ なめんじゃねーぞ！」

一也は拳を突き上げた。一人の男に向かって拳が軌道を描く。

「一也さん！」

渚の声が聞こえた。

そこで一也は拳を止めた。

そうだった。もう殴らないと誓った。もうケンカはしないと。

一也は歯を食いしばりながら拳を降ろし我慢した。

「あれ？ 殴らないの？」

「……ケンカをしても、簡単に勝ってしまうからな。それじゃあおもしろくない」

「ほう。じゃあ、これで勝負するか？」

そう言って一人の男が見せてきたのはフラッグだった。

「ビーチフラッグで勝負だ。勝ったほうが、この女の子たちと一日遊べる。俺らは四人だから、お前らは二回やれ。これでどうだ？」

「ああ、いいだろう」

「一也はすぐに了承した。」

「一也……」

「一也さん……」

渚と滋は心配そうな表情で一也を見ていた。

「一也はそつと鼻で笑った。」

「なんだよ。俺が負けると思ってたのか？ 心配すんなよ。まったく負ける気しねーな」

「だ、大丈夫だって。お、オレが絶対に勝ってやる」

駿は胸をはって自信满满そうに言った。

「足震えているぞ」

「こ、これは……、武者ぶるいだ」

その様子を見て、渚と滋は安心したかのようにクスクスと笑った。

「それじゃあ、始めるぞ」

「一番手は駿だ。」

二人は寝そべってフラッグに背を向けた。

周りはいつのまにかギャラリーでいっぱいになっていた。

「行くぞ。よい、スタート！」

二人は一斉に走り出した。しかし、若干駿は負けている。

大学生の男は飛びつくと楽にフラッグを奪った。

「よっしゃー！ 一勝目！」

男は力強くフラッグを掲げた。

「もう、何してんのよ！」

「駿さん……」

二回戦。次は一也だ。

「よい、スタート！」

二人は一斉にスタートした。しかし、少しだけ一也が速い。

スピードに乗り、一也は大学生の男と離れていく。

最後は飛び込まずに楽にフラッグを奪った。

「楽勝」

一也はフラッグを放り投げると、男の頭に当たった。

「さっすが一也！」

「一也さ〜ん！」

三回戦目。再び駿。

スタートと同時に走り出した。駿が少し勝っている。いける。

そう思ったそのときだった。

「うわっ！」

駿は足を滑らせ、顔からすべっていった。最後には転がり、ギャラリイの中に突っ込んだ。

その間に、大学生の男は楽々フラッグを手にした。

「あいつは期待を裏切らないわね」

「はい……」

四回戦目。一也は位置に着いた。

そしてスタートと同時に走り出した。次も一也は楽に勝った。

「これで勝敗は同じ。代表戦だな」

そう言って最後の試合が行われた。

もちろん走るのは一也。相

手は中でも一番足が速いやつだった。

二人はスタートが聞こえると走り出した。スタートダッシュはほぼ同じだった。

すると、男は一也の腹めがけ拳を突きつけた。

一也は一瞬スピードが緩み、差がひらいてしまった。

「あ！ 卑怯よ！」

「一也さん！」

一也はとうとうキレた。やってきたのはあっちからだ。

一也は男の首を掴むと砂浜におもいつきり沈めた。

その間に一也はフラッグを奪い、一也たちが勝利した。

「やった〜！」

「やりました！」

一也は渚と滋とハイタッチをした。

男たちはいつのまにか姿が見えなくなっていた。

周りにいるギャラリイは大きな拍手を贈ってきた。

「いや、ありがとう。ありがとう」

駿が両手を大きく広げてお礼を言った。

すると、ギャラリーは次々に帰っていった。

「おいおい！ 何で帰るんだよ！」

その様子を見て、一也たちは笑っていた。

「でも、けっこうおもしろかったわね」

「はい。そろそろ帰りましょうか。なんだか疲れました」

「そうだな。まだ何日があるんだ。今日は帰ろう」

そう言って、一也たちは旅館に引き返した。

第十二章：幼なじみの想い

旅館に引き返した一也たちは、夕食を済ませ、一也たちの部屋で一段落着いた。

「ふう。お腹も膨れたし、そろそろお風呂に入りに行こうか？」

縁側で外を眺めていた滋が背伸びをしながら言った。

「そうですね。そろそろ入りに行きましょうか」

そう言っで、渚は腰を上げた。

「二人はどうするの？」

滋は一也と駿に問い掛けた。

「俺も入りに行くかな。温泉なんてあまり行ったことないからな」

「い、いや、ちょっと待て、一也。俺らはやることがある」

駿が慌てたようにして一也を止めた。

「なんだよ。用事ってなにも……」

「俺たちはいから、二人は温泉に入りに行けよ」

駿は一也の口を抑えると、二人を促した。

「そう。じゃあ、先に入ってくるね」

「お先に失礼します」

渚と滋は部屋から出て行くと、一也は駿の手をどけた。

「何すんだよ」

「いいか。今から俺たちにはやるべきことがある」

「はあ？ 何もねーよ。それより温泉入ろうぜ」

すると、駿はあきれたようなため息を吐いた。

「まったく。一也はわかっていないな。いいか？ 今の状況を考えて。今俺たちのしなければならぬことは何だ？」

一也は素直に考えてみた。しかし、思い浮かぶことは一つ。

「温泉に入ることしかないだろ」

その答えを聞いた駿は、頭を抱えてがっかりした。

「まったく、一也はバカだな」

すると、駿は勢いよく迫ってきた。

「今あの美少女二人組みは温泉に行っている。つまりだ。あの作戦の絶好の機会なんだ」

そこで、一也は駿の考えていることがわかった。

「駿、お前まさか……」

「わかったか、一也……」

「あいつらの部屋に行くのか？」

「なんでそつちなんだ。そのほうがおかしいだろ。じゃなくて！
今から覗きに行くんだよ！」

それを聞いた一也はあきれてため息を吐いた。

「駿。お前が日本一のド変態でスケベなことは知っている」

「……それ知っていいことなのか？」

「でもな、駿。よく考えてみる。滋の親父さんは何者だ？」

「え？ ……い、いや、知らない」

「だったら教えてやる。滋の親父さんは警察庁長官。つまり、警察
の中でトップの存在だ。その娘が覗きされたなんて知ってみる。確
実に死刑だ」

それを聞いた駿はごくつと固唾を飲み込んだ。

「マ、マジかよ……」

「ああ、おおマジだ。だから止めとけ。無謀なことはするな」

一也は立ち上がると温泉に行く準備を始めた。

「……いや。オレはやるぞ！」

「はあ？ 俺の話し聞いていなかったのか？」

「それでも行くしかないんだ！ それが男ってもんだ！」

駿は胸を張ってどつどつと言った。

「お前の男の考えはどうなっているんだよ」

「だから頼む一也。一緒に来てくれ！」

駿は一也になすりつくようにお願いしてきた。

「俺は行かない。まだ死にたくないんだよ」

「頼むよ。今度お前の言うことなんでも聞いてあげるから」

そこで一也は少し迷いがしようじた。

駿を思い通りにできる？ では、おもしろいこともできるかもしれない。

「まあ、いいだろう。そのかわり、俺は着いていくだけだからな」

「ありがとう。神様、仏様、一也様」

ということで、二人はさっそく温泉に向かった。

二人はロビーを出て外に出た。

「おい、温泉はあっちだぞ。外に行くのか？」

「バカだな、一也は。覗きと言ったら外に決まっているだろ」

何が決まっているのかわからないが、一也は言われるままに駿に着いて行った。

駿はどんどん奥のほうへ進み、温泉があることを示す湯気の間所まで来た。

そして、ちょうど隠れそうな茂みがあり、二人はそこに隠れた。

「へへへ、いい場所が見つかったぜ。中は一人もいないようだな」

「おい、絶対にばれないようにしろよ。命が欲しかったらな」

「わかってるよ。そんなヘマ誰がするか。おつ、誰か入ってきたぞ」

駿は温泉に目を凝らしながら注目した。

一也はため息を吐くと、温泉側に背を向けて夜空を眺めた。

今日の海は楽しかった。たしかに、渚と一緒にいるのは楽しく感じられる。だが、あいつとは違う存在かもしれない。

一也は少しずつ渚のほうに心が傾いていることに気がつかなかった。

そして、一也は目を閉じると耳を澄ませた。

温泉では、渚と滋の二人だけが入っていた。

「ねえ、渚。もしあの二人が今私たちを覗いてたらどうする？」

「の、覗きですか？ い、いやです、見られたくありません」

渚は顔を真っ赤にしながら強く否定した。

「ふふふ。大丈夫よ。あいつらにそんな根性ないわよ」

「けけけ。その根性は持ち合わせていました」

駿は小さな声で呟いた。

「それにしても、湯気がすごくて良く見えないな」

すると、後ろから突然ライトが照らされた。

駿は驚きながら後ろを振り向くと、そこにはお巡りさんがいた。

「君たち、ここで何してるんだい？」

「や、やばい！ か、一也……」

駿は一也に頼ってどうにかしてもらおうとしている。

そこで、一也はいいことを思いついた。

「まさか、覗きじゃないだろうね？」

「い、いや、違いますよ！」

「……僕は止めたんです」

「え？」

「僕は止めるように必死になって止めたんです。でも、どうしても
って言って聞かなかったんです」

「か、一也。この裏切り者」

「君、ちよつと一緒に来たまえ」

「え？　なんで俺だけ？　ちくしょー！」

そう言つて駿は全力疾走で走つていった。

「あつ、ちよつと待ちなさい！」

お巡りさんは駿のあとを急いで追つた。

残された一也は、二人の行方を見届けると、何もなかったかのような顔をしてすたすたと旅館の中に戻つていった。

「ひっ！　い、今の叫び声なんですか？」

渚は湯船に浸かりながら怖がっていた。

「なんか覗きとか聞こえたんだけど……」

「の、覗き？　本当にいたんですか？」

「でも、どうもさっきの叫び声、茨木くんに似てた気がしたんだよね」

「あつ、私もそう思いました」

「あとで徹底的に問い詰めないとね」

一也は部屋で駿が帰ってくるのを待っていると、駿は汗だくになりながら戻ってきた。

「一也の裏切り者！」

どうやら駿は、あのお巡りさんから逃げるために街中を走り回ったようだ。

なんとか撒くことができ、少ししてここに戻ってきたようだ。

それと同時に渚と滋も部屋に来た。

滋から覗きの話を聞くと、一也は素直に二人に話した。

それを聞いた滋は、裁判をかけることもなく駿をいたみつけた。

それを見て、一也は腹をかかえて笑った。

一段落して、それぞれ自分のしたいことをしているときだった。

縁側で外を眺めていた滋がそつと口を開いた。

「ねえ、一也。ちょっといい？」

「ん？ なんだよ」

一也は駿をいじめながら顔を上げた。

「ちょっと」

そう言って滋はドアから出て行った。

一也は首をかしげると、一緒に外に出た。

残された渚と駿も首をかしげていた。

二人はロビーに出た。夜遅いからか、人一人いない。

「それで、ここまで来てなんだよ」

「うん。……ちょっと歩かない？」

そう言って滋は外へ足を進めた。

滋の口調はいつものような元気な声ではなかった。

一也は言われるままについて行つた。

外は海が近いからなのか、夏でも十分に涼しかった。

虫の声も聞こえる。空も綺麗に星できらめき、月が明るかった。

二人はしばらく無言のまま歩いた。

そして、滋は海まで歩いて立ち止まった。

「夜の海っていうのも、なかなか乙なものね」

「何も見えないけどな」

「月の光が反射して綺麗じゃない」

それから二人とも黙った。

聞こえるのは海の満ち干の音だけだ。

滋は疲れたのかその場にしゃがみ込んだ。

「ねえ、一也。あんたと一緒にいるのも、この旅行で最後なんだよね」

「ああ。お前は二学期からあっちに戻るんだろ」

「うん。仕方ないよね。けっこう無理したんだよ。私が青南に行きたいって言ったときは、お父様は大激怒したんだから。でも、なんとか押し切ったけど」

「……なんでそこまでして来たんだよ。そんなに一般人のこと知りたいのか？」

「まあ、それもあるかな。一応人の上に立つ者だから、知っておかないといけないし。でもね、本当の理由はそこじゃないの」

滋は立ち上がると、後ろにいる一也に向き直った。

滋の表情は真剣に、瞳は一也からそらさずとらえていた。

「本当の理由は、一也に会いに行くため」

一也は黙って聞いていた。何も反応せず滋を見ていた。

「一也が消えたときはびっくりしたもん。高等部の一年間は……つまらなかった。だから、決心して青南に行った。一也に会える。一也とまた一緒に学校に行ける。一也とまた一緒に勉強できる。そう思うだけで、他のことなんてどうでもよくなった」

滋は一也に背を向けると、再び海の方を眺めた。

「ねえ、一也の好きな人は……渚？」

「は？」

一也は本当にびっくりして聞き返した。

滋の言っていることがよくわからなかった。

滋はそつと一也に振り向くと小さく笑った。

「その様子だと。好きではないみたいね」

「当たり前だろ。だれがあんなやつ」

「っていうことは、私にもまだチャンスはあるんだ」

「え？」

滋はゆっくりと一也に近づくと、間近で一也を見つめた。

「言っただでしょ？ 私は一也のことが好きだって。今でも、この気持ちは変わらないよ」

滋は満面の笑みを浮かべた。

「滋……」

「一也と過ごせる時間もあとわずか。私……一也の心絶対奪うからね」

そう言っで、滋が来た道を引き返した。

一也は少し滋の後ろ姿を見送ると、一人旅館に戻っていった。

時刻は十一時を回り、四人は寝ることにした。

「じゃあね。一也、茨木くん」

「おやすみなさい」

「おやすみ。渚ちゃん、滋ちゃん」

「おやすみ」

そう言つて、渚と滋は部屋から出て行つた。

一也は部屋の電気を消して、布団の中に入った。

「おい、一也。まだ起きてるか？」

「なんだよ。早く寝ろよ」

「お前、海で渚ちゃんと楽しそうにしてたろ？ いい感じだったぞ」

「はあ？ ただ泳ぎを教えていただけだろ」

「でも、渚ちゃんは楽しそうだったぞ。お前、渚ちゃんを狙っているのか？」

一也は考えてみた。

自分は渚をどう思っているのか。もし、自分の記憶にあるあの少女が渚なら、渚のことが好きだということになる。

しかし、渚のことを考えれば、そうでもない。

いったいどつちなのだろうか。

今いえることは、自分が好きな人の正体が本当に渚なのか知りたい。それだけだった。

すると、駿はいきなり布団を剥いで起き上がった。

「おい、どこに行くんだ？」

「ちょっと、トイレ」

そう言って、駿は部屋から出て行った。

「さうて、今から滋ちゃんのもとに行つて、二人だけで夜のお散歩でもするか」

駿はにやにやとしながら隣の部屋へむかった。

ドアに近づくと声が聞こえた。

「ん？ なんの話をしているんだ？」

駿はばれないようにそつと聞き耳をたてた。

「ねえ、渚。今日一也と一緒にいてどうだった？」

滋は布団の中に入りながら渚に問い掛けた。

「え？ どうしたんですか？ 急に」

渚は布団を敷きながら驚いた。

「海るとき、一也に泳ぎ方教わって楽しそうにしてたわよね」

「え、えと、……はい。楽しかったです」

「ふふん」

滋はいきなりやつくと、渚の顔を見た。

「な、なんですか？ 電気消しますよ」

渚は部屋の電気を消すと、自分の布団の中に入った。

「いや、渚もなんだな〜って思ってた」

「な、なにがですか？」

「渚も好きなんですよ？ 一也が」

それを聞いた渚は心がドキッとした。今電気をつければ自分の顔真っ赤なのだろうと思う。

「い、いきなり何言ってるんですか！」

「あれ？ 違うの？ じゃあ、一也のことはどうも思っていないのね」

「え？ いや、えと、その、……滋さんいじわるです……」

「ふふふ、やっぱりね。まあ、あんな大胆なキスしたんだし当然よね」

「そ、その話は止めてください」

「だって、一也のファーストキス奪われたんだもん。ちょっと悔しい」

「で、でも、あれは……」

「ねえ」

「はい？」

「私も一也が好きなの。子供もころからずっと。だから……負けないからね」

すると、滋は渚の布団の中に忍び込んで、渚の体をくすぐり始めた。

「ちょ、ちょっと、滋さん！ 止めてくださいー！」

部屋からは二人の笑い合う声が聞こえていた。

それを、駿は静かに聞いていた。

「はあ、オレの春は終わったのか。いや、今は夏か」

駿はとぼとぼとした足取りで部屋に戻った。

それを見た一也は駿に問い掛けた。

「ん？ おい、どうかしたのか？」

「聞かないでくれ」

「おい、なにそんなにがっかりしているんだよ」

「頼む。聞かないでくれ」

そう言って、駿は一也に背を向けて布団の中に入った。

「なんだ、こいつ」

一也は首をかしげると、駿ほっという眠りについた。

第十三章：二人の想いと絆

旅行に来て二日目が来た。今日で最終日である。明日には帰るのだ。

4人は再び一也たちの部屋に集まると朝食を消費した。

駿はなぜか元気がなくどんよりしている。

滋と渚は雰囲気が違う感じがした。

一也は首をかしげることしかできなかった。

朝食を終えると、一也たちは再び海にむかった。駿が最後に泳ぎたいと言ったのだ。

「さうて、今日は泳ぎまくるぞ！ 最後なんだからな！」

駿は一人大声を出して気合いを入れていた。さっきまで落ち込んでいたくせに勝手に立ち直っている。

「一也さん、今日も泳ぎを教えてくださいませんか？」

渚が一也に話し掛けた。一也は嫌がることなく普通に了解した。

それを聞いた滋は対抗してきた。

「ねえ、一也。サンオイル塗ってくれない？」

滋は水着を外すとうつ伏せになった。

「ねえ、早く塗ってよ」

滋は一也を誘惑するように待っていた。

「まかせろ、滋ちゃん！ オレがやってやる！」

駿は我先にと飛びついてきた。それを滋は足で蹴って追い払った。

「私は一也がいいの。さ、一也。早く塗ってよ」

「自分でやればいいじゃん」

「後ろは届かないでしょ。ほら、つべこべ言わない」

一也はため息を吐くと、しぶしぶ了承した。滋は一度言い出すと聞かないからである。

「悪いな。お前は先に泳いでろよ」

「いえ、いいんですよ。ごゆっくり。あつ、私何か飲み物買ってきますね」

そういうと、渚はそそくさと行ってしまった。

一也は気にすることなく、滋にサンオイルを塗った。

「ねえ、一也」

滋がうつぶせになりながら口を開いた。

「なんだよ。真面目にしてるだろ」

「あんた、かわいい女の子にサンオイル塗っておいて何も思わないの？」

「は？ 別に何も思わねーよ。なんか関係あんのか？」

滋はため息を吐いた。

「わかってないな。まあ、そこが一也らしいけどね」

「なんだよその言い方」

「あんた、いったい誰が好きなの？」

「はあ？ お前はまた何言ってるんだ」

「そういうことはつきりしなさい。悲しむのはあんたじゃないんだから」

「どういうことだ？」

「もっと素直になれてることよ」

一也は滋の言っている意味がわからず、無視して塗り続けた。

そのころ、渚は自販機の前で飲み物を買っていた。

「滋さんはすごいです。あんなこと普通できませんよ。……私も塗ってもらおうかな……。い、いや、あんなことできません！」

渚は人数分の飲み物を買った、一也たちのもとに戻った。

戻ってきたとき、一也はまだ滋にサンオイルを塗っていた。

駿は落ち込んでいるのか、未だに砂浜にうつ伏せの状態で倒れていた。

「なんだ、帰ってきてたのか」

一也は渚の存在に気づくと話し掛けた。

「は、はい。飲み物はこれでいいですか？」

「ああ、ありがとう。こいつの終わったら泳ぎ方教えてやるよ。ちよっと待ってろ」

「い、いえ、いいです。ごめつくりどうぞ」

「ん？ お前もサンオイル塗るのか？」

それを聞いた瞬間、渚の顔はいつきに赤くなった。

「え？ い、いや、いいです！ そんな、一也さんが私のまでしなくても！」

「？ 俺がしなくても、滋がするだろ。さすがに俺じゃ嫌だろ？」

「え、ええと、そ、そんなことは……」

「え？ お前今なんて……？」

「え、いや、その……、そ、そうです。私少し泳いできます」

そう言っつて渚は急いで海にむかって走っていった。

「なんだ、あいつ？」

その様子を滋は見てそつと笑みを浮かべた。

「渚も素直になればいいのに」

「ん？ なんか言っただか？」

「別に。ほら、次は足のほう塗りなさい」

「自分でやればいいだろ」

「もういいじゃない。自分でするのも面倒だし。ほら、さっさとする」

――也は仕方なく言われるままにそのまま続けた。

渚は海の中に入ると、一人静かに肩まで浸かっていた。

周りは楽しそうに泳いだり道具を使って楽しんでいる。自分はただ

何もせず見ているだけ。そこだけ別時空のようだった。

「はあ。滋さんはやっぱり一也さんが好きなんですね。滋さんはかわいいし、頭もよくてスポーツ万能。それにすごいお金持ち。私ではとてもかまいません。……私じゃ、一也さんにはふさわしくありませんよね……」

渚は昨日一也に教わったとおりに泳いでみた。少し泳いだらすぐに足をつけた。その距離は昨日よりも進んでいない。

「こんなの見たら一也さんきつとがっかりしますね。もう少し一人で頑張ろう」

渚は一人寂しく泳ぎの練習を始めた。

一也はようやく滋にサンオイルを塗り終えた。

「さてと、あいつのところに行って泳ぎを教えるか」

一也は立ち上がると海に体を向けた。

すると、滋が突然一也の手を掴んだ。

「ん？　なんだよ。もう終わったろ？」

「……行かないでよ。今は私のところに居て」

「え？　お前何言ってたんだ」

「これは私のために企画した旅行でしょ？　だったら、最後の日く

らい私のそばにいてよ」

滋の目は真剣だった。冗談でも冷やかしてもない。自分の本音を訴えていた。

一也は抵抗できなかった。

昨日の夜、滋は一也に会いに行くためにわざわざ青南高校に来た。そして、こいつは自分のことを想っている。

「……わかったよ」

一也はその場に再び座り込んだ。

「ありがとう」

滋は満面の笑みを浮かべて喜んだ。

そこで、一也は今気づいた。

滋とは幼いころから一緒にいる。だからか、今まで滋を女として見たことがなかった。

ただの友人。それ以下でもそれ以上でもない関係。そうしか思わなかった。

だが、今あらためて滋を見ると、こいつもそれなりにかわいい顔してるし女の子である。

滋も、いつまでも子供ではないということがわかった。

一也は砂浜を見ながらそつと笑みを浮かべた。

「あれ？ 今笑った？ 笑ったよね？」

「笑ってねーよ。何で笑うんだよ」

「でも確かに笑ったような」

「まあ、万が一笑したら駿がおかしいからだな」

「なんで？」

「こいつ、こんな暑いときに未だに砂浜に寝そべっているんだぜ。そろそろ火傷するぞ」

そのときだった。

「暑っち！ 体暑すぎ！ ……うお！ なんじゃこりゃ！」

駿は勢いよく飛び起きた。そして自分の体を見た。駿の背中は綺麗に焼けており、前は肌色。いかにもおかしい色をしている。

一也と滋はそれを見て笑った。

その間も、渚一人ずっと泳いでいた。

「やりました。自己記録更新です。一也さんびっくりしますね。もう少し頑張らしましょう」

渚が地面を蹴ったそのときだった。

「あっ！」

足に激痛が走った。うまく動かない。足がつってしまったようだ。

「そ、そんな……。だ、誰か！」

そこで渚は気づいた。

いつのまにか、自分は他の観光客たちと離れた場所で泳いでいた。

誰も渚に気づかない。

「だ、誰か……。か、一也さん……」

そのまま、渚は力が抜けて頭が海の中に沈んでしまった。

「ん？ おい、渚ちゃんはどこに行っただんだ？」

駿の言葉で、みんなは渚のことを思い出した。

「そっといえば姿が見えないわね。たしか、海で泳ぐとか」

3人は海のほうを見た。しかし、渚の姿は見当たらない。

「どこいったんだ、あいつ。しょうがない。捜してくるか」

一也は立ち上がると、駿も滋も立ち上がり、海に足を進めた。

「おい、渚！」

「渚ちゃん！」

どんなに呼んでも渚からの返答はない。辺りを見回しても姿はどこにも見当たらなかった。

「どこにいったんだ」

そのときだった。

「おい！ あそこに誰がいるぞ！」

一人の観光客が叫んだ方向に目を向けた。

そこには人が波に揺られ沖の方に流されていた。見るからに溺れている。

そして、その姿は渚だった。

「渚！」

滋が叫んだと同時に一也は海に向かって突っ込むと渚めがけて泳ぎ出した。

「一也！」

一也は休むことなくすごい速さで泳いで行く。波がその行く手を妨げる。しかし、どうにかして辿り着いた。

「おい！　おい！　しつかりしろ！」

一也は渚の体を起こすと大声で呼びかけた。

しかし、渚はぐったりとしており、唇は青紫色に変色している。海水を大量に飲んだのか十分に呼吸ができていなかった。

「クソ！」

一也は急いで渚を浜辺に引っ張っていた。

浜辺に着くと、渚を仰向けに寝かせた。駿と滋が心配そうに見ている。その周りは野次馬でいっぱいだった。

「おい、救急車は呼んだのか？」

一也は滋に問い掛けた。

「うん、あと十分くらいで来るって」

一也は舌打ちした。十分も待っていたら遅すぎる。その間に渚は……。

一也は意を決し渚の横に座った。

「か、一也、何するの？」

「こいつを助ける」

「え？」

一也は渚の気道を確保し、人工呼吸を始めた。

「か、一也……」

一也は周りの目を気にせず続けた。

渚の命が救えるなら何でもする。それに、渚にはまだ聞いていないことがあるのだ。

一也渚の鼻孔をふさぎ、気道確保の姿勢のまま、大きく息を吸うと渚の口を覆うかのようにして空気を入れ込んだ。

渚の胸を見て空気が入っているかを確認する。それを2回行くと、次は心臓マッサージを行った。

手を交差させ、胸骨の真上に添えると、肘を曲げずに垂直に力を加える。これを15回繰り返す。

一回目のサイクルが終わり、渚の容態を確認した。

渚の状態は変わらない。一也は何度もこの一連の動作を繰り返した。

「渚……」

「渚ちゃん……」

二人は一也を信じ、渚が息を吹き返すのを待っていた。

すると、渚の口から海水がこぼれた。そして咳き込んだ。

それを見た瞬間、周りの人たちが一斉に歓声を上げた。

「や、やった。甦ったぞ！」

駿が一番大きな声で叫んだ。渚はうつすらと目を開け、寝そべったまま今の状況がわからず呆然として回りを見ていた。

「ど、どうかしたんですか？ たしか、私溺れてしまっ……」

「渚！」

滋が突然渚に抱きついた。

「よかった。本当によかった」

涙を流しながら、滋は力強く抱きしめていた。

渚は何がなんだか分からず慌てふためいていた。

―也は渚の無事を確認すると、そつと笑みを浮かべた。

渚はいったん救急車によって病院に運ばれ、精密検査を受けた。検査の結果、何も異常はなくすぐに帰らせてくれた。

その帰り道、駿がある情報を仕入れてきた。

「おい、今日お祭りがあるらしいぞ」

「お祭り！ わあ、楽しそう」

「いいですね。みんなで行きませんか？」

「賛成〜！」

4人は胸を弾ませながら楽しみにお祭りの時間になるまで待った。

一也たちは辺りが暗くなると、お祭りがある会場にむかった。海の近くに大きな公園がありそこで行われていた。

「うおお、屋台がたくさんだぜ。どれから食おうかな」

「お前、お金持ってるのか？」

「え？ 一也貸してくれないの？」

「お前に貸す金はない」

「な、なんでだよ。頼む！ なんでもするから貸してくれ！」

「じゃあ、今からあのステージの上でアホ踊りしたらいいぞ」

「ほ、ホントか？ よし、やってやる！」

駿は気合を入れるとステージに向かって走り出した。

「……冗談で言ったのに。あいつバカだな」

「あれ？ 茨木くん、どこに行つたの？」

渚と滋が綿菓子を買って戻ってきた。

「あのステージに注目」

一也に言われたとおり、渚と滋はステージに注目した。

駿はステージの上によじ登ると、本当にアホ踊りをやり始めた。

周りにいる客たちは爆笑しているが、中には気持ち悪く退いている者もいた。

一也は腹を抱え大声で笑っていた。渚と滋は驚きながらも某然とみていた。

もちろん、駿は係員に捕まりどこかに連れて行かれた。

「一也……、あんた絶対に茨木くんで遊んでるでしょ」

そのあとは、三人でお祭りの中を見ていった。駿は一也の要望でほっておくことにした。

「皆さん、綺麗な浴衣着てますね」

「うん。かわいいよね。私も浴衣来たいな」

「浴衣なんて着ても着なくても変わんねーだろ」

「一也はわかってないわね。女の子はおしゃれしたいものなのよ」

「ふん」

すると、滋は急に立ち止まった。

「やっぱり茨木くんのこと気になるわ。あなたたち先に行つて」

そういうと、滋は走っていった。

「ほっとけばいいのに」

「それも可哀想ですけど……」

渚は苦笑いを浮かべた。

そのとき、自分が置かれている状況に気づいた。

今自分は好きな人と二人きり。そう考えると緊張してしまう。

「ん？　おい、どうしたんだ？」

「え？　い、いえ、別に……」

「顔が赤いぞ。まだ具合でも悪いのか？」

「い、いえ、そんなことはありません」

「ん？　そうか」

渚は今でも顔を赤く染めながら一也のそばを歩いていた。

どうにかして楽しい時間を作りたい。どうにかして。

「あ、あの、一也さん」

「ん？ なんだよ」

「え、えと、その……」

緊張してなかなか言い出せないでいた。

すると、先に一也が口を開いた。

「なんだ、お前も駿が気になるのか？」

「え？」

「わかったよ。あいつ探しに行くか」

一也は来た道を引き返そうとした。

嫌だ。今はあの二人はどうでもいい。今は二人でいたい。

渚は一也の手を掴んだ。

「ん？ おい」

「……行かないで下さい。今、私だけを見てください」

自分でも何を言っているのかわからなかった。気がついたら口走

っていた。こんなこと言えば、きっと自分のことが嫌になる。無責任なことを言っている。でも、今は……。

「わかったよ」

「え？」

「海で泳ぎを教えなかった償いだ。二人だけで楽しもう。行こうぜ」

「はい」

二人はいろいろな屋台を回って楽しい一時を過ごした。

楽しい。渚はこの気持ちで胸がいっぱいだった。

今思えば、一也と出会ってから毎日のようにいる。いつしかそれが当たり前になっていた。

一年生のころは持病のせいであまり学校に通えず友達もできなかった。だが、今は3人も友達がいる。そう思うだけで幸せだった。

全で一也のおかげ。どんなに感謝してもしきれない。それほどあり難く思っている。いつか恩返しがしたい。

渚は隣にいる一也の手を握んだ。

一也は最初は少し驚いたが拒むことなくそのままにしてくれた。

渚は頬を少し赤く染めながら笑みを浮かべるとあらためて思った。

やはり、自分はこの人が好きだ。その気持ちは、あのときから変わらない。

そして、一也と渚は海に來ると浜辺に座った。

夜の海も綺麗だった。静かな波の音と、海に反射している月、夜空に輝く星が瞬いていた。

「綺麗な空ですね。明日で帰るのは残念ですね。もっといてもいいのですが」

「ああ。でも、あっちだって楽しいことはあるだろう」

「そうですね」

そのあとは静寂なときが流れた。口を閉じて景色を眺めている。

一也は渚に聞こうか迷っていた。

今なら聞けるチャンスだ。駿と滋はいない。渚と二人きり。あれを聞くななら今しかない。

「おい」

「はい？」

「お前、俺と昔会ったことがあるって言ったよな」

「あつ、……はい」

「それって、いつ、どこで会ったんだ？ 俺には思い出せない」

「……一也さんは、運命を信じますか？」

「運命？」

「はい。よく運命の出会いとか聞きますよね。私は本当に運命の出会いはあると思います。人それぞれ、運命の瞬間は訪れます」

「それで、俺とお前の出会ったのも運命っていうのか？」

「私はそう思います。あのとき、あの屋上で出会ったのは運命の出会いだったのかも知れません。……あそこであつたのも」

「あそこって？」

「私たちが最初に出会った場所です。そこは、この旅行から帰ったあとで教えます。話すならそこがいいですから」

「わかった」

再び、静寂な時が流れた。

一也は早く知りたかった。渚とどこであつたのか。それが、自分とあいつとの手がかりとなるから。

次は渚のほうから口を開いた。

「あ、あの、一也さん。一也さんは、星を見て不思議に思いませんか？」

「いや、別に何も思わないけど」

「星ってあんなふうにそれぞれ近くにあるように見えますけど、本当は違うんですね。ここからじゃわかりませんが、星は一つ一つ離れている。それも計れないほど遠く。私は星と人間の心は似ていると思います」

「心と似ている？」

「はい。ずっと仲良くしている友達も、信じあっている恋人も、普通に見れば楽しそうに近くにいる。でも、よく見ればそれは間違いで心は離れているのかもしれない。だから、ケンカもしますし、別れたりもします。私は、そう思っています」

一也は黙って聞いていた。

渚がそんなことを考えているとは思わなかった。

たしかにそうかもしれない。自分も心がみんなと離れていたから友達も仲間もいなかった。まるで、星のように。

「一也さん。私と一也さんと駿さんと滋さんの4人の心は遠く離れていないと思います。ずっと、近くにあると思います」

「ああ、そうだな」

そのとき、目の前に大きな花火が上がった。海の方こうから打ち上げているのだろうか、ここからよく見えた。

「わあ、綺麗ですね」

渚は立ち上がると、前の方へ歩き花火を見た。一也はそのまま座って見ていた。

すると、渚は一也に振り返った。

「一也さん。私は、いつでも一也さんのそばにいますからね」

渚は満面の笑顔を浮かべた。バックには綺麗な色とりどりの花火で輝いている。

一也はそんな渚を見て一瞬ドキッとしてしまった。

今までこんなことがなかったのに。今渚を初めてかわいいと思った。

「ん？　どうかしましたか？」

「え？　い、いや、別に」

そのとき、遠くのほうから声が聞こえた。

「おい、一也！　渚！」

声のする方を振り向くと、そこには駿と滋が手を振ってこっちに来ていた。

「あつ、駿さん。滋さん」

渚も大きく手を振りかえした。

4人は浜辺で打ち上げられる花火と一緒に見ていた。

第十四章：罪滅ぼし

一也たち一同は旅行から帰って来た。

いったん一也の屋敷の前に集合し、滋の送別会を行った。

「みんな、ありがとうね。今回の旅行は楽しかったよ」

滋はみんなに向き直ると、改めてお礼を言った。

「いいえ。楽しんでくれてよかったです」

「あつちの高校で頑張れよ」

「うん」

滋は満面の笑顔で返事をする、最後に一也に向き直った。

「一也……。ごめんね、いろいろ迷惑かけちゃって。でも、私の気持ちわかって。どうしても、こうしたかったの」

滋の言葉を一也は無言のまま聞いていた。

そして、そつと滋の近づくと、ぽんと頭に手を置いた。

「会いたかったら俺の屋敷に来い。……いつでもな」

それを聞いた滋は嬉しそうにうつすらと目に涙を浮かせながら元気よくうなずいた。

「うん」

その様子を駿と渚は暖かい眼差しで見ていた。

「それじゃあ、みんなまたね」

そう言っただけで滋は大きく手を振りながら自分の屋敷に戻っていった。

「さてと、オレも帰るかな。じゃあな、お二人さん」

駿も鞆を持ちながら、滋とは反対方向へ帰っていった。

その場には一也と渚の二人だけとなった。

一也は渚に向き直ると、少し戸惑いながらも口を開いた。

「お前も帰るか」

「はい。今回の旅行は楽しかったです。でも、ちょっと疲れました」

「そうか……」

一也はあのことを話した。

「教えてくれよ。俺たちがいつ、どこで会ったのか」

渚は少し間を置くと、ゆっくりとうなずいた。

「はい。必ず教えます。でも、ちょっと待ってください。私も、心

の準備がありますので」

「そうか。わかった。いつでもいいから連絡してくれ」

「はい。わかりました」

それから会話が途切れてしまった。二人は何もせずその場に突っ立ったままである。

すると、渚が少し頬を赤く染めながら口を開いた。

「あ、あの、私が海で溺れたとき、一也さんが助けてくれたんですね？　ありがとうございます」

「ああ、いいよ。助かってよかった」

「はい。それで……、その、私水を飲んでしまっていたので……、あとで滋さんに聞いたのですが……、じ、人口呼吸をしたんですね」

それを聞いた瞬間、あのときのシーンを思い出した。

みんなの前で渚の口に向かって人工呼吸をした。あれはキスをしたようにも見える。

渚は恥ずかしそうに自分の唇に触れていた。

一也は多少照れながら言い訳した。

「あ、あれは、仕方ないだろ。命に関わったんだから。助けるためにしたんだ」

「はい。ありがとうございました。……でも、三回目ですね」

「え？」

渚は顔をさつきよりも赤くしながら口を開いた。

「これで、一也さんとキスしたのは三回目ですね」

一也は違和感を覚えた。

三回目？ 渚とは記憶の中ではキスしたのは二回のはず。なぜ三回なのだろうか。

「俺とお前がキスしたのは二回だろ？」

そこで渚は恥ずかしそうに答えた。

「実は、前にもあるのです。一也さんとキスしたことが」

「え？」

「それは今度話しますね。それでは、旅行楽しかったです。また」

そう言っつ渚は家に帰っていった。

一也はじつとその後ろ姿を見ていた。

いったい、自分と渚と何があったのだろうか。できれば今すぐ知りたい。そして、あの言葉の正体も。だが、渚は時間が欲しいと言っ

た。

しかたなく、一也は諦めて屋敷の中に戻っていった。

旅行を終え数日が経った。

蝉がうつとおしく鳴きつづけ、灼熱の太陽は容赦なく熱を送っていた。気温は毎日28度を超す。

蒸し暑い中、皆ハンカチを手にして歩いていた。

一也は何もすることがなく、エアコンの点いた涼しい自分の部屋でゆっくりとくつろいでいた。

「ご主人様、お飲み物をお持ちしました」

「ああ、ありがとう」

一人のメイドが、一也が座っているソファの前のテーブルに氷の入ったグラスを置いた。

そして、そっとベッドの方を見た。

「もう一つお持ちしましょうか？」

「いや、いいだろ。あいつはここにいるだけで満足のはずだ」

一也のベッドには駿がいた。

駿の家にはエアコンがなく、暑さに我慢できずにここに泊まりに来たのだ。迷惑な話である。

「承知いたしました。失礼します」

メイドは一礼すると部屋から出て行った。

駿は相変わらず幸せそうな顔をして寝ている。

一也はそつと自分の携帯を手にした。

あれから随分と経った。しかし、渚からの連絡は来ない。

心の準備と言っても、一日二日くらいで十分だと思ったのだが、すでに一週間は過ぎている。

自分からかけてもいいのだが、もしまだ準備ができていなかったら迷惑だ。

それに、何か自分でかけることができない。嫌に緊張してしまう。自分らしくない。

一也は携帯を放り投げ、気長に待つことにした。

すると、突然携帯の着信が鳴り響いた。

一也は再び手にすると、着信相手は渚だったことがわかった。

一也はすぐに電話に出た。

「もしもし」

「あ、一也さん。こんにちは」

「ああ、こんにちは。それで、準備はできたのか？」

「はい。全て話します。明日、私の家に来てくれませんか？」

「ああ、かまわねーよ。じゃあ、明日な」

「はい」

一也は携帯を耳から外すと通話を切った。

とうとうわかる。あいつとの昔の関係。そして、あの言葉と少女の正体が。

一也は体が震えたのがわかった。

怖がっているのだろうか。それとも緊張？ いや、そんなやわな自分ではない。きっと嬉しいのだろう。知リたかったことがわかる。これで、全て……。

約束の日。

一也は準備を済ませ、自慢のバイクに跨った。

「いつてらっしゃいませ。一也様」

小林が頭を下げて見送った。

「ああ。それと、駿には俺のことは何も言わないでくれ。後々面倒だからな」

「かしこまりました」

それを聞いた一也は、渚の家目指してバイクを走らせた。

渚は家の前に出て一也を待っていた。一人何もせず、ぼつんと立っていた。

渚の目の前には小さな公園がある。

家の敷地二個分くらいの広さと、木で太陽の光が当たらない二つの木造ベンチ。そして小さな遊具だけあった。

渚はそつと空を見上げた。

透き通ったような夏の空。晴れ渡ったこの空は、雲一つない。

「とうとう話すときがきたんですね。……信じてもらえるかわかりませんが、正直に言うしかない」

渚は指を前で絡ませながら少し頬を赤くした。

「ちょっと恥ずかしいな。あんなこと話すのは」

渚は小さく照れ笑いを浮かべた。

すると、横から声が聞こえた。

「お前が一也の友達か」

渚は声のしたほうに振り向いた。

そこには何人もの不良が立っていた。

「ちょっと付き合いな。おとなしくしていたら何もしない」

髪が短く、ネックレスやピアスをしている不良が話し掛けてきた。

渚は怖くなってうまく口が動かさなかった。

「悪いが、利用させてもらっぜ」

数人の不良たちが渚に近づいてきた。渚は後ろに後ず去ったが、すぐに腕を掴まれてしまった。

「か、一也さん！」

一也はバイクを走り続けること15分くらいで渚の家に着いた。

しかし、渚の姿は見当たらない。さっき桜さんに聞いたが家にもいないと言われた。

「どこいったんだ、あいつ。よく迷子になるやつだな」

すると、ポケットに入れてあった携帯が鳴り響いた。

一也はその相手が渚だと思いすぐに出た。

「おい、お前どこにいるんだよ。今お前の家の前にいるんだぞ」

「……お前が伊集院一也だな」

「は？」

一也は咄嗟に携帯を耳から離れた。

聞き覚えのない声。しかし、着信相手は渚からとなっている。

「誰だよ、お前。あいつはどうした」

「お前の彼女なら一緒にいる。お前はさっさとこっちに来るんだな」

そこで一也は今の状況を理解した。

これは誘拐だ。どこのどいつか知らないが、一也を狙った反抗だ。友達である渚を使って呼ぼうとしたのだろう。

一也は拳に力を込めた。

「それで、どこにいけばいいんだ？」

一也は場所を聞くと、すぐにそこに向かってバイクを走らせた。

一也はある古びた廃棄病棟の前にいた。

窓ガラスは一つもなく、大きな白い建物が立っているだけだった。周りは空き地でなにもない。

一也は周りを見渡し考えた。

「ここなら誰にも邪魔されないか……」

一也は昔のようにあのときの想いは消えていた。

昔の自分なら、容赦なく相手を倒そうという想いで乗り込んでいく。

しかし、そんな気持ちはすでに心の中から消えていた。

一也は廃棄病棟の中に入り、どんどん奥の方へと歩んでいた。

中は異様な雰囲気包まれていた。夜に行けば幽霊が出そうである。

滅びた廊下は、いかにも地獄に通じているように感じた。

そしてある大きな部屋の中に足を踏み入れた。

ここはホールなのだろうか、十分な広さがあった。おそらく、ここで病人の心をケアするために使う場だろう。

オリエンテーションなので使いそうな場のような感じがする。

そしてそこにはやはり何人もの目つきの悪いやつらが群がってい

た。

そこで一也は驚嘆した。

渚は椅子に座っており、体と口を紐で縛られていたのだ。

「お前……、お前から何してんだ！」

一也はホールに響くくらいの大声を上げた。

しかし、みんな笑っている。

その中から、一人の男が出てきた。渚に最初に話し掛けた男だった。

「久しぶりだな、伊集院一也。おれを覚えているか？ 昔お前とやりあったんだけどな」

一也はじつとその男を見た。しかし、まったく見覚えなかった。

「お前なんか知るかよ。それより、そいつを放せ」

渚は口に縛られたハンカチを振り解こうとしていた。それを見た隣の不良が外した。

「一也さん！ 逃げてください！ この人たちは一也さんに仕返しをするそうです」

「なに？」

すると一也に話し掛けた男が笑い出した。

「ああ、そうだ。おれは仕返しに来たんだ。見るよ、この傷」

男はそつと右腕に袖を捲くつた。そこには大きな古傷があつた。

「これを見るたびに怒りが芽生えるんだ。おれの人生は狂つてしまつた。なあ、この街ケンカ最強の一也。その前はおれだったんだけどな」

そこで一也は少し思い出した。

そういえば、前に街で一番強いやつとケンカしたことがあつた。

「ああ、お前か。たしか中田隆志^{なかたたくし}って言つたけ？俺が一番になりたくて前にやつたな」

「ようやく思い出したか。もう一度おれとやり合おうぜ。少しは力が着いたんだ」

「悪いけど、俺はもうケンカする気ないんだ。そんなに一番の称号が欲しいならくれてやる。だからそいつは離せ」

中田は悪い笑みを浮かべた。

「そいつはできないな。なんだよお前、びびってんのか？らしくないな。昔はもっと鬼のような目してたぞ。今では相棒の駿がいないと何もできないのか？」

「駿はいないほうがいい。あいつがいると邪魔になるだけだからな」

「ふん。そうかよ。話しはここまでだ。そろそろやるぞ。心配しなくても、やるのはおれ一人だ。全員対一人なんて卑怯なマネしねーよ。それじゃあ、いくぜ」

中田はゆつくりと前に出てきた。一也も少し遅れて出てきた。

そして二人の距離が縮まった瞬間、中田は一也の顔面めがけて拳を振るった。

「おりゃー！」

しかし、一也はそれを余裕の表情で避けた。

「なんだよ、あの時みたいに殴って来いよ！」

中田は避けた一也にむかって何度も振りかかる。

一也は何も手を出さず、避けるばかりだった。

「オラ！ オラ！ どうした！ それでも男かよ！ 殴って来いよ！」

しかし、一也は何を言われても手を出さない。

中田は一也と距離を置くと立ち止まって舌打ちをした。

「なんだよなんだよ。お前えらく大人しくなったな。覚えてるか？ お前の目上にある傷を着けたのはおれなんだぜ。その仕返しはしなくていいのかよ」

一也はそつと目上にある傷に触れた。たしかに、ここに治療された跡がある。だが、覚えていなかった。

中田は一息吐くと、渚にむかつて足を進めた。

「かかってこねーお前とやっても意味がねー。少しやる気を出させるか」

中田は渚の前に立つと、腕を振り上げた。

それを見た一也は声を上げた。

「よせ！ やめろ！」

遅かった。すでに中田の腕は振り落とされ、渚の頬は赤くなっており横を向いていた。

渚は頬を叩かれた。

目に薄っすらと涙を浮かべながら痛みに耐えていた。

「お前……」

一也は拳を強く握った。

「てめえ、よくも……」

一也は中田めがけて走り出した。

怒りで我を忘れていた。さっきまでの余裕は無くなり、今は中田を

倒すことしか頭に無かった。

「ぶっ殺してやる！」

一也の拳が中田を捕らえる。そのときだった。

「一也さん！」

一也は拳を止めた。そしてそっと渚のほうを振り向いた。

渚は真剣な目つきで一也を見ていた。

「もうケンカはしないでください。人を傷つけるのは止めてください。……きつと話し合いで解決できます。私は大丈夫ですから」

そういつて渚は笑みを見せた。いかにも強がって無理に作っている笑顔だった。

そうだった。だから、ずっと手を出さずに逃げ回っていた。

一也は拳を降ろすと、中田に頼み込んだ。

「頼む。もうケンカはしないと誓ったんだ。……お前の勝ちでいい。だから、あいつは解放してくれ」

それを聞いた中田は、床に唾を吐くと、一也めがけて拳を振るった。

殴られた一也は仰向けに倒れた。

「ああ、ああ。なんだよお前。こんなやつ言うこと聞くのか？ 随分変わったな。こんなやつ倒しても何の自慢にもならねー。こんなヘタレとは思わなかったよ。……おい、やっていいぞ」

中田は懷からタバコを取り出すと、一本を加えながらステージの上に座り込み、陽気に煙を吐いた。

その場にいた何人もの不良たちは、倒れている一也めがけて歩みよった。

「……やれ」

中田の合図で全員が一也に襲いかかった。

一也は何も抵抗することなくやられていく。

渚は信じられない気持ちと罪悪感でいっぱいだった。

自分のせいだ。あんなこと言ったから。人を傷つけるな。話し合いで解決できる。そんなこと言ってその結果がこれ。

渚は中田にむかって頼み込んだ。

「お願いです。もうやめてください。一也さんが死んでしまいます」

「ああ？ 知るかよ。死ぬならそこまでってことだろ。だいたい、お前がケンカするなって言ったんだし」

それを聞いて渚は後悔した。

あんなこと言わなければこうならなかった。

一也の呻き声が聞こえる。

もう十分のはず。十分に苦しめた。なのにやめようとしな。

渚は紐を解こうとした。しかし、頑丈に縛ってある紐は解けない。

何もできなかった。自分の責任なのに、自分の過ちなのに助けることができない。

渚は溢れ出てくる涙を流しながら必死に助けようとした。

「一也さん……！」

数時間後。

その場には二人の姿しかなかった。

あたりはすでに真っ暗になっており、窓から入ってくる月の明かりだけが自分たちを照らしている。

渚は一也のそばにしながら涙を流していた。ホールには渚の嗚咽しか聞こえない。

「一也さん……」

一也の状態ぼろぼろだった。

ところどころを赤く、または青く腫れあがり、頭を切ったのか血が
したっていた。どこか骨折をしているかもしれない。それほどの大
怪我だった。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめ
んなさい……」

渚は何度も一也にむかって謝った。

すると、一也がようやく意識を取り戻した。

「うつ……。くっ！」

「か、一也さん」

「お前……無事だったのか？」

「わ、私は大丈夫です。それよりも……」

すると、一也は痛々しい左手を挙げ、渚の頭に触れた。

「……よかった。お前が無事で……」

「一也さん……」

渚は一也の手を握った。

ぼろぼろになった左手。自分を助けてくれた。申し訳なさど罪悪感。
そして助けられた嬉しさで心はいっぱいだった。

「一也さん……ごめんなさい。私、勝手なこと言って……一也さんをこんな目に合わせて。……本当にごめんなさい」

渚は一也の胸を上顔顔をうずめた。

一也はその場に倒れたまま十分にしゃべれない声で口を開いた。

「……別にお前のせいじゃない。……いつかこうなるとは思ってた。……今まで、俺は何人もの人たちを傷つけてきた。これが俺の今までしてきたことの罪滅ぼしだ。……一人だった俺は闇雲に倒れていた。……でも、お前はそんな中俺を救ってくれた。……今、俺は一人じゃない。駿も滋も小林もいる。そして、……お前もな」

それを聞いた渚は顔を上げた。

一也は小さく笑った。

「……これで、俺はお前を救えたよな。助けることができたんだよな」

渚は涙を拭くと、満面の笑顔になってうなずいた。

「はい。一也さんのおかげで助かりました。ありがとうございます」
それを聞いた一也は小さくうなずいた。

「……渚」

渚ははっとして一也を見た。

今、確かに聞こえた。自分の名前を。一也の口から聞こえた自分の名前を。

一也から名前を呼ばれたのは初めてだった。

「渚……これからも、お前は俺が守るからな」

渚の目から再び涙が零れた。涙を流しながら、渚は震える声で返事をした。

「はい」

渚は一息吐くと、一也に言った。

「一也さん、全て話します。私たちの過去を。今だからこそ言えます」

一也はうなずいた。

「ああ、話してくれ」

「はい……」

渚は月を一目見ると、ゆっくりと話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4319f/>

愛は、恋に恋すること

2010年10月9日05時06分発行